

第5章 2008年度調査（本丸）

第1節 調査の方法

概要 調査区は本丸北西部に位置する（第1図）。池泉工事計画に伴い 118 m²について発掘調査を実施した。公園緑地課との協議により、工事計画に影響すると判断された深さまでを調査対象とし、それより下層については現状保存とした。ただし、ここまで検出された土坑などの遺構は、調査対象となる標高以下であっても基本的に完掘した。調査対象深度まで 2 層の遺構面を検出した。

表土掘削・人力掘削 2009年2月23日から表土掘削を開始し、調査員立会いのもと、バックホウにより近代以降の層を除去した。表土の掘削後、2月24日からジョレン、スコップを使用し、上層面の遺構検出作業を行った。上層面は近代以降の搅乱が主であったため、石組溝SD1と廃棄土坑SK1のみ重点的に掘削した。上層面の調査完了後、引き続き下層面への調査に移った。下層面までの間の包含層についてはジョレンとスコップにより面的に掘り下げた。この間に出土した遺物は基本的に座標による取り上げを行った。包含層を掘り下げていったところ硬化した整地面を検出したため、ここを下層面として遺構検出と遺構掘削を行った。

遺構掘削は、移植ゴテを用いて行った。半載での掘り下げを行い、土層状況の確認後に完掘した。また、規模の大きな溝等はセクションベルトを設定して埋土の把握に努めた。遺構出土遺物は、小規模な遺構や細片については一括取り上げとし、主要なものは座標による取り上げとした。上層面に多くみられた搅乱は完掘していない。

記録作業 平面図・断面図は、トータルステーションで基準点をおさえ、手測により縮尺20分の1で作成した。測量の公共座標は旧系の日本測地系によった。

写真撮影は6×7判と35mm判を用い、デジタルカメラも併用した。

現地説明会 2009年3月25日に現地説明会を実施した。雨が降る悪天候であったが、約40名の市民の参加があった。現場プレハブ小屋では主要遺物の展示公開も行った。

埋戻し 3月31日に埋戻し、機材撤収を行い、調査を完了した。

整理作業 現地調査終了後から、報告書作成に向けた整理作業を富山市埋蔵文化財センターにおいて行った。洗浄・注記後、遺構ごとに出土遺物を区分し、主要遺物を抽出した。抽出した遺物の実測・トレース、および遺構トレースについては、2012年度に株式会社太陽測地社、2014年度に株式会社イビソク北陸支店に公園緑地課から委託し、埋蔵文化財センターが監理にあたった。

また、2010年度に遺物の保存処理と自然科学分析（放射性炭素年代測定、胎土分析）を株式会社吉田生物研究所に委託した。自然科学分析は同社からの委託を受けた株式会社パレオ・ラボが実施した。



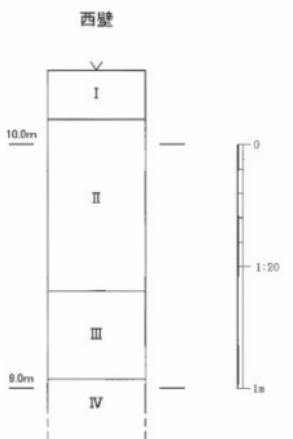
調査風景

第2節 基本層序

調査区西壁の土層を示す。I～IV層に大別でき、II～IV層はさらに細かい土層に分かれる。工事計画で影響のある深度までが調査対象であるため地山は未検出である。

I層は表土である。調査当時の地表面は調査区の南部が標高約 10.4 m、北部が約 9.9 m で、北下がりの傾斜であった。II層は近現代の造成土で灰色系土を主体とする。約 0.5 ~ 0.7 m の厚さがある。III層は、灰色系土・茶色系土からなる近世造成土で、0.35 m 程度の土層が水平に堆積する。IV層上面が上層遺構検出面である。IV層は黄褐色系土を主体とする近世整地層である。しまりのある薄い土層を重ねて盛っている。IV層上面が下層遺構の検出面である。この整地層は、後述するように本来さらに広範囲に存在したとみられるが、後の時代に削平されている。

なお、調査区南壁際で一部深掘りを行ったところ、標高 8.1 m で地山の可能性がある明灰色砂層を検出した。部分的な確認であるため断定はできないが、これが地山層なら、現代まで 2m あまりの堆積があることになる。



第33図 2008年度調査区基本層序

第3節 遺構

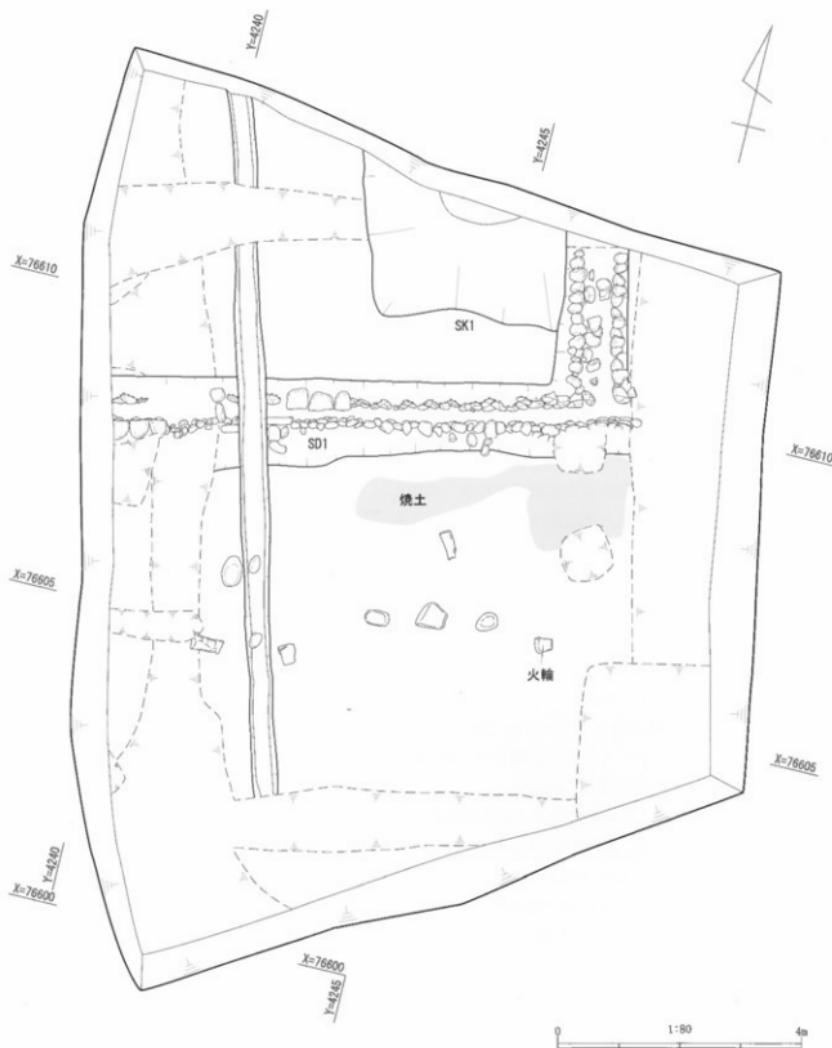
(1) 上層面（第34・35図）

上層面の遺構は標高約 9.3 ~ 9.4 m で検出した。遺構の形成時期は明治期以降と考えらえる。このうち遺物を多く含む SK 1 と石組溝 SD 1 については調査対象とした。これ以外の掘り込みは近・現代の搅乱であるため完掘していない。

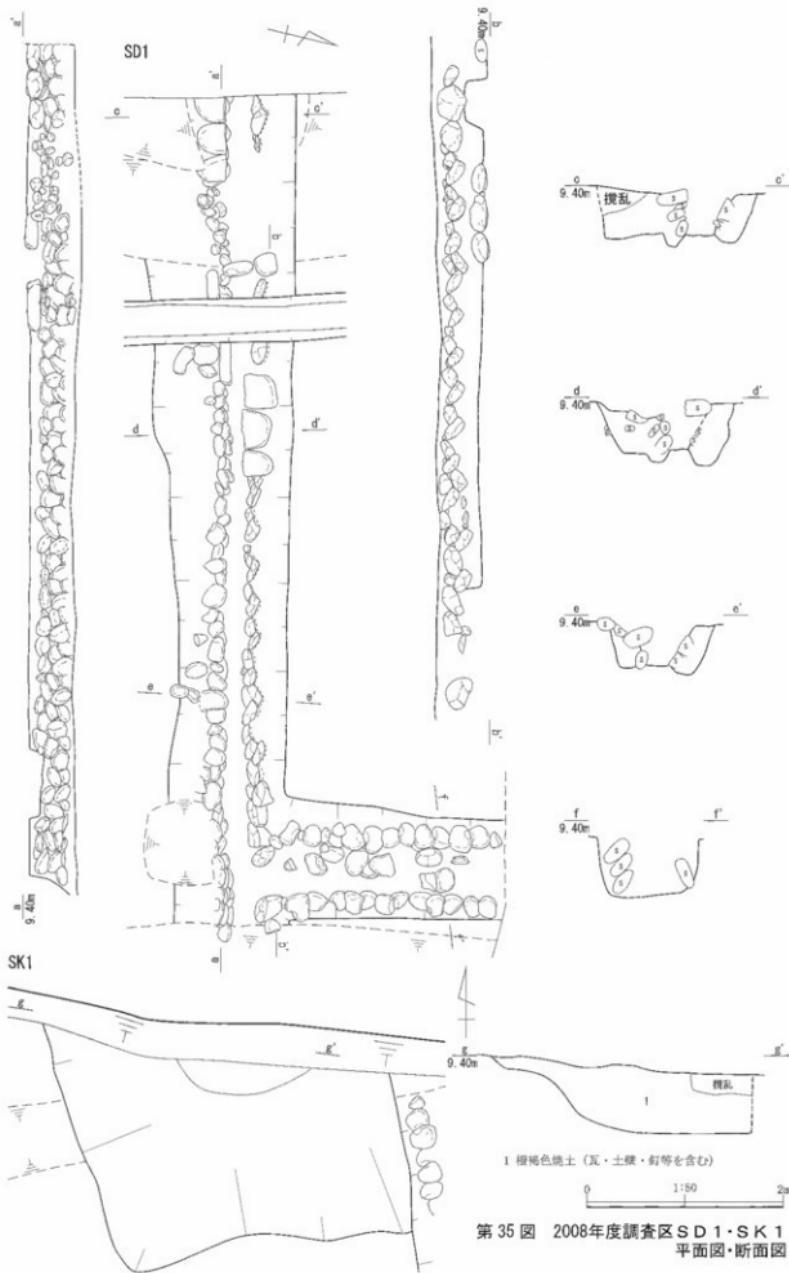
SD 1（第35図） 石組溝である。調査区中央部を東西に延び、東部で北に直角に折れ曲がる。検出長は東西方向 8.5 m、南北方向 2.4 m である。溝内部の幅と掘り方の幅は、それぞれ東西方向が約 0.2 m と約 1.1 ~ 1.5 m、南北方向が約 0.4 m と約 1.2 m である。深さは東西方向が約 0.5 m、南北方向約 0.6 m で、東西と南北部分で幅・深さがやや異なる。走行方向は N - 75° - E と、これに直交する N - 15° - W で近世の本丸の地割に一致する。流水方向は、底面標高から西から東、そして北へ向かう流れであったと推定される。

石の積み方も東西方向と南北方向で違がある。東西方向は、北壁が半割した玉石の割面を表面にし、斜めに積み上げる。南壁は長さ 30 cm 前後の玉石をそのまま矢羽状に積んでいる。いずれの壁面も控えが斜め下に長く延びる。これに対して、南北方向の溝は、東西壁面とともに 30 cm 前後の玉石を矢羽状に積む方法である。なお、溝の西端部とそこから約 2 m 東の地点では、壁の最上面で半分に割ったやや大きめの石を 3 石ずつ確認した。溝の天端石とみられ、この石の上面付近が当時の地表面と推

上層



第34図 2008年度調査区上層面遺構全体図



測できる。

溝の埋土からはガラス瓶等、近代とみられる遺物が出土し、石の積み方も近代的な特徴が認められることから、構築は明治期とみられる。東端部の南壁付近では上からコンクリート基礎が入る。また、後述する SK 1 を掘り込んで構築していることから、SD 1 は SK 1 より新しく、コンクリート基礎より古い時期である。SK 1 は明治 32 年（1899）の大火後の廃棄土坑とみられ、コンクリート基礎は明治 33 年に建てられた県庁に伴う可能性があるので、SD 1 は明治 32 年から明治 33 年までの短期間に構築・使用された可能性が高い。北側の内堀に排水を流し込むための排水路と考える。

SK 1（第 35 図） 調査区北東部で検出した。北側は調査区外に広がり、東側は後に構築された SD 1 と搅乱によって失われている。不定形で、検出規模は 3.2 m × 2.6 m 以上、深さは 0.7 m である。

埋土の主体をなすのは橙褐色の焼土で、焼土に混じって桟瓦、和釘、土壁、炭化物等が出土した。土層観察から埋土は段階的に埋まつたのではなく、一気に埋没していることが看取できる。なお、SD 1 を挟んで南側にも焼土層の広がりが認められるが、これも SK 1 と同時期に堆積した一連の焼土と考えられる。

本遺構は、火災後の後片付けに伴う廃棄土坑とみられる。時期は、層位や出土遺物から明治期と考えられるが、この間に生じた火災として最も可能性が高いのは、明治 32 年に起きた大火である。この火事で旧城域の半分以上が延焼し、廃藩置県後に県庁として利用されていた旧本丸御殿等、公園内に存在した施設が焼失した。焼失した建築物の廃棄物を処分するため直近に穴を掘って埋めたと推測される。

（2）下層面（第 36 ~ 39 図）

整地層 1（第 36・37 図） 標高約 9.0 m で硬化した整地面を検出した。この面が下層遺構検出面に相当する。整地面は不整形な 2 つのブロックに分かれて検出され、東側のものは調査区中央から北に細長く伸び、西側のものは調査区南西部を南北に細長く伸びる。この整地面は、当初からこの不整形だったのではなく、より広範囲にあったものが後に周囲が掘削されたことによって現在の形状になったことが土層断面の観察からわかる。北部では 0.1 m 程度低いレベルで検出されたが、これは上面が後世に削平されたためである可能性が高い。

整地面を断ち割った断面観察によると、砂質土を薄く複数層重ねてしまりの強い盛土層を形成している。特に調査区中央部の東西断面（第 37 図整地層①）で顕著に認められ、厚さ 5cm 程度の砂質土を一単位とし、黄色系と灰色系の異なる土層を交互に盛っている。調査区南部の南北断面（第 37 図整地層②）では上方に薄い土層（2 ~ 6 層）を重ね、その下の 7 層はやや厚めの 20 cm 程度の砂質土が盛られている。調査区北部の南北断面（第 37 図整地層③）では、厚さ 10 cm 程度の粗砂、砂質土（7 ~ 10 層）を水平に盛っている状況が確認できる。場所によって盛土の単位や方法にやや違いはあるが、細かい砂質土によって形成されている点は共通する。

時期は、16 世紀後半と推測する。

整地層 2（第 37 図） 整地層 1 の断ち割りを行ったところ、整地層 1 の上面から約 0.3m 下の標高 8.8 m 付近で別の固く縮まった整地面を検出した。第 37 図北壁断面図の 35 層、整地層①断面図の 22・23 層、整地層②断面図の 8 層、整地層③断面図の 11 層が相当する。面的に検出していないため詳細は不明であるが、整地層 1 ほど細かい単位ではなく、22 層は西に向かうほど厚みを増し、水平な堆積をなさない。整地層 1 に伴う基礎作業の可能性もあるが、盛土の様子に違いが認められることを積極的に評価すれば、一段階古い時期の整地層の可能性がある。

整地層掘り込み（第36・37図） 前述した整地層は、周囲が後の時期に掘り込まれて削平されている。整地層が存在しない部分は、この掘り込みがなされた場所と推定できる。掘り込み状況を断面図で観察すると、整地層の東西断面図（第37図整地層①）では、整地層を切り込んで垂直に近い角度で掘り込まれている地点が3カ所ある。深さは東側（12・13層）が0.52m、中央（7～11層）が0.66m、西側（4～6層）が0.58mである。第37図整地層②の南北断面図では1層が掘り込みの埋土であるが、掘り込み角度は緩く、深さも0.35mと浅い。整地層③断面図も比較的緩やかな掘り込みであることがわかる（4～6層）。

掘り込み理土からは、16世紀末から17世紀後半の遺物が出土した。出土状況図（第38図）によると、SK7付近とSK6東側での出土が多い。いずれの土坑も遺物を多く含むため、もともとSK6およびSK7に伴っていた遺物が掘り込みによって付近に散乱したとみられる。特に焼壙壺はSK7に伴っていたものの可能性が高い。したがって、出土層としては整地層掘り込みであるが、本来は各土坑に伴う遺物が一定量含まれているとみられる。

掘り込みの目的は明確にしにくいが、規格的でないことやSK7・SK6など近隣遺構と同様の遺物を含むことから、いったん掘削した後、再び同じ土砂で埋め戻すといった行為が考えられる。

SK2（第39図） 調査区中央部で検出した。長円形を呈し、長軸0.76m、短軸0.34m、深さ0.15mである。出土遺物はない。

SK3（第39図） 調査区中央部で検出した。不整円形を呈し、長軸0.54m、短軸0.46m、深さ0.06mである。断面形は浅い皿状である。出土遺物はない。

SK4（第39図） 調査区中央部で検出した。長円形を呈し、長軸0.82m、短軸0.68m、深さ0.36mである。出土遺物はない。

SK5（第39図） 調査区西部で検出した。長円形を呈し、長軸0.50m、短軸0.34m、深さ0.20mである。出土遺物はない。

SK6（第39図） 調査区南西部で検出した。長円形を呈し、長軸1.25m、短軸0.88m、深さ0.30mである。底面は平坦で壁面が斜めに立ち上がる。土師器、唐津が出土した。16世紀末～17世紀初頭の遺構とみられる。

SK7（第39図） 調査区北西部で検出した。北側が調査区外に広がる。ほぼ円形を呈すると推測される。規模は東西約1.25m、南北1.14m以上、深さ0.44mである。遺構検出段階では別の掘り込みとの切り合いがあり平面プランは明確でなかったが、掘り下げるなかで、遺物が集中してみられることや土層断面の観察から遺構の存在を確認した。北壁土層断面図（第37図）の28～31層が埋土である。土師器、越中瀬戸、唐津、焼壙壺が出土した。17世紀前半と考える。

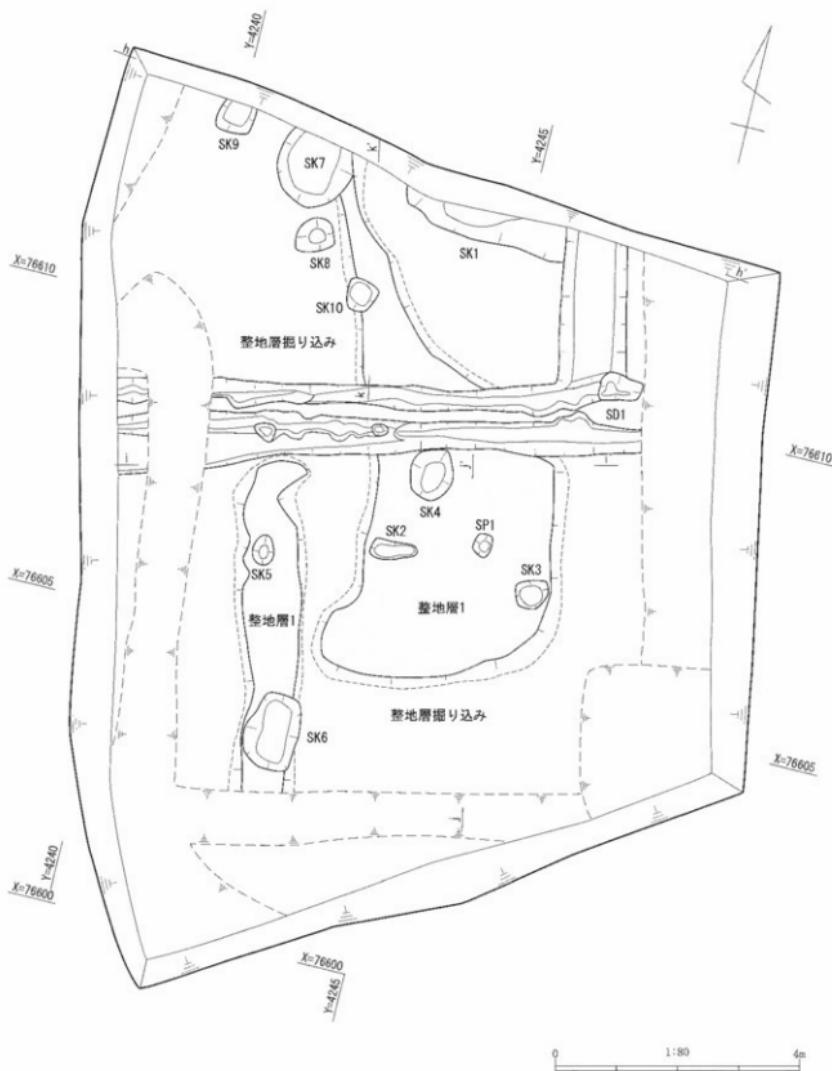
SK8（第39図） 調査区北西部、SK7の南側で検出した。長円形を呈し、長軸0.65m、短軸0.54m、深さ0.14mである。出土遺物はない。

SK9（第36図） 調査区北西部で検出した。方形を呈し、東西0.59m、南北0.52m以上、深さ0.06mの浅い掘り込みである。出土遺物はない。

SK10（第36図） 調査区北西部で検出した。台形状を呈し、長軸0.53m、短軸0.50m、深さ0.49mである。出土遺物はない。上層面から掘り込まれた近代の土坑である。

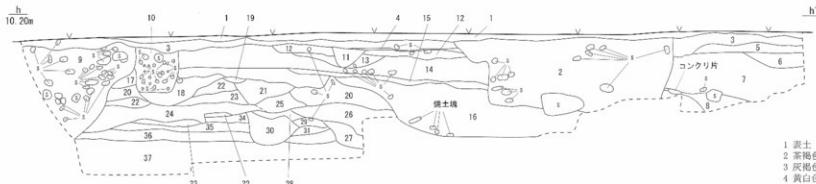
SP1（第39図） 調査区中央部で検出した。円形を呈し、長軸0.38m、短軸0.30m、深さ0.14mである。出土遺物はない。

下層



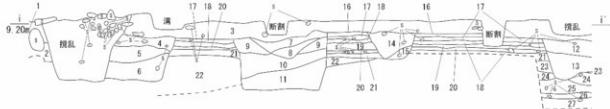
第36図 2008年度調査区下層面遺構全体図

北壁



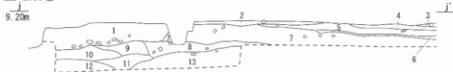
- 1 茶褐色土 (鷺羽理没覆土)
- 2 茶褐色土 (鷺羽理没覆土)
- 3 黄褐色土 (瓦・礫等含む、黄褐色土混じる)
- 4 黄褐色粗砂
- 5 砂質土
- 6 黄褐色土 (瓦片含む、混じる)
- 7 細粒茶褐色土 (粘土・炭化物・瓦片含む、混じる)
- 8 茶褐色土 (瓦片)
- 9 茶褐色土 (径10~20cmの円錐多量に含む、近代堆积)
- 10 砂質土 (径2~10cmの円錐多量に含む、近代堆积)
- 11 黄褐色土
- 12 黄褐色土
- 13 黄褐色土 (砂より多い、土含む)
- 14 黄褐色土 (黄褐色土・茶褐色土が斑状に混じる)
- 15 黄褐色砂 (砂地層)
- 16 砂質土 (砂地層)
- 17 黄褐色土 (黄褐色砂混じり、しまり強い、整地層)
- 18 黄褐色土 (砂地層)
- 19 黄褐色砂 (砂地層)
- 20 黄褐色砂 (整地層)
- 21 黄褐色砂 (整地層)
- 22 白色砂質土 (整地層)
- 23 黄褐色砂質土 (整地層)
- 24 黄褐色砂質土 (砂混じる、シルトと砂が互に堆積)
- 25 茶褐色砂質土 (径2~3cmの圓錐多量に含む、シルトと砂が互に堆積)
- 26 黄褐色砂質土 (シルトと砂が交互に堆積)
- 27 黄褐色砂 (シルトと砂が互に堆積)
- 28 黄褐色土 (SK覆土、整地面埋め込みに切られ)
- 29 黄褐色土 (炭化物多量に含む、SK覆土、整地面埋め込みに切られる)
- 30 黄褐色土 (炭化物多量に含む、SK覆土、整地面埋め込みに切られる)
- 31 灰茶褐色土 (炭化物含む、SK覆土、整地面埋め込みに切られる)
- 32 黄褐色粗砂 (整地層)
- 33 黄褐色粗砂 (整地層)
- 34 喀斯特砂質土 (黄褐色砂混じる、整地層)
- 35 黄褐色砂質土 (粘土・礫・粗砂・粘土・ロック混じる、しまり強い、整地層2か)
- 36 黄褐色砂質土 (地山)、炭化物少量含む

整地層①



- 1 灰色土 (鉄分沈じり、炭化物含む)
- 2 黄灰褐色土
- 3 黄茶褐色土 (粘土・炭化物含む)
- 4 黄褐色粗砂土 (粘土・炭化物含む)
- 5 灰褐色土 (砂混じり、炭化物含む)
- 6 灰褐色土
- 7 灰色土 (焼土・炭化物多量含む)
- 8 黄褐色土 (焼土・白褐色土ブロック含む、焼土・炭化物含む)
- 9 黄褐色土 (焼土・炭化物含む)
- 10 黄褐色土 (砂混じる)
- 11 黄褐色土 (燒土・炭化物含む)
- 12 黄褐色土 (燒土・炭化物含む)
- 13 黄茶褐色土 (焼土・炭化物含む)
- 14 黄褐色土 (焼土・炭化物含む)
- 15 黄褐色砂質土 (SK4覆土)
- 16 灰褐色土 (黄褐色砂混じり、しまり強い、整地層)
- 17 黄褐色土 (黄褐色砂混じり、しまり強い、整地層)
- 18 黄褐色砂 (整地層)
- 19 黄褐色砂 (整地層)
- 20 黄褐色砂 (整地層)
- 21 黄褐色砂 (整地層)
- 22 白色砂質土 (整地層)
- 23 黄褐色砂質土 (整地層)
- 24 黄褐色砂質土 (砂混じる、シルトと砂が互に堆積)
- 25 茶褐色砂質土 (径2~3cmの圓錐多量に含む、シルトと砂が互に堆積)
- 26 黄褐色砂質土 (シルトと砂が交互に堆積)
- 27 黄褐色砂 (シルトと砂が互に堆積)
- 28 黄褐色砂質土 (SK覆土)

整地層②



- 1 黄茶褐色土 (焼土・炭化物少量含む、整地層を埋め込んだ埋土)
- 2 黄褐色土 (砂混じり、しまり強い、整地層)
- 3 黄白土 (黄褐色土混じり、しまり強い、整地層)
- 4 白褐色土質 (整地層)
- 5 灰褐色土質 (整地層)
- 6 黄褐色土 (整地層)
- 7 黄褐色砂 (整地層)
- 8 黄褐色砂質土 (焼・灰色土混じり、整地層2か)
- 9 黄褐色土 (焼土・炭化物含む)
- 10 黄褐色土 (焼土・炭化物やや多く含む)
- 11 黄褐色土 (焼土・炭化物含む)
- 12 灰褐色土質
- 13 黄褐色砂質土 (粒子粗い)

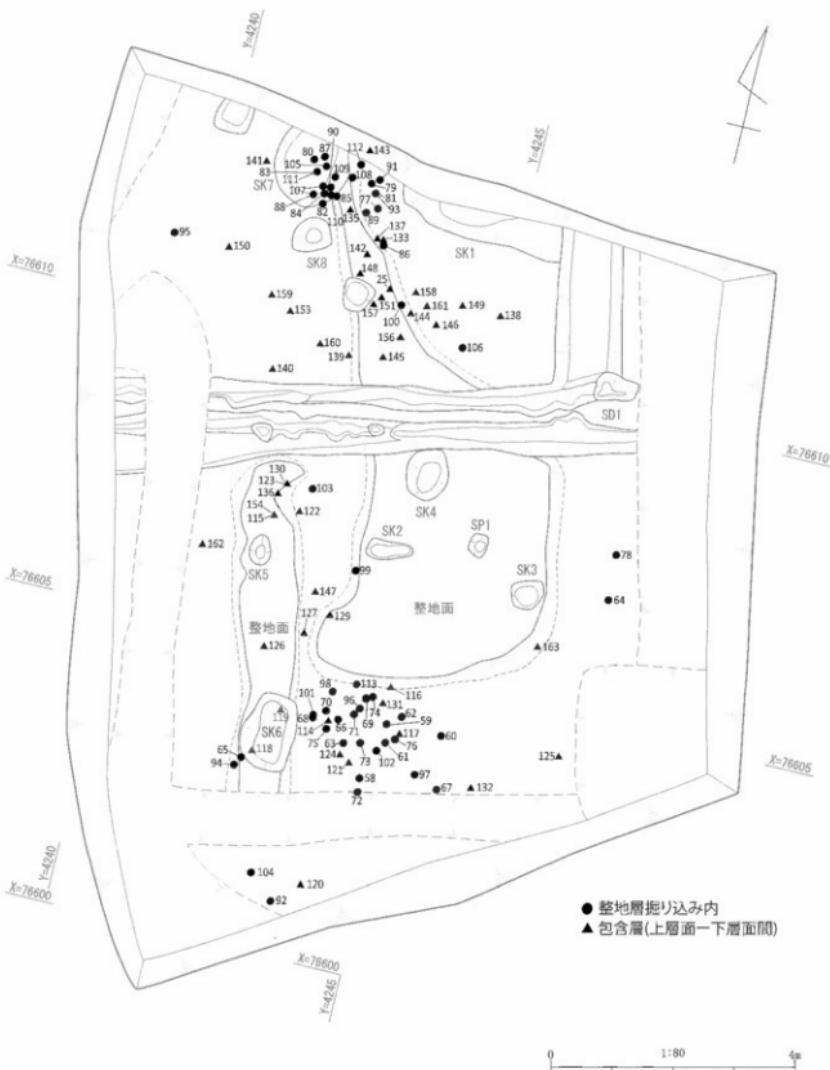
整地層③



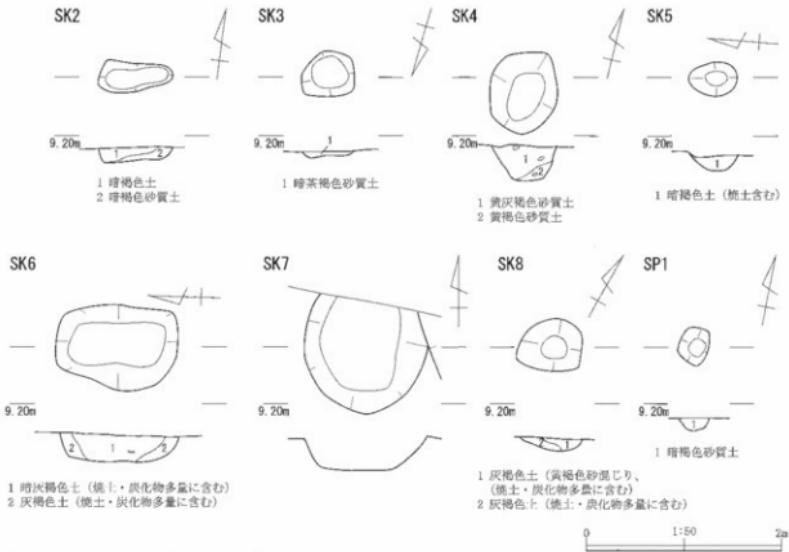
- 1 黄茶褐色土 (近代土块SK10)
- 2 黄茶褐色土 (砂多くしまる、近代土块SK10)
- 3 黄褐色土 (焼土・炭化物含む)
- 4 黄褐色土
- 5 灰褐色土
- 6 茶褐色土
- 7 灰褐色土 (黄褐色土混じる、整地層)
- 8 灰褐色土 (燒土・砂混じり、整地層)
- 9 黄褐色砂 (整地層)
- 10 灰褐色砂質土 (整地層)
- 11 黄褐色砂質土 (整地層)

第37図 2008年度調査区北壁・整地層断面図

下層



第38図 2008年度調査区整地層振り込み・包含層遺物出土状況図



第39図 2008年度調査区土坑・ピット平面図・断面図

第4節 遺 物

古代から近代の出土遺物があり、主体は近世である。SK7付近は整地層を掘り込む土層が切り合いで、上層部分は平面的に遺構プランをおさえにくかったため、断面観察から概ね8.95mより下層の出土遺物をSK7の出土、それより上層の出土を整地層掘り込み内からの出土とした。ただし、両遺構の境界付近の出土遺物については、帰属は断定できず、それぞれ別の遺構に伴うもののが存在する可能性がある。

本調査区での遺物の主体をなす土師器皿は、次の7種に分類できる。いずれも非クロ成形である。以下本節の記述はこの分類により呼称する。

- 1類：口縁部が屈曲し、端部を摘み上げるもの。
 - 2類：口縁部のナデ幅が広く、端部が尖るもの。
 - 3類：口縁外端が強いナデによって面ができ、断面三角形状となるもの。端部は摘み上げる。
 - 4類：口縁部が外反し、端部を摘み上げるもの。
 - 5類：口縁部がわずかに外反し、ナデによって内端面がわずかに凹んだようになるもの。3類・4類に比べて器壁が薄い。
 - 6類：5類に似るが、口縁部がほとんど外反せず直線的に延びて端部が丸いもの。
 - 7類：口縁部が内湾して立ち上がり端部が丸いもの。6類より器壁が厚い。
- S D 1 (第40図)** 1は瓦質土器の方形の火鉢である。外面底部に円形の脚部がつく。脚との接合部には体部と脚を接合しやすくさせるための刻みが入る。

S K 1 (第40・41図) 2はロクロ成形の素焼きの越中瀬戸皿である。底部は回転糸切りによる。3～6は伊万里の碗である。4はコンニャク印判による葉と菊とみられる花文がある。18世紀前半とみられる。5・6はいずれも外面に矢羽根文、口縁内面に2条の囲線がある。7～12は棟瓦である。焼し瓦であるが、個体によって焼成の度合いが大きく異なる。7・10は灰色を呈し良好であるが、11・12は焼しが不十分なためか黄橙色を呈する。8・9は一個体に両者の状態が混在している。13は冠瓦とみられ、黒褐色の釉薬がかかり近代のものである。

14～19は土壁である。14は下面が平坦面を形成し、上面側には小舞の痕跡がある。小舞痕跡は横方向とそれを切る縱方向のものが認められる。15は下面の反対側が凸状となり、凸部の一側面は破断面ではないことから元の形を反映している可能性が高い。16は下面が平滑で、断面から4層程度の土塗りが推測できる。スサを含む。17は下面が平滑で、4～5層程度の土塗りが推測できる。一部のみ残る最上層はスサを多く含み、横方向の小舞の痕跡がある。18も下面が平滑で、5層程度の土の違いが認められる。最も上の層にスサを多く含む。上面に小舞とそれに絡めた網とみられる痕跡がある。19は下面と側面が残存しており、壁の角部をなしていたとみられる。最上層の土はスサを多く含む。

20～26は鉄釘で、断面方形の和釘である。直線状のもの(20～22)のほか、直角に曲がるもの(23)、釣り針状となるもの(24)、「7」字状となるもの(25)、湾曲するもの(26)がある。

焼土層 (第41図) 27は釘である。SK 1南側の焼土層出土で、SK 1の釘と同時期であろう。

S K 6 (第41図) 28～40は土師器皿である。28は2類、29～38は4類。39・40は3類である。3類と4類は油煙が多量に付着し、器壁が厚いことが特徴である。38の破断面には、径1mm程度の細い棒状のものによって付けたとみられる細い筋が多数認められ、割れた後に何らかの再利用を行っている。41は唐津の擂鉢である。口縁部を内側と外側に突出させる。内面にのみ鉄釉を掛け。肥前陶器編年I期(九州近世陶磁学会2000)、16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

S K 7 (第42図) 42～48は土師器皿である。2種に分類され、42～45は5類、46～48は6類である。全体的にSK 6の土師器と比べると胎土は精緻で、器壁は薄く平滑である。

49・50はロクロ成形の越中瀬戸素焼皿である。口縁部はナデにより小さく外反する。50は底面糸切りである。51は越中瀬戸の碗である。やや湾曲する底部から口縁部がまっすぐに延びる。内外面に鉄釉を掛け、高台付近は無釉である。

52は唐津の甕である。口縁端部は屈曲して開き、頸部は2条の突帯がめぐる。鉄釉の上に灰釉を掛け。肥前陶器編年I期、16世紀末から17世紀初頭とみられる。53・54は唐津の皿である。54は底部から緩やかに湾曲した胴部が延び、口縁部で外反する。53も同様の口縁部をもつ。灰釉を施し内面に鉄釉の文様を描く。16世紀末から17世紀初頭とみられる。

55・56は焼塩壺の蓋である。上面は平坦で、緩やかに側面に移行し「ハ」字状に開く。小川望氏による分類のア①類に相当する(小川2008)。57はコップ形を呈する焼塩壺である。内面に布目痕が認められる。同氏による分類の輪積み成形I-3類に相当するとみられる。

整地層掘り込み (第42・43図) 58～86は土師器皿である。5種に分けられ、58～63は1類、64～66は3類、67～73は4類、74～81は5類、82～86は6類である。17点に油煙が付着する。72は口縁端部を折り曲げて注口が作られる。

87～95は越中瀬戸である。87～90は素焼皿で、89は底部と体部の境で屈曲して立ち上がる。89・90は底部回転糸切りである。91は向付形態の皿である。口縁部が屈曲して直立し、削り出し高台をもつ。鉄釉を掛け、底部と見込みは無釉である。17世紀後半の登窯期とみられる。92は天目形

の小杯である。鉄釉で底部は無釉である。93は削り出し高台の皿である。94・95は擂鉢で、縁帶が下方に突出し、鉛釉を施す。

96は志野の向付である。体部が屈曲して開き気味に立ち上がる。削り出し高台である。

97は珠洲の擂鉢である。幅広の内端面が長三角形の口縁部を形成する。端面には一単位幅約4.5cmの櫛目波状文を施す。吉岡編年V期、1380～1440年代とみられる（吉岡1994）。

98～104は唐津である。98は端反皿で、灰釉を掛ける。99は皿である。100は碗である。回転糸切り後、高台を削り出し、底部の中心は円錐状に削り出される。高台周辺は無釉、他は灰釉がかかる。101は削り出し高台の皿である。高台の削りは高台脇より浅い。16世紀末～17世紀初頭とみられる。102・103は皿で、口縁部が外反する。いずれも灰釉を掛け、102は内面に文字状の鉄絵が描かれる。104は擂鉢である。口縁端部を外側と内側に突出させる。鉄釉の上に白濁した釉がかかる。

105は伊万里の碗である。口縁部と高台にそれぞれ2条の匯線を入れ、体部に花卉と木を表す。高台内に「□□年□（製力）」とみられる銘款がある。17世紀後半とみられる。106は伊万里の皿である。高台の疊付と内端面を斜めに釉剥ぎする。底部は中心部ほど薄手である。染付は山水画か。

107～112は焼塙壺である。いずれも寸胴のコップ形を呈し、口縁内端面がナデによって長三角形状となる。内面に布目痕が認められるもの（107・108・111・112）がある。いずれも刻印は認められない。小川氏分類の「輪積み成形」I-3類に相当するとみられる。SK7出土の焼塙壺と類似し、同時期とみられる。

113は鉄釘である。先端部が直角に曲がる。

包含層（上層面・下層面間）（第44・45図） 114～131は土師器皿である。4種に分類され、122・123は3類、114～119は4類、120・121・124～129は5類、130・131は7類である。114・115の破断面は、径1mm程度の細い棒状のものによって付いたとみられる細かい筋が認められる。116の破断面2面は人為的に磨られたためか磨耗している。126の底部は板状圧痕ないしは刷毛状工具による平行線状痕がある。

132は珠洲の甕である。内面の押圧痕が明瞭である。

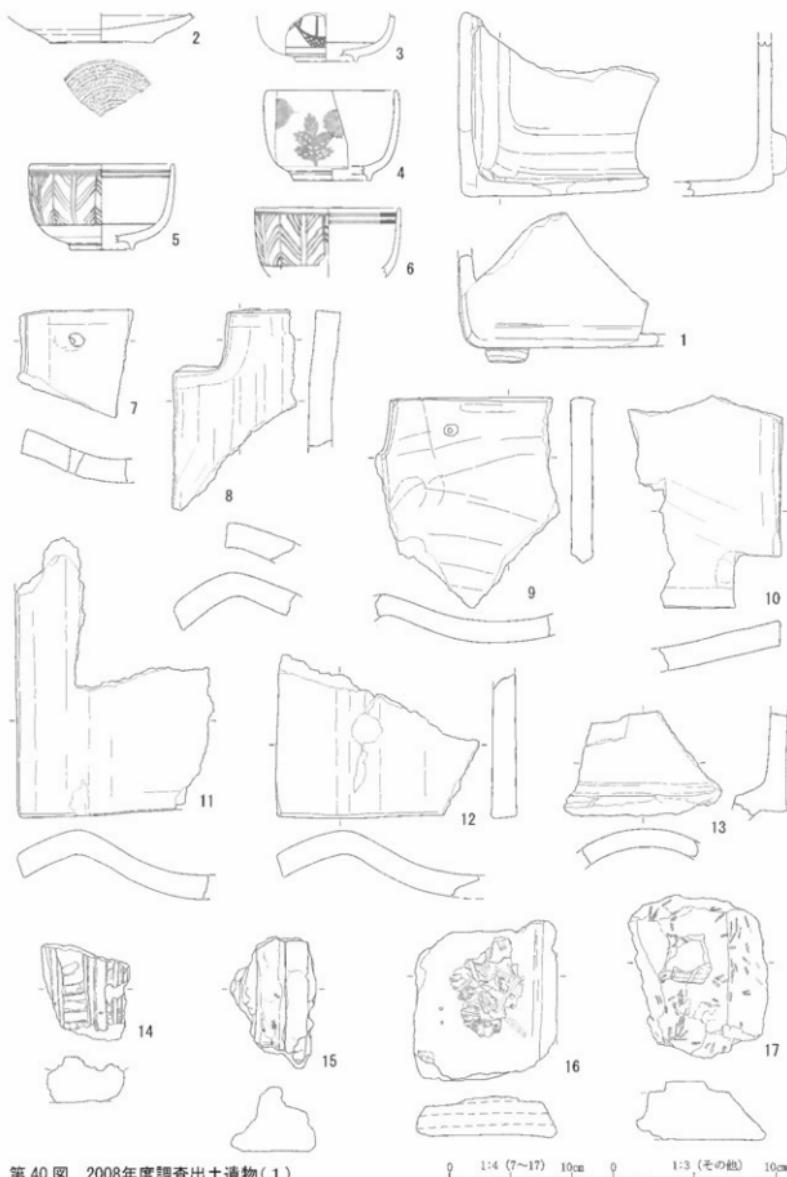
133～146は越中瀬戸である。133～135はロクロ成形による素焼皿である。いずれもほぼ同形・同大で口径15cm程度である。底部が残る135は回転糸切り痕がある。136は菊状の鎬をもつ折縁皿である。口縁部が外反し、端部が丸く立ち上がる。16世紀末～17世紀初頭に比定される。137は端反皿である。138は削り出し高台の皿で鉄釉がかかる。内面に釉止めの段があり、17世紀前葉～中頃であろう。139は灯明受皿で、底部は回転糸切りである。18世紀代とみられる。140は鉄釉の壺である。141～145は擂鉢である。鉛釉・鉄釉を施し、141は縁帶が小さく垂下し、142～144は縁帶が外に突出する。144は縁帶の下部に切り込み状に沈線が入る。卸目は、141は残存する2cmあたりで8目、145は3.3cmあたり14目である。141～144は16世紀末～17世紀初頭に比定される。146は鉢で、外面と内面口縁部に鉛釉をかけるが、口唇部は剥げている。

147は唐津の皿で肥前陶器編年I～II期である。148は唐津の碗である。削り出しの高台内は中心が円錐状に削り出される。

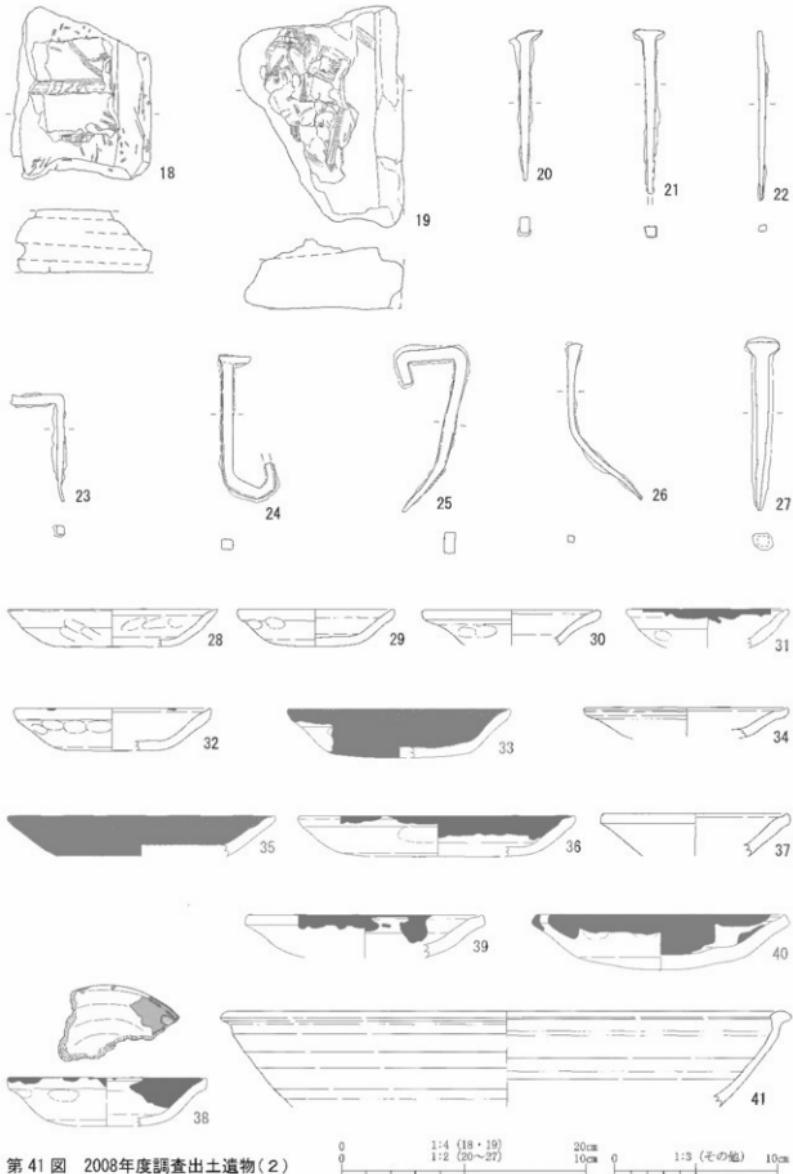
149・150は瀬戸美濃である。149は皿で、口縁部が直線的に立ち上がる。16世紀後半の大窯第3段階に比定される。150は瓶類の頸部である。外面と内面上部に灰釉がかかる。

151は志野の大皿である。体部で屈曲した後、外反した口縁部が立ち上がる。長石釉を施釉し、口縁部内面は円形文と線文を交互に配する。

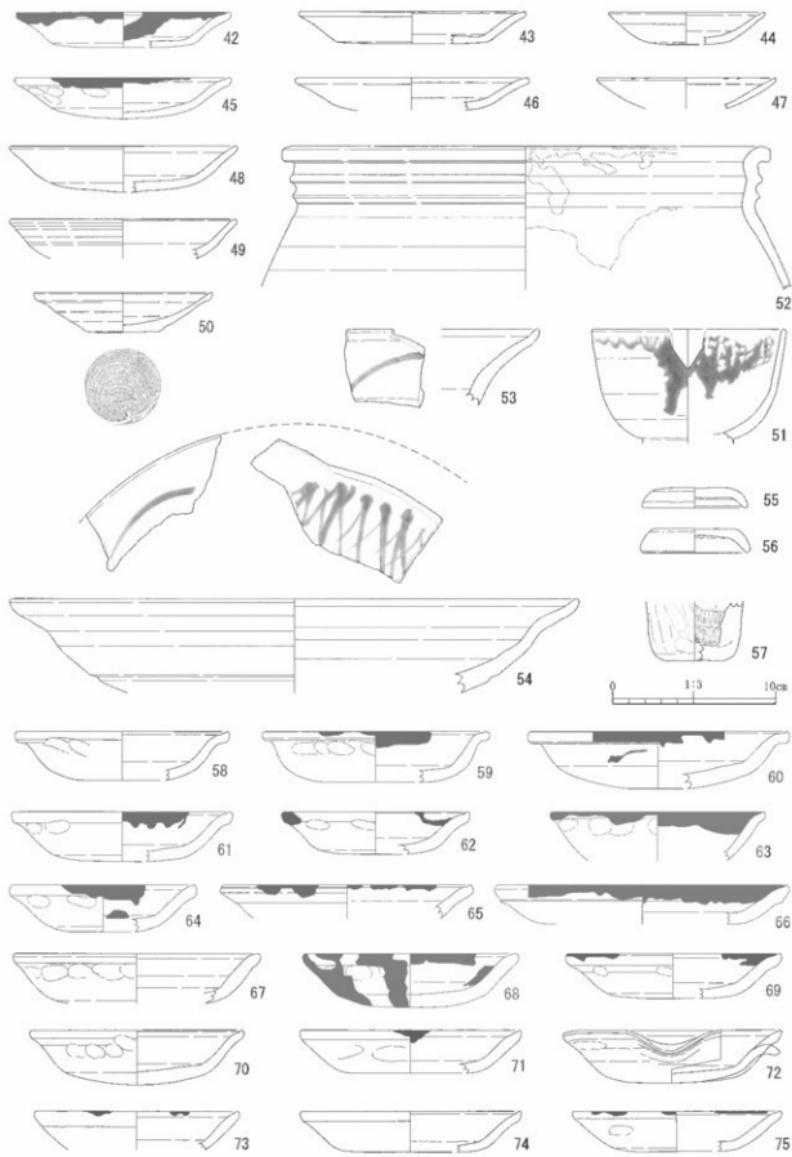
152は回転糸切りの陶器皿で、内面は鉛釉がかかる。153は徳利と考えられる。外面底部は露胎、



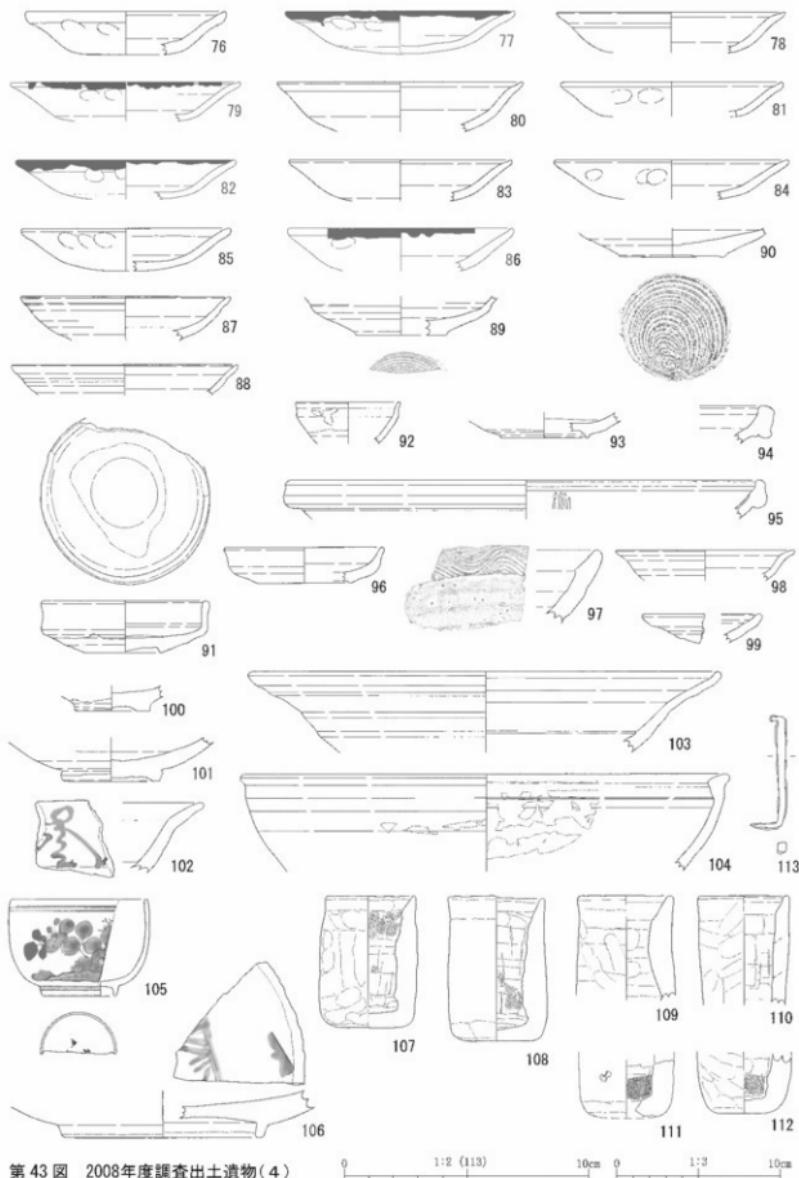
第40図 2008年度調査出土遺物(1)



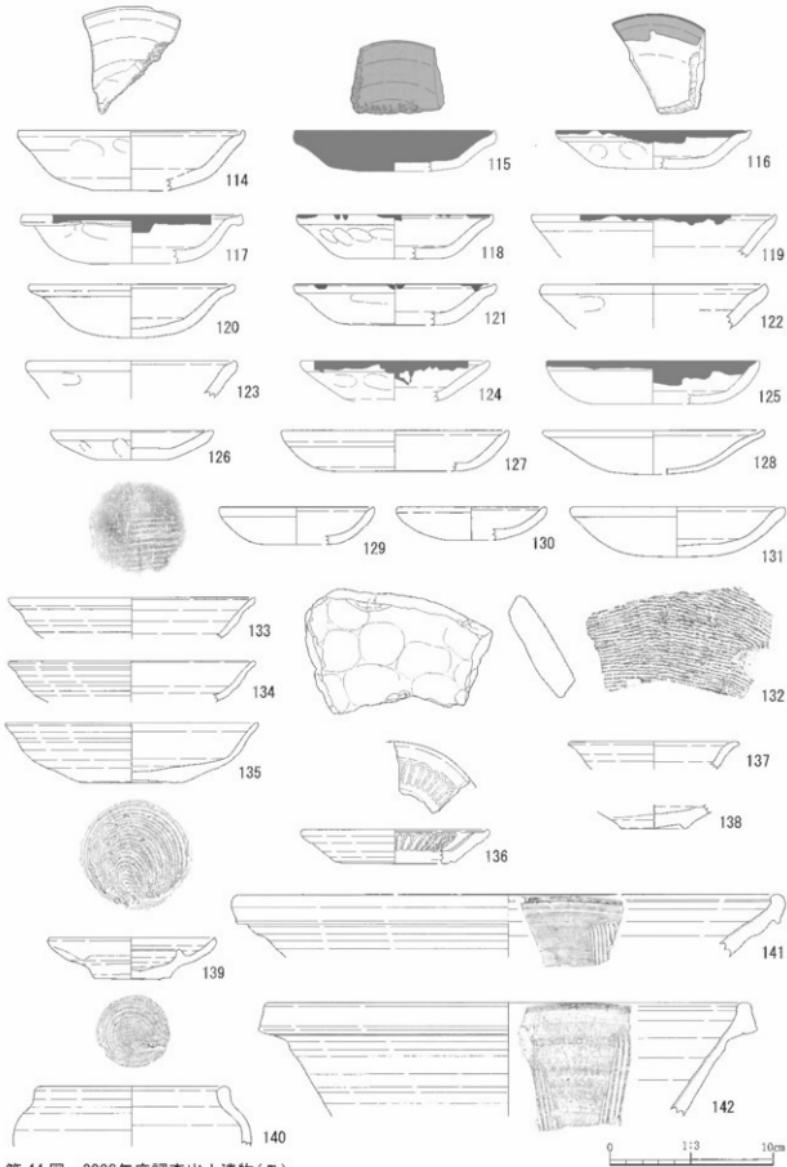
第41図 2008年度調査出土遺物(2)



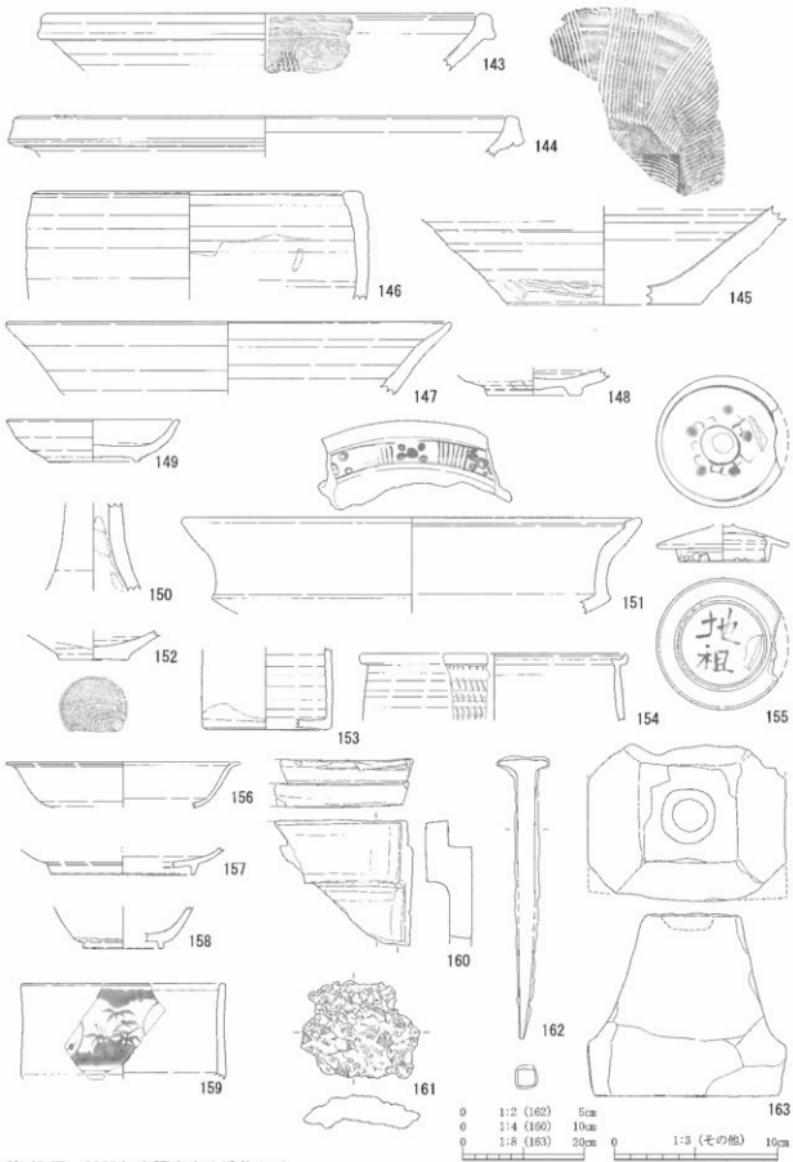
第42図 2008年度調査出土遺物(3)



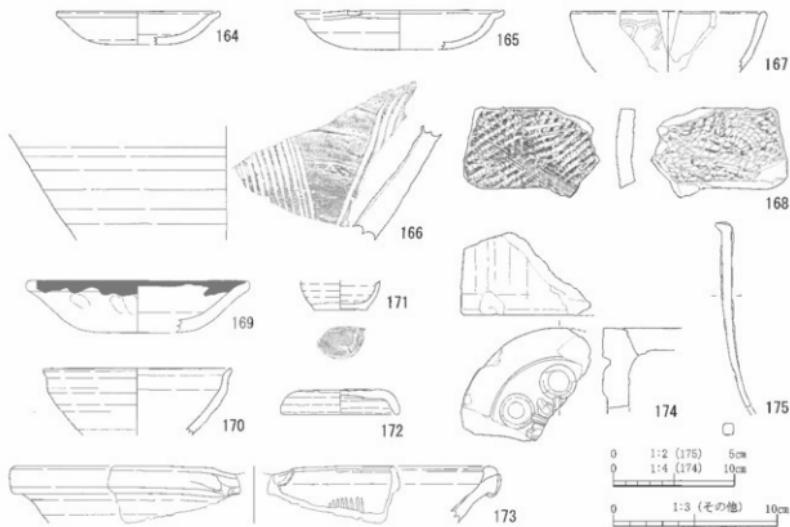
第43図 2008年度調査出土遺物(4)



第44図 2008年度調査出土遺物(5)



第45図 2008年度調査出土遺物(6)



第46図 2008年度調査出土遺物(7)

それ以外は灰釉がかかる。154は陶器の行平鍋である。口縁部が直角に屈曲して端部が立ち上がる。体部に飛び鉈による刻み目がある。155は土瓶蓋である。緑釉と鉄絵による文様を入れ、内面は「地租」の墨書きがある。天井部に幅2.2cmの切り込み状の細長い孔が空いており、貨幣を入れる投入口であつた可能性がある。地租改正が行われた明治6年(1873)以降のものであろう。

156は中国製白磁の端反碗である。薄い器壁が湾曲して立ち上がり、口縁部が外反する。157は磁器の皿である。透明釉に薄い貫入が入る。158は白磁碗で、外面底部と高台内は無釉である。159は伊万里の碗で、雪輪文と 笹文を外面に施す。18世紀以降とみられる。

160は焼し棟瓦、161は鉄滓である。162は鉄釘である。

163は火輪で、軒は側面がやや内側に入り込む形状である。

整地層(第46図) 164・165は土師器皿である。16世紀後半に比定される。166は珠洲擂鉢である。3.7cmあたり10目の粗い御目がある。吉岡編年V期、1380~1440年頃か。167は線描蓮弁文を持つ青磁碗である。上田分類のB-IV類に相当する。168は古代の須恵器甌である。

摸乱(第46図) 169は土師器皿である。170は越中瀬戸の鉄釉天目茶碗である。直線的に体部が開き、口縁部が外反する。171は瀬戸美濃の小壺で、底部は回転糸切りである。内面は鉄釉、外表面は灰釉で底部は露胎である。172は焼塙壺の蓋で、平坦な上面から側面が緩やかに八字状に開く。173は越中瀬戸の擂鉢である。2cmあたり8目の御目が遺存する。174は丁子梅鉢文の軒丸瓦である。寛文期の改修(1661年)以降のものとみられる。175は鉄釘である。

第9表 2008年度調査遺物觀察表

番号	種別	器種	出土遺構	法量(cm) 口径(幅)× 前高(厚さ) (厚さ)(幅)	釉	胎土	焼成	色 調		質 態		備考	
								釉	胎土	外 面	内 面		
1	瓦質土器	火鉢	SD1	(12.0) (9.2)	-	粗粒砂(1.0~0.5mm) を少量含む	良	-	N7/ 灰白	ナデ、ケツリ	ナデ	円形の脚跡付く。脚 の後側部に跡み口を入れる	
2	越中殿戸	II	SK1	- (1.6) (6.4)	-	やや密。半粒砂(0.5 ~0.3mm)を少量含む。 粗粒砂(1.0~0.5mm) を微量含む	良	-	10VR7/3 に沿い黄褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	底部凹凸感弱め。素 焼き	
3	伊万里	碗	SK1	- (2.6) (0.7)	透明釉 密		良	N8/ 灰白	N8/ 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	外面) 織文様か 内面) 見込みに圓錐 外面) 葉菜文(コン ニャ印刷)。高台に 直線縦	
4	伊万里	碗	SK1	(8.0) 5.55 (4.7)	透明釉 密		良	2.5GY8/1 灰白	N8/ 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	外面) 美羽移文 内面) 口縁部に二重 輪縁	
5	伊万里	碗	SK1	(8.0) 5.3 (3.9)	透明釉 密		良	7.5GY8/1 明快灰	N8/ 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	外面) 美羽移文 内面) 口縁部に二重 輪縁	
6	伊万里	碗	SK1	(8.0) 4.30 -	透明釉 密		良	5GY8/1 灰白	N8/ 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	外面) 美羽移文、高 台に二重輪縁 内面) 口縁部に二重 輪縁、見込みに圓錐	
7	磁し瓦	板瓦	SK1	(8.0) (9.4)	1.9	-	やや密。粗粒砂(1.0 ~0.5mm)を微量含む	良	-	N4/ 灰	ナデ	ナデ	穿孔あり
8	磁し瓦	板瓦	SK1	(16.0) (10.1)	2.0	-	やや密。粗粒砂(1.0 ~0.5mm)を微量含む	良	-	N4/ 灰	ケツリ、ナデ	ナデ	側面の一部墨元せず 底成やや不良
9	磁し瓦	板瓦	SK1	(17.0) (16.0)	1.7 ~ 1.8	-	やや密。粗粒砂(1.0 ~0.5mm)をやや多量 含む	やや 不良	-	N4/ 灰	ナデ	ナデ	穿孔あり、内面過元 弱く成やや不良。 二次接觸による剥落 あり
10	磁し瓦	板瓦	SK1	(17.0) (12.0)	2.0	-	やや密。粗粒砂(1.0 ~0.5mm)を多量含む	良	-	10VR8/4 淡黄褐色	ナデ	ナデ	燒成不良によりによ い黄褐色を呈する
11	磁し瓦	板瓦	SK1	(23.0) (16.2)	2.0	-	やや密	やや 不良	-	10VR7/4 に沿い黄褐色	ナデ	ナデ	燒成不良によりによ い黄褐色を呈する
12	磁し瓦	板瓦	SK1	(13.0) (16.0)	1.9	-	やや密。粗粒砂(1.0 ~0.5mm)を多量含む	やや 不良	-	10VR8/3 淡黄褐色	ケツリ、ナデ ナデ	ナデ	燒成不良によりによ い黄褐色を呈する
13	瓦	冠瓦	SK1	(8.0) (15.0)	1.6 ~ 1.8	脚鉢	やや密。粗粒砂(1.0 ~0.5mm)を多量含む。 粗粒砂(1.5 ~ 1.0 mm)を少量含む	良	7.5YR3/2 墨褐	2.5YR6/5 褐	ナデ	ナデ	破断面にタテ・ヨコ の小さな痕跡あり
14	土壁	-	SK1	(7.9) (7.2)	(4.0)	-	-	-	SVR7/6 褐	-	-	断面凸条	
15	土壁	-	SK1	(10.0) (6.0)	(6.0)	-	-	-	SVR7/4 にLS4/褐	-	-	4層の土壁。スサ を多く含む。	
16	土壁	-	SK1	(13.1) (11.7)	(3.4)	-	-	-	SVR6/6 褐	-	-	4層の土壁。スサ を多く含む。	
17	土壁	-	SK1	(13.0) (11.0)	(1.0)	-	-	-	SVR7/6 褐	-	-	4~5層の土壁。スサ を多く含む。小輪窓跡	
18	土壁	-	SK1	(14.0) (11.5)	(5.2)	-	-	-	2.5YR7/6 褐	-	-	5層の土壁。スサ を多く含む。小輪窓跡	
19	土壁	-	SK1	(18.0) (13.0)	(5.0)	-	-	-	2.5YR7/6 褐	-	-	下面の側面が齊存。 角部の壁十脚。スサ を多く含む	
20	鉄製品	釘	SK1	6.2	1.3	0.5	-	-	-	-	-	重量 8g	
21	鉄製品	釘	SK1	6.7	1.3	0.5	-	-	-	-	-	重量 5g	
22	鉄製品	釘	SK1	(7.0)	0.3	0.3	-	-	-	-	-	重量 3g	
23	鉄製品	釘	SK1	4.5	0.6	0.5	-	-	-	-	-	重量 6g	
24	鉄製品	釘	SK1	6.1	1.4	0.5	-	-	-	-	-	重量 9g	
25	鉄製品	釘	SK1	6.9	0.6	0.9	-	-	-	-	-	重量 23g	
26	鉄製品	釘	SK1	(6.0)	0.7	0.3	-	-	-	-	-	重量 3g	
27	鉄製品	釘	便土層	7.1	1.4	0.6	-	-	-	-	-	重量 10g	
28	土師器	皿	SK6	(12.0)	2.5	(7.0)	-	やや密。赤色鉱を微 量含む。半粒砂(0.5 ~0.3mm)を少量含む	良	-	10VR7/3 に沿い黄褐色	ロクシマ コナデ 体部)ナデ	外側にも内部に相 似底板

番号	種別	器種	出土遺構	寸法(cm)			釉	胎土	焼成	色 製		調 整		備 考
				口径 (張さ)	底面 (幅)	底径 (厚さ)				胎	釉土	外 面	内 面	
29	土師器	皿	SK6	(9.4)	2.3	(4.5)	-	赤や青。赤色粒を少量含む。中粒砂(0.5~0.3mm)を少量含む	良	-	7.5YR7/3 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部~底部) ナデ	口縁部~体 部)ヨコナデ 見込み)ナデ ナデ	外腹体部に指輪压痕
30	土師器	皿	SK6	(10.8)	0.2	-	-	やや青。赤色粒を少量含む。中粒砂(0.5~0.3mm)を少長含む	良	-	7.5YR7/4 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部)ナデ	口縁部)ヨコ ナデ (体部)ナデ	外腹体部に指輪压痕
31	土師器	皿	SK6	(9.7)	2.4	-	-	やや青。中粒砂(0.5~0.3mm)を少長含む	良	-	7.5YR7/3 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部)ナデ	口縁部~体 部)ヨコナ デ、ナデ	指輪付着。外腹体部 に指輪压痕
32	土師器	皿	SK6	(12.0)	2.6	(7.0)	-	やや青。赤色粒を多量含む。中粒砂(0.5~0.3mm)を少長含む	良	-	7.5YR7/4 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部~底部) ナデ	口縁部~体 部)ヨコナデ 見込み)ナデ ナデ	油瓶わざかに付着。 外腹体部に指輪压痕
33	土師器	皿	SK6	(13.4)	3.0	(0.0)	-	やや青。中粒砂(0.5~0.3mm)を少長含む	良	-	7.5YR7/3 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部~底部) ナデ	口縁部)ヨコ ナデ (体部~見込 み)ナデ	外腹全体的に油瓶 付着箇所。外腹体部 に指輪压痕
34	土師器	皿	SK6	(12.3)	1.8	-	-	やや青。中粒砂(0.5~0.3mm)を少長含む	良	-	7.5YR7/4 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部)ナデ ナデ	口縁部)ヨコ ナデ (体部)ヨコナ デ、ナデ	
35	土師器	皿	SK6	(16.3)	2.5	-	-	やや青。中粒砂(0.5~0.3mm)を含む	良	-	10YR6/3 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部)ヨコナ デ、ナデ	口縁部~体 部)ヨコナデ	外腹全体的に油瓶 付着
36	土師器	皿	SK6	(18.7)	2.5	(11.0)	-	やや青。中粒砂(0.5~0.3mm)を少長含む	良	-	7.5YR7/3 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部~底部) ナデ	口縁部~体 部)ヨコナデ ナデ	油瓶付着
37	土師器	皿	SK6	(11.6)	2.6	-	-	やや青。赤色粒(大)を少々含む。中粒砂(0.5~0.3mm)を少長含む	良	-	10YR7/4 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部)ナデ	口縁部)ヨコ ナデ (体部)ナデ	
38	土師器	皿	SK6	(12.0)	3.0	(7.2)	-	やや青。赤色粒を含む。中粒砂(0.5~0.3mm)をやや多量含む	良	-	7.5YR7/4 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部)ナデ	口縁部~体 部)ヨコナデ 見込み)ナデ	外腹体部に指輪压 痕。油瓶付着。破断 部に底状の脚。棒状 工具底多数あり
39	土師器	皿	SK6	(14.3)	2.8	-	-	やや青。中粒砂(0.5~0.3mm)を少長含む	良	-	7.5YR7/3 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部)ナデ	口縁部~体 部)ヨコナデ	油瓶付着
40	土師器	皿	SK6	18.2	3.5	9.0	-	やや青。赤色粒を少 量含む。粗粒砂(0.5~1.0mm)を少長含む	良	-	10YR7/3 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部)ナデ 見込み)ナデ	口縁部)ヨコ ナデ (体部)ヨコナ デ	油瓶付着。外腹体部 に指輪压痕
41	唐津	擂鉢	SK6	(35.0)	5.0	-	鉢形	やや青。中粒砂(0.5~0.3mm)を少長含む	良	10YR4/4 周	7.5YR7/3 に沿う傾	ロクロナデ	ロクロナデ	内腹部分的に白濁し た軋が付着
42	土師器	皿	SK7	(13.0)	2.15	(8.0)	-	やや青。中粒砂(0.5~0.3mm)を少長含む、 微細(2×3mm)1ヶ	良	-	7.5YR7/4 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部~底部) ナデ	口縁部~体 部)ヨコナデ 見込み)ナデ	油瓶付着
43	土師器	皿	SK7	(13.0)	1.95	(9.0)	-	密。中粒砂(0.5~0.3mm)を微量含む	良	-	7.5YR7/4 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部~底部) ナデ	口縁部~体 部)ヨコナデ 見込み)ナデ	
44	土窯器	皿	SK7	(9.5)	2.0	(5.0)	-	やや青。赤色粒(大)を少々含む。中粒砂(0.5~0.3mm)を微量含む	良	-	7.5YR8/4 浅黄褐	口縁部)ヨコ ナデ (体部)ナデ	口縁部~体 部)ヨコナデ	
45	土窯器	皿	SK7	(13.2)	2.55	(8.0)	-	やや青。中粒砂(0.5~0.3mm)を微量含む。 中纏(4×5mm)1ヶ	良	-	7.5YR7/4 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部~底部) ナデ	口縁部~体 部)ヨコナデ 見込み)ナデ	油瓶付着。外腹体部 に指輪压痕
46	土窯器	皿	SK7	(14.3)	2.0	-	-	やや青。中粒砂(0.5~0.3mm)を微量含む	良	-	7.5YR7/4 に沿う傾	口縁部)ヨコ ナデ (体部)ナデ	口縁部~体 部)ヨコナデ	
47	土窯器	皿	SK7	(10.9)	1.9	-	-	密	良	-	7.5YR7/4 に沿う傾	口縁部~体 部)ナデ	口縁部~体 部)ヨコナデ	内腹体部に墨痕
48	土窯器	皿	SK7	(13.6)	2.8	(8.0)	-	やや青。中粒砂(0.5~0.3mm)を微量含む	良	-	7.5YR7/4 に沿う傾	口縁部~体 部)ナデ 見込み)ナデ	口縁部~体 部)ヨコナデ 見込み)ナデ	

番号	種別	器種	出土遺構	法量 (cm)			種	胎 土	焼成	色 質		調 檢		備 考
				口径 (長さ)	最高 (幅)	底径 (厚さ)				種	胎 土	外 面	内 面	
49	縫中窓戸	且	SK7	(13.9)	(2.4)	-	-	今や密。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少量含む。小や密。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を多量含む。粗粒砂(1.0 ~ 0.5mm)を微量含む	B	-	16YR8/4 赤黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	素焼き
50	縫中窓戸	且	SK7	(10.9)	2.96	4.6	-	今や密。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を多量含む。粗粒砂(1.0 ~ 0.5mm)を微量含む	A	-	7.5YR8/4 淡黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	底部切欠き。素焼き
51	越中窓戸	鶴	SK7	(11.7)	(7.05)	-	鉛油	密	良	7.5YR4/4 褐	16YR7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	内外面鉄錆を施 後、高錆を剥がす 流れす
52	唐津	焼	SK7	(30.0)	(8.8)	-	鉛油	密	良	SYL/3 密	10YR6/2 灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	鉛錆を施錆後、 灰錆を剥がせる
53	唐津	且	SK7	-	(4.7)	-	灰釉	密	良	2.5YR1/1 灰黄	2.5YR1/2 灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	内面鉄錆
54	唐津	且	SK7	(34.6)	(5.8)	-	灰釉	密	良	SYL/2 灰オーリー	10YR6/2 灰鐵錆	ロクロナデ	ロクロナデ	内面鉄錆(網状 文)
55	施鬼瓦	唐	SK7	(6.4)	1.25	(4.0)	-	粘土	良	-	SYR7/5 梗	ナデ	ナデ	
56	施鬼瓦	黒	SK7	6.5	1.5	5.0	-	粘土	良	-	2.5YR6/6 梗	ナデ	ナデ	
57	施鬼瓦	黒	SK7	-	(3.65)	(4.0)	-	粘土	良	-	2.5YR6/6 梗	ナデ	ナデ	コップ形。内面に 布目底
58	土師器	且	整地層裏打ち込み	(13.0)	3.5	(8.0)	-	今や密。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少量含む。	良	-	7.5YR7/4 にぶい梗	ロ織部(ヨコ ナデ)ナデ	ロ織部～休 部(ヨコナデ) 見込み)ナデ	外表面に指揮圧 痕
59	土師器	且	整地層裏打ち込み	(13.7)	3.1	(8.0)	-	今や密。赤色砂を微 量含む。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少量含む	良	-	10YR7/4 にぶい黄褐	山腹部(ヨコ ナデ)ナデ	山腹部～休 部(ヨコナデ) 見込み)ナデ	淮連付帯。外 表面に指揮圧痕
60	土師器	且	整地層裏打ち込み	(15.0)	3.5	(8.0)	-	今や密。赤色砂を多 量含む。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を多量含む	良	-	7.5YR7/4 にぶい梗	口織部(ヨコ ナデ)ナデ	口織部～休 部(ヨコナデ) 見込み)ナデ	淮連付帯
61	土師器	且	整地層裏打ち込み	(13.0)	3.06	(7.0)	-	今や密。赤色砂を微 量含む。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少量含む	良	-	7.5YR8/4 淡黄褐	口織部(ヨコ ナデ)ナデ	口織部～見込 部(ヨコナデ) 見込み)ナデ	淮連付帯。外 表面に指揮圧痕
62	土師器	且	整地層裏打ち込み	(11.4)	2.6	(7.0)	-	今や密。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少量含む	良	-	7.5YR8/4 淡黄褐	ロ織部(ヨコ ナデ)ナデ	ロ織部～休 部(ヨコナデ) 見込み)ナデ	淮連付帯。外 表面に指揮圧痕
63	土師器	且	整地層裏打ち込み	(13.0)	(3.0)	-	-	今や密。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少量含む	良	-	7.5YR7/4 にぶい梗	ロ織部(ヨコ ナデ)ナデ	ロ織部～休 部(ヨコナデ) 見込み)ナデ	淮連付帯。外 表面に指揮圧痕
64	土師器	且	整地層裏打ち込み	(11.3)	2.85	(7.0)	-	今や密。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少量含む	良	-	10YR6/6 にぶい黄褐	ロ織部(ヨコ ナデ)ナデ	ロ織部～休 部(ヨコナデ) 見込み)ナデ	淮連付帯。外 表面に指揮圧痕
65	土師器	且	整地層裏打ち込み	(15.0)	(2.05)	-	-	今や密。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少量含む	良	-	10YR7/4 にぶい黄褐	ロ織部(ヨコ ナデ)ナデ	ロ織部～休 部(ヨコナデ) 見込み)ナデ	淮連付帯
66	土師器	且	整地層裏打ち込み	(17.0)	(2.4)	-	-	今や密。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)をやや多量 含む	良	-	10YR7/3 にぶい黄褐	ロ織部(ヨコ ナデ)ナデ	ロ織部～休 部(ヨコナデ) 見込み)ナデ	淮連付帯。外 表面に指揮圧痕
67	土師器	且	整地層裏打ち込み	(13.0)	(3.05)	-	-	今や密。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少量含む	良	-	7.5YR8/3 淡黄褐	ロ織部(ヨコ ナデ)ナデ	ロ織部～休 部(ヨコナデ) 見込み)ナデ	外表面に指 揮圧痕
68	土師器	且	整地層裏打ち込み	(13.0)	3.3	(7.0)	-	今や密。赤色砂を少 量含む。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少量含む	良	-	7.5YR7/4 にぶい梗	ロ織部(ヨコ ナデ)ナデ	ロ織部～休 部(ヨコナデ) 見込み)ナデ	淮連付帯。外 表面に指揮圧痕
69	土師器	且	整地層裏打ち込み	(13.0)	2.5	(8.0)	-	今や密。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少量含む	良	-	7.5YR7/4 にぶい梗	ロ織部(ヨコ ナデ)ナデ	ロ織部～休 部(ヨコナデ) 見込み)ナデ	淮連付帯。外 表面に指揮圧痕
70	土師器	且	整地層裏打ち込み	(13.0)	3.3	(8.0)	-	今や密。赤色砂を少 量含む。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少量含む	良	-	7.5YR7/4 にぶい梗	ロ織部(ヨコ ナデ)ナデ	ロ織部～休 部(ヨコナデ) 見込み)ナデ	外表面に指 揮圧痕
71	土師器	且	整地層裏打ち込み	(13.0)	2.65	(8.0)	-	今や密。赤色砂(大 きな割合)。中粒砂 (0.5 ~ 0.3mm)を少 量含む	良	-	10YR7/4 にぶい黄褐	ロ織部(ヨコ ナデ)ナデ	ロ織部～休 部(ヨコナデ) 見込み)ナデ	淮連付帯。外 表面に指揮圧痕

番号	種別	器種	出土遺構	法面(cm)			種	施土	造成	色 質		調 整		備 考	
				口徑 (奥さ)	筋高 (幅)	底径 (厚さ)				軸	施土	外面	内面		
72	土師器	皿	整地層掘り込み	13.2	3.26	8.0	-	やや密。粒状砂(1.0 ~ 0.5 mm)を少量含む	良	-	7.SYR7/3 にぶい・穢	口縁部)ヨコ ナダ 体部~底部) ナダ	口縁部~体 部)ヨコナ ダ	口縁部~体 部)ヨコナ ダ	目口。外面部に 擦或压痕
73	土師器	皿	整地層掘り込み	13.4	2.4	-	-	やや密。中粒砂(0.5 ~ 0.3 mm)を多量含む	良	-	7.SYR7/4 に品々・穢	口縁部)ヨコ ナダ 体部)ヨコナ ダ	口縁部~体 部)ヨコナ ダ	口縁部~体 部)ヨコナ ダ	整地付着
74	土師器	皿	整地層掘り込み	13.4	2.6	(8.0)	-	やや密。中粒砂(0.5 ~ 0.3 mm)を微量含む	良	-	7.SYR7/4 にぶい・穢	口縁部)ヨコ ナダ 体部)ヨコナ ダ	口縁部~体 部)ヨコナ ダ	口縁部~体 部)ヨコナ ダ	
75	土師器	皿	整地層掘り込み	12.6	2.45	(7.6)	-	やや密。中粒砂(0.5 ~ 0.3 mm)を少量含む	良	-	10YR7/3 にぶい・穢	口縁部)ヨコ ナダ 体部)ヨコナ ダ	口縁部~体 部)ヨコナ ダ	口縁部~体 部)ヨコナ ダ	整地付着
76	土師器	皿	整地層掘り込み	12.2	2.65	(4.8)	-	やや密。底粒砂を少 量含む。中粒砂(0.5 ~ 0.3 mm)を微量含む	良	-	7.SYR7/3 にぶい・穢	口縁部)ヨコ ナダ 体部)ヨコナ ダ	口縁部~体 部)ヨコナ ダ	口縁部~体 部)ヨコナ ダ	外面部に擦頬压 痕
77	土師器	皿	整地層掘り込み	13.8	2.6	7.5	-	やや密。中粒砂(0.5 ~ 0.3 mm)を微量含む。 繊維(1.5 × 0.5 mm)ヶ 所	良	-	7.SYR7/4 にぶい・穢	口縁部)ヨコ ナダ 体部~底部) ナダ	口縁部~体 部)ヨコナ ダ	口縁部~体 部)ヨコナ ダ	外面部平行繊維 状(板状压痕か)。 外面部に擦頬压 痕。擦付着
78	土師器	皿	整地層掘り込み	13.8	2.5	-	-	やや密。中粒砂(0.5 ~ 0.3 mm)を微量含む	良	-	SYR6/6 程	口縫部)ヨコ ナダ 体部)ヨコナ ダ	口縫部~体 部)ヨコナ ダ	口縫部~体 部)ヨコナ ダ	
79	土師器	皿	整地層掘り込み	14.0	3.0	-	-	やや密。中粒砂(0.5 ~ 0.3 mm)を少量含む	良	-	7.SYR7/4 にぶい・穢	口縫部)ヨコ ナダ 底部~底部) ナダ	口縫部~底 部)ヨコナ ダ	口縫部~底 部)ヨコナ ダ	擦付着
80	土師器	皿	整地層掘り込み	14.0	3.05	-	-	やや 密	やや 不良	-	10YR7/2 にぶい・穢	口縫部)ヨコ ナダ 体部)ヨコナ ダ	口縫部~体 部)ヨコナ ダ	口縫部~体 部)ヨコナ ダ	
81	土師器	皿	整地層掘り込み	13.4	2.1	-	-	やや密	良	-	7.SYR7/4 にぶい・穢	口縫部)ヨコ ナダ 体部)ヨコナ ダ	口縫部~体 部)ヨコナ ダ	口縫部~体 部)ヨコナ ダ	外面部に擦頬压 痕
82	土師器	皿	整地層掘り込み	13.4	2.4	-	-	やや密	良	-	7.SYR7/4 にぶい・穢	口縫部)ヨコ ナダ 体部~見込 み)ヨコナ ダ	口縫部~体 部)ヨコナ ダ	口縫部~体 部)ヨコナ ダ	擦付着。外面部 に擦頬压痕
83	土師器	皿	整地層掘り込み	13.5	2.5	-	-	やや密。中粒砂(0.5 ~ 0.3 mm)を少量含む	良	-	7.SYR7/4 にぶい・穢	口縫部)ヨコ ナダ 体部)ヨコナ ダ	口縫部~体 部)ヨコナ ダ	口縫部~体 部)ヨコナ ダ	
84	土師器	皿	整地層掘り込み	14.3	2.4	-	-	密。中粒砂(0.5 ~ 0.3 mm)を少量含む	良	-	7.SYR7/4 にぶい・穢	口縫部)ヨコ ナダ 体部)ヨコナ ダ	口縫部)ヨ コナダ	口縫部)ヨ コナダ	外面部に擦頬压 痕
85	土師器	皿	整地層掘り込み	12.7	2.6	(8.0)	-	やや密。中粒砂(0.5 ~ 0.3 mm)を微量含む。 繊維砂(1.5 ~ 1.0 mm)を微量含む	良	-	7.SYR7/4 にぶい・穢	口縫部)ヨコ ナダ 体部~底部) ナダ	口縫部)ヨ コナダ	口縫部)ヨ コナダ	外面部にも時々繊 維。外面部に擦 頬压痕
86	土師器	皿	整地層掘り込み	13.0	2.6	-	-	やや密。中粒砂(0.5 ~ 0.3 mm)を微量含む	良	-	7.SYR7/4 にぶい・穢	口縫部)ヨコ ナダ 体部)ヨコナ ダ	口縫部~体 部)ヨコナ ダ	口縫部~体 部)ヨコナ ダ	擦付着。外面部 に擦頬压痕
87	越中漆戸	皿	整地層掘り込み	12.0	2.7	-	-	やや密。繊維(1.5 ~ 1.0 mm)をやや多量含 む	良	-	2.5YR5/6 程	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	擦付着
88	越中漆戸	皿	整地層掘り込み	14.0	1.9	-	-	やや密。粗粒砂(1.0 ~ 0.5 mm)を微量含む。微 細粒砂(1.0 ~ 0.5 mm) を1ヶ含む	良	-	7.SYR8/4 洗質程	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	擦付着
89	越中漆戸	皿	整地層掘り込み	-	2.4	(5.5)	-	やや密	良	-	7.SYR7/4 にぶい・穢	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	底部凹凸条切 れ。擦付着
90	越中漆戸	皿	整地層掘り込み	-	1.8	6.4	-	やや密。中粒砂(0.5 ~ 0.3 mm)を少量含む。 粗粒砂(1.0 ~ 0.5 mm) を微量含む	良	-	7.SYR8/4 洗質	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	底部凹凸条切 れ。擦付着
91	越中漆戸	内付け	整地層掘り込み	10.3	3.2	4.7	鉄輪	やや密。粗粒砂(1.0 ~ 0.5 mm)を多量含 む	良	7.SYR8/4 洗	10YR7/6 にぶい・穢	ロクロナダ	ロクロナダ	削り出し高台。	
92	越中漆戸	小杯	整地層掘り込み	6.0	2.0	-	鉄輪	やや密	良	SYR6/5	10YR7/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	削り出し高台	
93	越中漆戸	皿	整地層掘り込み	-	1.50	(5.4)	灰輪	密	良	2.5Y7/4 洗質	10YR7/4 にぶい・穢	ケズリ	ロクロナダ	削り出し高台	
94	越中漆戸	小杯	整地層掘り込み	-	2.3	-	鉄輪	やや密。粗粒砂(1.0 ~ 0.5 mm)を少量含む	良	SYR6/5	10YR7/2 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ		
95	越中漆戸	鉢	整地層掘り込み	29.0	2.0	-	鉄輪	やや密。粗粒砂(1.0 ~ 0.5 mm)を少量含む	良	SYR4/1 糊灰	7.SYR7/3 にぶい・穢	ロクロナダ	ロクロナダ	即日4連存	

番号	種別	器種	出土機構	法量(cm)			種	胎土	焼成	色 調		調 細		備 考	
				右高 (高さ) (厚さ)	脚高 (幅) (厚さ)	底径 (幅) (厚さ)				種	胎土	外 面	内 面		
96	古軒	円付	整地層割り込み	(9.6)	2.2	(5.6)	墨石船	直	良	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	削り出し茶台	
97	洲洲	圓鉢	整地層割り込み	-	(4.5)	-	-	やや粗。粗粒砂(1.0~ 0.5mmを多量含む)。漆黒 (2.0~1.5mm)を微量含む	良	-	5Y5/1 灰	ロクロナダ	ロクロナダ	内面に縦剥に横目 波状文	
98	唐津	埋灰豆	整地層割り込み	(10.9)	(1.85)	-	灰植	直	良	5Y6/2 泥土オーブ	10YR8/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ		
99	唐津	皿	整地層割り込み	-	(1.8)	-	灰植	直	良	2.5Y5/2 灰質	10YR7/2 にぶい黄褐色	ロクロナダ	ロクロナダ		
100	唐津	皿	整地層割り込み	-	(1.85)	4.7	灰植	直	良	5Y8/1 灰白	10YR8/2 灰黒	ロクロナダ	ロクロナダ	底部に輪切り 後、高台削り出し	
101	唐津	皿	整地層割り込み	-	(2.7)	(6.0)	灰植	直	良	7.5YR8/1 灰黒	7.5YR8/1 灰黒	ロクロナダ	ロクロナダ	削り出し茶台	
102	唐津	皿	整地層割り込み	-	(4.3)	-	灰植	直	良	2.5Y7/1 灰白	10YR7/2 にぶい黄褐色	ロクロナダ	ロクロナダ	内面施釉	
103	唐津	皿	整地層割り込み	(28.6)	(5.0)	-	灰植	直	良	2.5Y6/1 灰黒	10YR7/2 にぶい黄褐色	ロクロナダ	ロクロナダ		
104	唐津	圓鉢	整地層割り込み	(29.8)	(6.0)	-	灰植	直	良	5YR8/3 にぶい黄褐色	7.5YR8/2 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	内面側分的に右側 に細かい心	
105	伊万里	碗	整地層割り込み	(8.4)	5.95	(1.6)	透明釉	直	良	N/B 灰白	N/B 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	外腹に木と瓦片 入。高台内に瓶款 (口印口×豊か)	
106	伊万里	皿	整地層割り込み	-	(2.9)	(12.0)	透明釉	直	良	7.5GY7/1 明灰灰	5Y8/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	内面山水画。	
107	燒窯窓	盤	整地層割り込み	5.4	8.1	4.5	-	良	-	5YR6/6 根	ナダ	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(ナダ)	内面全体に布目感		
108	燒窯窓	皿	整地層割り込み	5.8	8.9	4.5	-	良	-	5YR7/6 根	ナダ	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(ナダ)	内面全体に布目感。 外延部に施釉し 体部(ナダ)		
109	燒窯窓	盤	整地層割り込み	5.8	(6.4)	-	-	中粒砂(0.5~0.3mm) を多量含む。粗粒砂(0.5~ 1.5mm)を少量含む	良	-	2.5YR8/6 根	ロ膝部(近) ヨココナダ(体 部)ナダ	ロ膝部(近) ヨココナダ(体 部)ナダ	内面全体に布目感。 外延部に施釉し 体部(ナダ)	
110	燒窯窓	盤	整地層割り込み	(5.6)	(5.7)	-	-	中粒砂(0.5~0.3mm) を多量含む。粗粒砂(0.5~ 1.5mm)を少量含む	良	-	5YR6/6 根	ロ膝部(近) ヨココナダ(体 部)ナダ	ロ膝部(近) ヨココナダ(体 部)ナダ	内面全体に布目感。 外延部に施釉し 体部(ナダ)	
111	燒窯窓	盤	整地層割り込み	-	(3.9)	(4.8)	-	やや粗。粗粒砂(0.6~ 0.5mm)を少量含む	良	-	2.5YR6/6 根	ナダ	ナダ	内面全体に布目感	
112	燒窯窓	盤	整地層割り込み	-	(3.8)	4.0	-	やや粗。粗粒砂(0.6~ 0.5mm)を少量含む。漆 黒(2.0~1.5mm)を少量含む	良	-	2.5YR6/6 根	ナダ	ナダ	内面全体に布目感。 機械削並みで 不整	
113	軋製品	釘	整地層割り込み	4.7	9.7	9.5	-	-	-	-	-	-	重量 3g		
114	土師器	皿	包含層(上層面 -下層面間)	(33.8)	3.7	(7.0)	-	やや粗。赤色粒を多 量含む。中粒砂(0.5~ 0.3mm)を少量含む	良	-	5YR7/6 根	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(近) 体部(低部)ナダ	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(近) 体部(低部)ナダ	外表面に指擦痕。 破断面に斜状 の細い斜状工具痕	
115	土師器	皿	包含層(七層面 -下層面間)	(12.2)	2.5	(7.6)	-	中粒砂(0.5~0.3mm) を少量含む	良	-	10YR3/1 黑褐	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(近) 体部(低部)ナダ	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(近) 体部(低部)ナダ	外表面に指擦痕。 内外面全体が 黒化。(一部油墨)。	
116	土師器	皿	包含層(七層面 -下層面間)	(11.8)	2.35	(7.0)	-	やや粗。赤色粒を含 む。中粒砂(0.6~0.3 mm)を少量含む。粗 粒砂(1.0~0.5mm)を 微量含む	良	-	7.5YR7/4 にぶい根	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(近) 体部(低部)ナダ	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(近) 体部(低部)ナダ	油墨剥離。外側体 部に指擦痕。破 断面2面は断面か い棒等工具痕	
117	土師器	皿	包含層(上層面 -下層面間)	(13.5)	3.0	(7.5)	-	やや粗。赤色粒を含 む。中粒砂(0.5~0.3 mm)を少量含む。露 母を多量含む	良	-	10YR7/4 にぶい黄褐色	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(近) 体部(低部)ナダ	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(近) 体部(低部)ナダ	油墨剥離。外側体 部に指擦痕	
118	土師器	皿	包含層(上層面 -下層面間)	(12.0)	2.7	(7.0)	-	やや粗。中粒砂(0.5~ 0.3mm)を少量含む	良	-	7.5YR7/4 にぶい根	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(近) 体部(低部)ナダ	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(近) 体部(低部)ナダ	油墨剥離。外側体 部に指擦痕	
119	土師器	皿	包含層(上層面 -下層面間)	(14.4)	(2.65)	-	-	やや粗。中粒砂(0.5~ 0.3mm)を少量含む	良	-	7.5YR7/4 にぶい根	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(近) 体部(低部)ナダ	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(近) 体部(低部)ナダ	油墨剥離。外側体 部に指擦痕	
120	土師器	皿	包含層(上層面 -下層面間)	(12.5)	2.6	(8.0)	-	やや粗。赤色粒を含 む。中粒砂(0.5~ 0.3mm)を少量含む	良	-	7.5YR7/4 にぶい根	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(近) 体部(低部)ナダ	ロ膝部(ヨコ コナダ)体部(近) 体部(低部)ナダ	油墨剥離。外側体 部に指擦痕	

番号	種別	器種	出土遺構	法面 (cm)			被成	胎土	色、調				備考	
				右端 (奥さ)	膝高 (幅)	底径 (厚さ)			種	胎土	外面	内面		
121	土師器	皿	包含層（上層面 - 下層面間）	(12.3)	2.5	(7.0)	-	やや密。赤色鉱を多 量含む。中粒砂（0.5 ~ 0.3mm）を少量含む	良	-	7.SYR7/4 にぶい・緑 体跡・底面	口縁部)ヨコ ナダ ナダ ナダ ナダ	捺目打着。外面部 に指紋压痕	
122	土師器	皿	包含層（上層面 - 下層面間）	(13.6)	2.7	-	-	やや密。中粒砂（0.5 ~ 0.3mm）を微量含む	良	-	2.SYR7/6 粗	口縁部)ヨコ ナダ ナダ ナダ ナダ	外面部とも擦刷。 外面部に指紋压痕	
123	土師器	皿	包含層（上層面 - 下層面間）	(12.0)	2.3	-	-	やや密。赤色鉱を微 量含む。中粒砂（0.5 ~ 0.3mm）を微量含む	良	-	7.SYR7/4 にぶい・緑 体跡	口縁部)ヨコ ナダ ナダ ナダ ナダ	外面部に指紋压 痕	
124	土師器	皿	包含層（上層面 - 下層面間）	(11.4)	2.5	-	-	やや密。中粒砂（0.5 ~ 0.3mm）を含む	良	-	10YR7/3 にぶい・黄褐 体跡	口縁部)ヨコ ナダ ナダ ナダ ナダ	油焼付着。外面部 に指紋压痕	
125	土師器	皿	包含層（上層面 - 下層面間）	(13.0)	2.7	(7.5)	-	やや密。中粒砂（0.5 ~ 0.3mm）を やや多量含む。粗 粒砂（1.0 ~ 0.5mm）を 少量含む	良	-	7.SYR5/4 にぶい・緑 体跡	口縁部)ヨコ ナダ ナダ ナダ ナダ	油焼付着。刻溝痕 見込みナダ	
126	土師器	皿	包含層（上層面 - 下層面間）	(9.8)	1.8	4.5	-	やや密。赤色鉱を多 量含む。中粒砂（0.5 ~ 0.3mm）を少量含む	良	-	7.SYR7/3 にぶい・緑 体跡・底面	口縁部)ヨコ ナダ ナダ ナダ ナダ	外面部に指紋压 痕。外面部に板 状压痕あり。は刺 毛工具による平 行移形状	
127	土師器	皿	包含層（上層面 - 下層面間）	(13.8)	2.5	(8.0)	-	やや密。中粒砂（0.5 ~ 0.3mm）を少量含む	良	-	7.SYR7/4 にぶい・緑 体跡	口縁部)ヨコ ナダ ナダ ナダ ナダ	油焼付着。刻溝痕 見込みナダ	
128	土師器	皿	包含層（上層面 - 下層面間）	(13.4)	2.7	(6.5)	-	やや密。中粒砂（0.5 ~ 0.3mm）を少量含む	良	-	7.SYR7/4 にぶい・緑 体跡・底面	口縁部)ヨコ ナダ ナダ ナダ ナダ	器壁薄い	
129	土師器	皿	包含層（上層面 - 下層面間）	(9.5)	2.3	(6.0)	-	やや密。中粒砂（0.5 ~ 0.3mm）を微量含む	良	-	10YR7/3 にぶい・黄褐 体跡	口縁部)ヨコ ナダ ナダ ナダ ナダ	油焼付着。刻溝痕 見込みナダ	
130	土師器	皿	包含層（上層面 - 下層面間）	(9.0)	2.05	(2.8)	-	やや密。赤色鉱を多 量含む。中粒砂（0.5 ~ 0.3mm）を少量含む	良	-	7.SYR7/4 にぶい・緑 体跡	口縁部)ヨコ ナダ ナダ ナダ ナダ	外面部に底面に 压痕	
131	土師器	皿	包含層（上層面 - 下層面間）	(13.0)	3.1	(6.0)	-	やや密。中粒砂（0.5 ~ 0.3mm）を少量含む	良	-	7.SYR7/4 にぶい・緑 体跡・底面	口縁部)ヨコ ナダ ナダ ナダ ナダ	油焼付着。刻溝痕 見込みナダ	
132	灰陶	甕	包含層（上層面 - 下層面間）	-	(6.2)	-	-	やや密。粗粒砂（1.0 ~ 0.5mm）を多量含む	良	-	10YR5/3 にぶい・黄褐 体跡	タキ目 押注痕		
133	越中窯戸	皿	包含層（上層面 - 下層面間）	(15.0)	2.5	-	-	やや密。中粒砂（0.5 ~ 0.3mm）を微量含む	良	-	10YR5/3 淡黄褐	ロクロナダ	素焼き	
134	越中窯戸	皿	包含層（上層面 - 下層面間）	(15.0)	2.5	-	-	やや密。中粒砂（0.5 ~ 0.3mm）を微量含む。 中粒砂（4 × 4 mm） を含む。	良	-	10YR8/4 浅黄褐	ロクロナダ	素焼き	
135	越中窯戸	皿	包含層（上層面 - 下層面間）	(15.4)	3.7	6.5	-	やや密。中粒砂（0.5 ~ 0.3mm）を多量含む。 粗粒砂（1.0 ~ 0.5mm） を微量含む	良	-	7.SYR8/4 淡黄褐	ロクロナダ	底部回転み切り。 素焼き	
136	越中窯戸	青釉	包含層（上層面 - 下層面間）	(11.4)	2.1	(6.6)	灰釉	青	良	SYE/3 オリーブ黄 白	10YR7/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	内面に窓状の錆
137	越中窯戸	青釉	包含層（上層面 - 下層面間）	(16.0)	1.7	-	灰釉	青	良	SYE/2 オリーブ黄	10YR6/3 青	ロクロナダ	ロクロナダ	削り出し台。内 底面に輪止めの設
138	越中窯戸	青釉	包含層（上層面 - 下層面間）	-	(14.5)	(4.0)	鉄軸	青	良	10YR5/6 青	SYR6/6 緑	ロクロナダ、 ケブリ	ロクロナダ	削り出し台。内 底面に輪止めの設
139	越中窯戸	青釉	包含層（上層面 - 下層面間）	-	(14.5)	(4.0)	鉄軸	青	良	7.SYR6/4 青	10YR8/3 淡黄褐	ロクロナダ	ロクロナダ	底部回転み切り
140	越中窯戸	青釉	包含層（上層面 - 下層面間）	(11.5)	3.7	-	鉄軸	青	良	7.SYR8/3 黒	10YR6/2 淡黄褐	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ削落
141	越中窯戸	青釉	包含層（上層面 - 下層面間）	(34.0)	3.8	-	鉄軸	青	良	SYR5/5 明赤褐	2.5YR8/4 淡黄	ロクロナダ	ロクロナダ	脚部8日置焼(2cm あたり)
142	越中窯戸	青釉	包含層（上層面 - 下層面間）	(36.0)	7.0	-	鉄軸	青	良	SYR5/2 赤	10YR7/2 淡黄褐	ロクロナダ	ロクロナダ	脚部5日置焼 (1.3cmあたり)
143	越中窯戸	青釉	包含層（上層面 - 下層面間）	(37.0)	3.5	-	鉄軸	青	良	SYR5/5 明赤褐	2.5YR8/4 淡黄	ロクロナダ	ロクロナダ	脚部5日置焼 (1.3cmあたり)
144	越中窯戸	青釉	包含層（上層面 - 下層面間）	(36.0)	3.55	-	鉄軸	青	良	2.5YR6/1 赤	10YR8/1 淡黄褐	ロクロナダ	ロクロナダ	口縁部裏面の下部 に切り込み状の凹溝
145	越中窯戸	青釉	包含層（上層面 - 下層面間）	-	(6.1)	(12.0)	鉄軸	青	良	2.5YR8/3 にぶい・赤 青	2.5YR7/6 緑	ロクロナダ	ロクロナダ	脚部14日 (3.3cm あたり)

番号	種別	器種	出土箇所	法面 (cm)			縁	胎土	焼成	色調		調査	備考	
				口径	跡高	底径				種	胎土	外面		
146	縦中腹貫	杯	包含層(上縦面 - 下縦面間)	(20.0)	(6.7)	-	鉢輪	素	良	2.5YR4/2 灰白	5YR6/6 根	ロクロナデ	ロクロナデ	口唇部剥離跡
147	唐津	皿	包含層(上縦面 - 下縦面間)	(27.0)	(4.5)	-	灰輪	やや密。織痕粒状(1.5 ~ 1.0mm)を多少含む	良	10YR7/1 灰白	10YR6/3 に近い黄澄	ロクロナデ	ロクロナデ	
148	唐津	碗	包含層(上縦面 - 下縦面間)	-	(1.7)	5.8	灰輪	素	良	2.6Y6/1 灰白	7.5YR6/4 に近い根	ケズリ	ロクロナデ	削り出し高台
149	飯戸美濃	皿	包含層(上縦面 - 下縦面間)	(16.3)	2.6	(5.5)	灰輪	素	良	9YR6/3 オリーブ質	2.6Y7/2 灰質	ロクロナデ	ロクロナデ	削り出し高台
150	瓶戸美濃	瓶	包含層(上縦面 - 下縦面間)	(3.4)	(5.3)	-	灰輪	素	良	9YR6/3 暗オリーブ	2.6Y7/2 灰質	ロクロナデ	ロクロナデ	
151	志野	大皿	包含層(上縦面 - 下縦面間)	(28.0)	(5.9)	-	長石釉	素	良	2.5YR7/1 灰白	10YR7/1 に近い黄澄	ロクロナデ	ロクロナデ	口唇部内面に跡跡、円錐支と輪文を交互に配置。外側に粘土塊・鉢分離付着
152	向器	皿	包含層(上縦面 - 下縦面間)	-	(1.8)	4.3	鉢輪	素	良	7.5YR4/1 灰白	7.5YR6/3 に近い根	ロクロナデ	ロクロナデ	底割れ板条切り
153	唐慰	碗	包含層(上縦面 - 下縦面間)	-	(5.1)	(7.9)	灰輪	素	良	7.5YR5/2 灰白	2.6Y7/4 灰質オリーブ	ロクロナデ	ロクロナデ	
154	陶器	行平	包含層(上縦面 - 下縦面間)	(16.0)	(4.1)	-	鉢輪	素	良	10YR4/3 灰白	10YR6/1 黒地	ロクロナデ	ロクロナデ	外腹面部に残焼痕
155	陶器	土瓶	包含層(上縦面 - 下縦面間)	8.1	(2.3)	5.4	鋸歯 鉢輪	素	良	2.5Y8/2 灰白	5YR6/6 根	ロクロナデ	ロクロナデ	つまみ頭欠損。内面に墨書き(志野)。体側に2.2cmの切れ込み状の孔。
156	白磁	塔形 瓶	包含層(上縦面 - 下縦面間)	(14.2)	(2.8)	-	透明釉	素	良	NB/ 灰白	NB/ 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
157	磁器	皿	包含層(上縦面 - 下縦面間)	-	(1.65)	(2.6)	透明釉	素	良	NB/ 灰白	NB/ 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	薄く入賞
158	白磁	瓶	包含層(上縦面 - 下縦面間)	-	(2.55)	(4.9)	透明釉	素	良	8Y7/1 灰白	9YR8/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
159	伊万里	碗	包含層(上縦面 - 下縦面間)	(12.0)	(5.0)	-	透明釉	素	良	NB/ 灰白	NB/ 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	外表面繪文・復文
160	磁灰瓦	柳瓦	包含層(上縦面 - 下縦面間)	(11.2)	(10.0)	(3.9)	-	やや密。粗粒砂(1.0 ~ 0.5mm)を少々含む	良	-	NB/ 灰白	ナデ	ナデ	
161	生産関連	度津	包含層(上縦面 - 下縦面間)	6.1	7.2	3.1	-	-	-	-	-	-	-	重量: 112g
162	款製品	印	包含層(上縦面 - 下縦面間)	11.6	2.2	1.0	-	-	-	-	-	-	-	重量: 22g
163	石製品	火桶	包含層(上縦面 - 下縦面間)	30.0	32.5	25.0	-	-	-	-	-	-	-	
164	土師器	皿	堅地層中	(9.8)	2.05	(5.0)	-	やや密。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少々含む	やや不良	-	10YR5/2 灰質	ロ建削)ヨコ ナデ 体部~底部 ナデ	ロ建削)ヨコ ナデ 体部~見込 みヨコナ デ	
165	土師器	皿	堅地層中	(12.6)	2.4	(7.0)	-	やや密。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少々含む	良	-	7.5YR7/6 根	ロ建削)ヨコ ナデ 体部~底部 ナデ	ロ建削)ヨコ ナデ 体部~見込 みヨコナ デ	
166	麻押	器鉢	堅地層中	-	(5.5)	-	-	やや密。織痕片状混 合む。織痕粒状(1.5 ~ 1.0 mm)を少々含む。粗粒(2.0 ~ 1.5 mm)を少々含む	良	-	NB/ 灰	ロクロナデ	ロクロナデ	即日 10 日遺存 (3.2mあたり)
167	吉備	瓶	堅地層中	(11.7)	(3.7)	-	青磁釉	素	良	7.5Y6/2 灰白	7.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	外腹部絵画
168	須恵器	皿	堅地層中	-	(4.9)	(0.9)	-	やや密	やや不良	-	SYS1/ 灰	平行引き目	同上 内当て 真直	
169	土師器	皿	複乱	(13.5)	2.8	(6.7)	-	やや密。中粒砂(0.5 ~ 0.3mm)を少々含む	良	-	7.5YR7/4 に近い根	ロ建削)ヨコ ナデ 体部~底部 ナデ	ロ建削)ヨコ ナデ 体部~見込 みヨコナ デ	油塗付着。外腹 体部に指紋底痕
170	越中守戸	大口瓶	複乱	(11.5)	(4.1)	-	鉢輪	やや密	良	9YR3/2 暗紫端	10YR8/2 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
171	瓶戸美濃	小皿	複乱	-	(1.0)	3.2	鉢輪 灰輪か	素	良	5YR6/3 灰白	10YR5/4 に近い黄澄	ロクロナデ	ロクロナデ	底割れ板条切り
172	燒造漆	瓶	複乱	7.2	1.55	5.4	-	中粒砂(0.5 ~ 0.3mm) を多量含む 粗粒(2.5mm x 5.0mm)↑	良	-	2.5YR6/6 根	ナデ	ナデ	
173	越中守戸	壷	複乱	(29.0)	(3.5)	-	鉢輪	やや密	良	SYR4/3 に近い赤褐色	7.5YR7/4 に近い根	ロクロナデ	ロクロナデ	即日 8 日遺存 (2m あたり)
174	燒造瓦	軒丸瓦	複乱	(16.0)	(11.0)	-	-	中粒砂(0.5 ~ 0.3mm) を多量含む。粗粒(1.0 ~ 0.5mm)を少々含む	良	-	NB/ 灰	ナデ、ケズリ ナデ、コビ ナ	丁子縫跡	瓦
175	鉄製品	釘	複乱	(7.0)	0.7	0.5	-	-	-	-	-	-	-	重量 5g

第5節 自然科学分析

(1) 放射性炭素年代測定

1. はじめに

S K 6 から出土した炭化材 1 点について遺構の時期を判断するため放射性炭素年代測定を実施した。試料採取は調査担当者が 2009 年 3 月 18 日に行った。測定作業は、パレオ・ラボ AMS 年代測定グループが、加速器質量分析法（AMS 法）によって行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第 10 表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

第 10 表 測定試料及び処理

No.	試料データ	前処理
1	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry 備考：482 SK6 No. 5 090318	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1N, 塩酸：1.2N)

3. 結 果

第 11 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行つて暦年較正に用いた年代値と較正した年代範囲、慣用に従つて年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 行を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68. 2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期

第 11 表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

No.	$\delta^{13}\text{C} (\text{\%})$	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
1	-24.04 \pm 0.18	372 \pm 17	370 \pm 15	1460AD (44.9%) 1498AD 1505AD (5.4%) 1611AD 1602AD (17.9%) 1616AD	1450AD (67.6%) 1523AD 1575AD (1.8%) 1584AD 1590AD (26.0%) 1624AD

5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。 ^{14}C 年代の曆年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ : INTCAL09) を使用した。なお、 1σ 曆年範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の曆年範囲であり、同様に 2σ 曆年範囲は 95.4% 信頼限界の曆年範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。それぞれの曆年範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

(伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・竹原弘展 (株式会社パレオ・ラボ)、野垣好史 (富山市埋蔵文化財センター))

(2) 出土瓦の胎土分析

1. はじめに

今回の調査で廃棄土坑 SK 1 から鉄釘や土壁とともに棟瓦が出土した。この棟瓦は、明治 32 年 (1899) に焼失した建築物に使用されていた可能性が高い。今回の分析ではこの SK 1 出土棟瓦 1 点と調査区北西部の遺物包含層から出土した平瓦 1 点について、胎土材料の特徴を調べ、今後の分析に関する基礎データを提供するための胎土分析を実施した。分析は株式会社パレオ・ラボの藤根久、米田恭子、竹原弘展が行った。

土器の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の鉱物組成から、これら砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。

土器などの焼物は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質とも思える粘土層から採取されたことが、粘土探掘坑の調査から推察される (藤根・今村 2001)。また、粘土自体に珪藻化石やプランクトン・オペール、放散虫化石が混在していることがあり、材料として使用した粘土が生成された時の環境を示す場合がある。

一方、混和材としての砂粒物は、このような粘土層からの粘土採取の際に、粘土層の上下層や周辺に分布する砂層などから採取したことが予想される。東海地域では、弥生時代後期の赤彩を施したバレススタイル土器が知られており、これらのうち 3 分の 1 程度の土器には、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている (藤根 1998、車崎ほか 1996)。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層と考えられる。このように胎土分析においては、粘土や混和材について微化石およびテフラなどの鉱物を含めて検討することが必要である。

第 12 表 分析した瓦の特徴

試料 No.	種別	色調	取上げ No.	出土位置	調査所見
1	棟瓦	明黄褐色	No. 115	SK1	SK1 からは本試料と同様の棟瓦のほか、土壁や釘等が出土した。焼土・炭化材を多量に含むことから、火災後の廃棄土坑と考えられる。明治 32 年 (1899) の火災により焼失した建築物に使われていた瓦の可能性が高い。
2	平瓦	黒褐色	No. 471	遺物包含層 (X:10.5 Y:40.3 付近 Z:9.050)	平瓦の一部とみられる。調査区北西部の遺物包含層から出土した。詳しい時期は明確でなく、大きく江戸期の範疇で捉えられる。

2. 試料と方法

分析試料は、出土した瓦 2 点である。試料 No. 1 は、廃棄土坑 SK 1 から出土した棧瓦片である。旧本丸御殿に葺かれていたものと推定される。本丸御殿は明治 6 年頃以前は柿葺とみられることから、瓦に葺き直されたそれ以降から、焼失した明治 32 年までの間のものと考えられる。試料 No. 2 は、上層面と下層面間の遺物包含層から出土した、黒褐色の燻し瓦で、平瓦の一部とみられる。詳細な時期は不明だが江戸期のものである（第 12 表）。

【薄片の偏光顕微鏡観察】

各試料は、薄片の偏光顕微鏡観察を行い、粘土および砂粒の特徴について調べた。各試料は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作製した。

①試料は、はじめに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し、接着面と反対の面に平面を作製した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。②さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後スライドグラスに接着した。③その後、精密岩石薄片作製機を用いて試料を切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ 0.02mm 前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

薄片（プレパラート）は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石など）と大型粒子の特徴およびその他の混和物について観察と記載を行った（第 13 表）。

なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

【珪藻化石】

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは 10 ~ 数百 μm 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布する。小杉（1988）や安藤（1990）は、現生珪藻から環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（海水種、淡水種）を分類した。

【骨針化石】

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物の多くは海産であるが、淡水産としても 23 種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。このことから、骨針化石は水成環境を指標する。

【植物珪酸体化石】

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約 10 ~ 50 μm 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

【胞子化石】

胞子粒子は、直径約 10 ~ 30 μm 程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壤中にも含まれる。

【石英・長石類】

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。

【長石類】

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと

累帶構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帶構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は花崗岩などのケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石がある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類あるいは火山岩類に産出する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

[凝灰岩質]

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、結晶度が低く、直消光で観察した際に全体的に暗い粒子である。

[火山岩質]

輝石などの斑晶鉱物からなる斑晶質、完晶質からなる結晶度の高い岩石である。

[流紋岩質]

斑晶が斜長石（双晶）石英などからなる斑晶構造を呈する。基質はガラス質で流理構造を示す。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒なものから細粒なものまでさまざまである。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が 0.01mm 未満のものを微細、0.01 ~ 0.05mm のものを小型、0.05 ~ 0.10mm のものを中型、0.10mm 以上のものを大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約 0.06mm 以上のものを砂岩質、約 0.06mm 未満のものを泥岩質とした。

[不明粒子]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

[蛍光X線分析]

蛍光X線分析には、試料を融剤で希釈、ガラス化させて分析試料とするガラスピード法を用いた。必要量を岩石カッターで切り取り、表面の汚れ等を削り取った後、精製水にて超音波洗浄を行った。試料はセラミック製乳鉢で粉末にして、るつぼに入れ、電気炉で750°C、6時間焼成した。これを、無水四ホウ酸リチウム Li₂B4O₇と、リチウムメタボレイド LiBO₂を8:2の割合で調製した融剤3.6000gと十分に混合し、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラーにて約750°Cで250秒間予備加熱、約1100°Cで150秒間溶融させ、約1100°Cで450秒間振動加熱してガラスピードを作製した。

分析はフィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置 MagiX (PW2424型)にて、検量線法による定量分析を行った。標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所 (NIST) の岩石標準試料計15種類を用いた。定量元素は、酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、酸化ケイ素 (SiO₂)、酸化リン (P₂O₅)、酸化カリウム (K₂O)、酸化カルシウム (CaO)、酸化チタン (TiO₂)、酸化マンガン (MnO)、酸化鉄 (Fe₂O₃)の主成分10元素と、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr) の微量元素2元素の計12元素である。

3. 結 果

以下に、瓦の胎土薄片の顕微鏡観察と蛍光X線分析の結果について述べる。

[薄片の顕微鏡観察]

第13表に、薄片の顕微鏡観察結果を示す。観察は、微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。記載は、粒度組成や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組

第13表 瓦胎土中の微化石類と砂粒組成の特徴記載

試料No.	種類	粒度	最大粒径	微化石類の特徴		砂粒物岩石・鉱物組成					
				骨針化石、植物珪酸体化石 (不明)	珪藻化石 (海水種 <i>Stephanopyxis</i> 属)、骨針 化石、植物珪酸体化石 (イ ネ、その他)	石英・長石類)複合石英類 (微細)、角閃石類) 斜長石 (双晶・累帶)、カリ長石 (バーサ イト)、火山ガラス (バブル型)、斜方輝石、 雲母類、複合石英類、凝灰岩質、ジルコン	石英・長石類)複合石英類 (微細)、角閃石類) 斜長石 (双晶・累帶)、カリ長石 (バーサ イト)、火山ガラス (バブル型)、斜方輝石、 雲母類、複合石英類、凝灰岩質、ジルコン				
1	棟瓦	80~400 μm	1.36mm								
2	平瓦	50~250 μm	2.00mm								

第14表 瓦胎土中の粘土および砂粒の特徴

試料No.	種類	粘土の特徴						砂粒の特徴				鉱物の特徴				備考				
		放散虫化石	珪藻化石	珪藻化水種	珪藻化水種	珪藻化水種	骨針化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火成岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	ジルコン	輝石類	雲母類	
1	棟瓦	水成				△	Eg		△	△		○	○	△	△	○	○	○	○	尖った粒子含む
2	平瓦	海成	△		△	C		△	○	△	△	△	△	△	△	○	○	○	△	

成や微化石類などの特徴について示す。なお、不等号がある場合は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。また、第14表の◎は非常に多い、○は多い、△は検出、空欄は未検出であることを示す。

〔蛍光X線分析〕

第16表に蛍光X線分析結果を示す。酸化ナトリウム(Na2O)が1.14%と0.95%、酸化マグネシウム(MgO)が1.31%と1.03%、酸化アルミニウム(Al2O3)が20.4%と20.6%、酸化ケイ素(SiO2)が65.6%と67.6%、酸化リン(P2O5)が0.091%と0.175%、酸化カリウム(K2O)が2.32%と2.14%、酸化カルシウム(CaO)が0.54%と0.55%、酸化チタン(TiO2)が0.86%と0.92%、酸化マンガン(MnO)が0.048%と0.032%、酸化鉄(Fe2O3)が4.30%と3.30%、ルビジウム(Rb)が97ppmと80ppm、ストロンチウム(Sr)が89ppmと82ppmであった。

4. 考察

i) 微化石類による材料粘土の分類

瓦等の胎土および粘土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などの微化石類が検出された。微化石類の大きさは、放散虫化石が数100μm、珪藻化石が10～数100μm、骨針化石が10～100μm前後である(植物珪酸体化石が10～50μm前後)。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9μm以下、シルトが約3.9～62.5μm、砂が62.5μm～2mmである(地学団体研究会・地学事典編集委員会1981)。主な堆積物の粒度組成と微化石類の大きさの関係から、植物珪酸体化石を除く微化石類は胎土の粘土材料中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれてはいるものの、土器製作の場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

瓦胎土は、微化石類により、海成粘土を用いた胎土と水成粘土を用いた胎土に分類された。

試料No.1には、少ないものの海綿動物の骨格の一部の骨針化石が含まれていた。試料No.2には、少ないものの海水種珪藻化石が含まれ、骨針化石も含まれていた。

第15表 岩石片の起源と組み合わせ

		第1出現群							
		A	B	C	D	E	F	G	
片岩類		深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ		
第2 出現 群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

第16表 瓦胎土の蛍光X線分析結果

試料No.	Na2O (%)	MgO (%)	Al2O3 (%)	SiO2 (%)	P2O5 (%)	K2O (%)	CaO (%)	TiO2 (%)	MnO (%)	Fe2O3 (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)
1	1.14	1.31	20.4	65.6	0.091	2.32	0.54	0.86	0.048	4.30	96.6	97	89
2	0.95	1.03	20.6	67.6	0.175	2.14	0.55	0.92	0.032	3.30	97.3	80	82

鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的情況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（第14表）。岩石の推定は、複合石英類が深成岩類、複合石英類（微細）や砂岩質が堆積岩類、斑晶質・完晶質が火山岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、流紋岩質が流紋岩、ガラス質がテフラである。ただし、斑晶質・完晶質の多くは、結晶度が低く凝灰岩類に属すると考えられる。推定した起源岩石は、第15表の組み合わせに従って分類した。

試料No.1は、凝灰岩類を主体としてテフラを含む組成（Eg群）であった。試料No.2が堆積岩類を主体とした組成（C群）であった。

iii) 瓦の化学組成の特徴

瓦に限らず焼き物の基本材料は、粘土と適度な混和材である。化学組成において粘土は、粘土鉱物の化学組成を反映してアルミニウムが特徴的に多い。また、砂粒からなる混和材は、風化に強い岩石片や石英を反映してケイ素が特徴的に多い。

分析した瓦は、酸化アルミニウム（Al₂O₃）に関して、試料No.1が20.4%、試料No.2が20.6%と、いずれも高く、粘土分が多い。粘土と砂粒物の化学組成を代表する元素に注目して、Al₂O₃-SiO₂分布図を示す（第47図）。このAl₂O₃-SiO₂分布図は、材料粘土と砂粒の混合割合を示す図である（藤根・小村2002）。分析点数が2点であるため、十分な検討はできないが、この分布図では両者の瓦は接近して分布していることから、粘土と砂粒の混合割合は類似していると言える。

iv) 瓦の粘土材料に関する富山湾周辺部の地質環境

薄片の顕微鏡観察において、試料No.1の棟瓦胎土は骨針化石を含み、凝灰岩類を主体としてテフラを含む組成（Eg群）であった。また、試料No.2の平瓦胎土中には海水種珪藻化石 *Stephanopyxis* 属や骨針化石が含まれ、堆積岩類を主体とした組成（C群）であった。

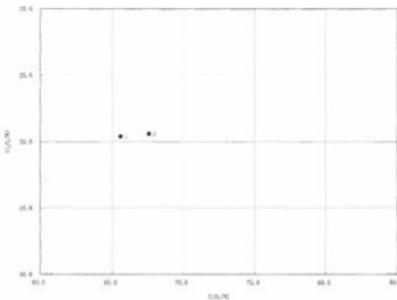
これらの微化石類や砂粒組成の特徴は、粘土材料の採取対象とした地層堆積物を反映した結果である。

具体的に瓦生産地が分からず現状であるため、周辺地域の地質環境について概観する。

富山湾周辺では、富山県南部地域において第四紀更新世の砂・泥瓦層からなる上段階（層）、新第三紀鮮新世の泥岩からなる大桑階（層）や音川階（層）あるいは凝灰質泥岩からなる砺波階（層）などが分布する（藤井ほか1992）。なお、これら地層は、隣接する石川県などにも分布している。

これらの地層は、主に海域で堆積した海成層であるが、試料No.2の平瓦胎土中に含まれていた海水種珪藻化石 *Stephanopyxis* 属あるいは骨針化石は、これら海成層を反映したものと考えられる。ただし、第三紀鮮新世の地層は固結した地層であることから、直接採取して利用した訳ではなく、これらの地層の粘土を母材として、後の時代に堆積した地層を採取していると推定される。

海水種珪藻化石が含まれているという



第47図 瓦の酸化アルミニウム(Al₂O₃)-二酸化ケイ素(SiO₂)分布図

(Na1:棟瓦、Na2:平瓦)

ことは、少なくとも海成層が分布する地域の粘土材料であることを意味している。

5. おわりに

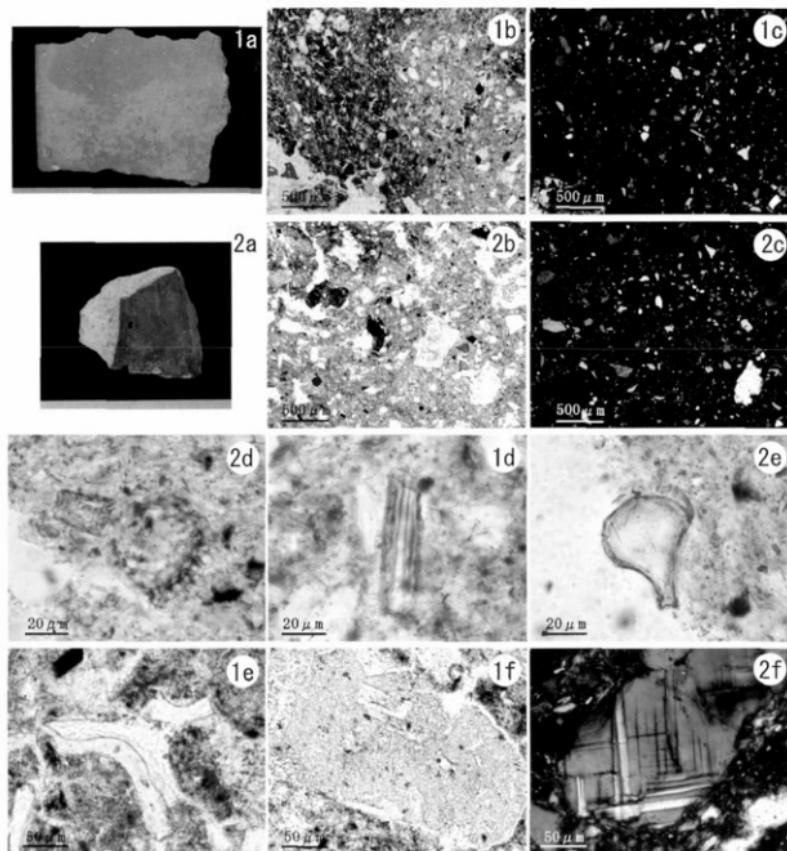
棟瓦と平瓦の胎土の材料の特徴を調べるために、瓦薄片の偏光顕微鏡観察と蛍光X線分析を行った。薄片の顕微鏡観察において、試料No.1の棟瓦胎土は、骨針化石を含み、凝灰岩類を主体としてテフラを含む組成（Eg群）であり、試料No.2の平瓦胎土は、海水種珪藻化石 *Stephanopyxis* 属や骨針化石が含まれ、堆積岩類を主体とした組成（C群）であった。少なくとも、海水種珪藻化石が含まれていたことから、海成層が分布する地域の材料と推定された。なお、化学組成では、いずれの瓦も粘土分が多く、主な化学組成については類似した組成であった。

ここで示した瓦胎土の検討は、今後の分析に関する基礎データを提供するものである。

（藤根久、米田恭子、竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）、野垣好史（富山市埋蔵文化財センター））

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42 (2), 73-88.
- 地質調査所 (1993) 20万分の1地質図「青森」. 通商産業省工業技術院地質調査所.
- 地学団体研究会・地学事典編集委員会編 (1981) 増補改訂 地学事典. 1612p, 平凡社.
- 藤井昭二・相馬恒雄・後藤道治・神島利夫・清水正之・金子一夫 (1992) 10万分1 富山県地質図及び説明書. 富山県, 201p.
- 藤根 久 (1998) 東海地域 (伊勢一三河湾周辺) の弥生および古墳土器の材料. 東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会編「土器・墓が語る: 美濃の独自性 弥生から古墳へ」: 108-117, 東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会.
- 藤根 久・今村美智子 (2001) 第3節 土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「波志江中宿遺跡」: 262-277, 日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団.
- 藤井昭二・相馬恒雄・後藤道治・神島利夫・清水正之・金子一夫 (1992) 10万分1 富山県地質図及び説明書. 富山県, 201p.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- 小村美代子・藤根 久(2002)山茶碗胎土の化学的評価. 日本国文化財科学会第19回大会研究発表要旨集, 60-61, 日本国文化財科学会.
- 車崎正彦・松本 完・藤根 久・藤井 量・古橋美智子 (1996) 土器胎土の材料—粘土の起源を中心に—. 日本考古学協会編「日本考古学協会第62回大会研究発表要旨」: 153-156, 日本考古学協会.



1a. 棱瓦 1b. 棱瓦胎土の薄片（開放ニコル） 1c. 棱瓦胎土の薄片（直交ニコル）

2a. 平瓦 2b. 平瓦胎土の薄片（開放ニコル） 2c. 平瓦胎土の薄片（直交ニコル）

2d. 珪藻化石（海水種 *Stephanopyxis* 属） 2e. イネ起動細胞珪酸体

1e. ガラス質（バブル型） 1f. 凝灰岩室 2f. 微斜長石

第 48 図 出土瓦と偏光顕微鏡写真(数字は試料No.に対応)

第6節 小 結

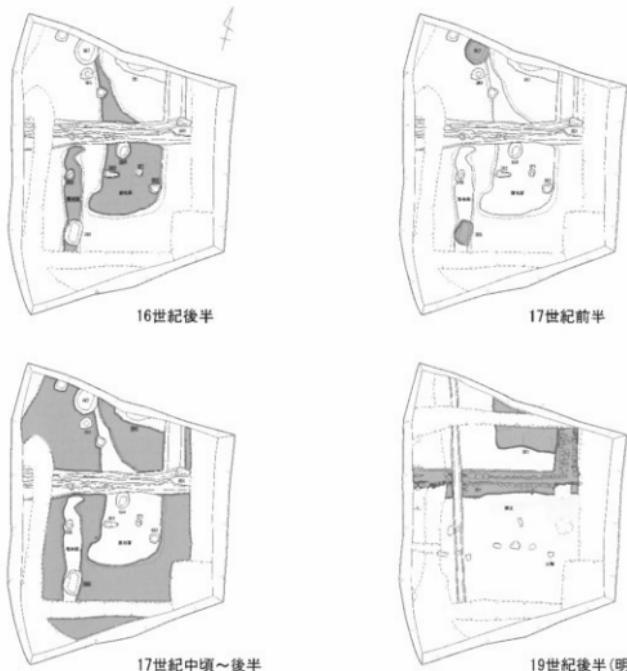
(1) 遺構の変遷と性格

本調査では調査対象深度までにおいて、上層、下層2層の遺構面を検出した。

以下、各時期における遺構の様相と変遷をまとめる。

16世紀後半 下層面の整地層1が該当する。遺物から16世紀後半の中世富山城期の遺構と考えるが、17世紀初頭の慶長期富山城の遺構の可能性も残る。整地層1の検出レベルは標高約9.0mであるが、約25m南で行った2003年度の試掘調査(15-1T)では、ほぼ同じレベルから17世紀初頭とされる整地層が確認されている(富山市教委2004)。ただし、15-1Tの整地層は黄色シルト質粘土とされ、本調査区の砂質土とは異なるほか、盛土方法も本調査区ほど細かい単位となっておらず、一連の整地層ではないとみたい。本調査区の整地層とは時期が異なるのであろう。整地層1より一段階古い時期のある整地層2は部分的な検出にとどまり、詳細は不明である。

整地層1は、場所により違いはあるが5cm程度の砂質土を薄く盛土して形成するという、細かい作業工程がうかがえる。第3節で記したとおり、本来は遺存範囲より広く存在したとみられる。性格について特定はできないが、考えられる可能性を検討すると次のとおりである。



第49図 遺構変遷図 (1:250)

中世富山城の縄張りや施設配置等などはまだ不明な点が多いが、これまでの調査から本調査区のすぐ西側に南北方向の堀の存在が推定されており、堀の東側が主郭、西側が副郭と想定されている。また、本調査区のすぐ北側は東西方向の堀があったと推定されている（富山市教委 2004）。それぞれの堀の内側（南側と東側）に土塁が築かれた可能性を考えると、本調査区は主郭北西角の土塁際に位置することになる。このことから、整地層1の性格として、土塁際にめぐっていた道路遺構の可能性が推定できるほか、主郭の北西角部に置かれた建物等に伴う基礎工事であったことも考えられる。また、土塁の幅によっては、調査区が土塁内部に含まれることも考えられるため、整地層1は土塁盛土あるいはその基礎構造の可能性も否定できない。

16世紀末～17世紀前半 SK 6, SK 7がこの時期に該当する。SK 6が16世紀末～17世紀初頭、SK 7はやや時期幅をもたせ17世紀前半ととらえておきたい。SK 6出土炭化物の放射性炭素年代測定では、1460AD (44.9%) 1498AD、1505AD (5.4%) 1511AD、1602AD (17.9%) 1616ADの結果が得られている（第5節）。このうち1602AD～1616ADが遺物の時期に近い。

SK 6とSK 7は、いずれも出土する唐津が16世紀末～17世紀初頭を主体とする。この点で大きな時期差を見出しつくったが、士師器皿は明らかな違いがあり、また排他的な出土状況を示すことから、系譜の差ではなく時期差と考えた。焼塙壺はこの時期のものとみられる。

17世紀中頃～後半 整地層を削平する掘り込みがなされた時期である。整地層掘り込みの出土遺物は16世紀末から17世紀後半までの遺物が混在する。整地層掘り込みに含まれる古い時期の遺物は、もともと調査区内に存在した16世紀後半から17世紀前半の遺構に伴う遺物が混ざり込んだためと考えられる。SK 7との切り合い関係も考慮して、17世紀中頃～後半とみておく。寛永16年（1639）の富山藩成立後、あるいは寛文元年（1661）年の富山城改修期以降の造成によるものか。

18世紀～19世紀前半 この時期の遺構は確認していない。本調査区に限らず、城址公園内においては当談期、特に18世紀の検出遺構は少ない。これは遺構が形成されなかつたことによるのではなく、多くの場所でこの時期の層自体が削平されているためである。幕末から明治期にかけての造成が原因であろう。

19世紀後半（明治期） 上層面のSD 1、SK 1がある。

SK 1の埋土は焼土を主体とし、桟瓦、釘、土壁、炭化物を含む。火災後の後片付けに伴う廃棄土坑とみられる。層位と出土遺物から明治期の遺構と考えられるが、この時期に生じた火災で最も可能性が高いのは、明治32年（1899）8月12日に起きた大火である。この大火で廢藩置県後、県庁として利用されていた旧本丸御殿や旧城内にあった施設の多くが焼失した。出土した桟瓦、釘、土壁などは本丸あるいは西ノ丸に存在した建築物に使われていたものの可能性が高く、火災後の廃棄物を処分するため近くに穴を掘って埋めたのである。

石組溝SD 1は、切り合い関係から明治32年と推定できるSK 1より後の時期の構築である。また、明治33年には本調査区付近から北側に県庁が新築されるため、それ以前に存在した遺構と考えられる。SD 1の南東側にあり上から掘られたコンクリート基礎は新築された県庁のものとみられる。したがって、SD 1は、明治32年の大火後から明治33年の県庁新築までの短期間に構築され、廃絶した遺構と考えられる。その用途は、本丸内の排水を北側の内堀に流す排水路とみられる。

SD 1西端部とそこから約2m東の地点には、半割した天端石とみられる石材があり、この上面である標高約9.35～9.4mが当時の地表面と推測できる。SK 1の掘り込みレベルもほぼ同じ高さである。本調査区の調査当時の地表面の標高は10.0～10.4mであるので、明治期から現在までに1m近い盛土造成がなされたことになる。

(2) 廃棄土坑SK 1と出土遺物について

廃棄土坑SK 1からは大量の焼土とともに、棟瓦・釘・土壁などが出土した。これら遺物の特徴は次のとおりである。

釘はいずれも断面方形の和釘である。図化したもののうちでは長さ7cm前後に復元されるものが4本（第41図21・22・23・27）と多く、屈曲した24・25は8.0cm以上、26は7.5cm以上である。

土壁は、第41図16・17、第42図18では4～5層の土塗りが認められる。実測図の下面是平滑で、本来はこの上に壁面となる上塗りがなされたと推定されるが、この痕跡は残っていない。14・17・18は小舞の痕跡がある。小舞を巻き込む土塗りはスサを多く含んでいる。17・18は、小舞端部から反対の平滑面までの厚さがおよそ4～4.5cmである。また、小舞には繩を絡めた痕跡もある。これに対して、縦横の小舞痕跡が残る第41図14は、小舞端部から平滑面までが約2.7cmと薄く、小舞に繩の痕跡は認められない。塗られた場所や部位の違いを示していると思われる。

瓦は多くが焼し瓦であるが、部位あるいは個体によっては焼成が十分でなく、黄橙色を呈するものがある。焼し瓦以外に一部黒褐色の釉薬がかかるものも出土している。

SK 1の出土遺物は以上の3種類が主体を占め、木材は腐朽した可能性もあるが少量である。石材もほとんどない。本丸の2009年度調査では石材をまとめて廃棄した土坑を検出しておらず、物によつて廃棄する場所を変えていた可能性がある。

これらの遺物は大量の焼土に混じって出土しており、SK 1は火災後の後片付けに伴う廃棄土坑とみることができる。その時期は層位と出土遺物から明治時代頃と考えられる。このあたりの時期に生じた火災のなかでは、明治32年に生じた大火の可能性が高い。旧城域の半分以上が焼けたとされ、当時県庁として使われていた旧本丸御殿や時鐘台など城址公園内に存在した施設も焼失した。この大火では公園内に火災直前に建てられた日枝神社や關西府県連合共進会場施設も焼いているが、出土した釘が和釘であることから、こうした明治期の建造物の可能性は低く、江戸時代に建てられたものに伴うとみられる。さらに、離れた場所からわざわざ本丸に廃棄に来るとは考えにくいため、SK 1に近い本丸あるいは西ノ丸に存在した建築物が考えられよう。

こうした条件に合う建物として、天保4（1833）年に建てられ、明治期以降は県庁として使われた本丸御殿がある。県庁として使用されていた当時の写真（第50図）をみると、屋根は棟瓦葺きであることが読み取れ、出土瓦と一致する。しかし、出土したような土壁が本丸御殿に使われていたかは疑問が残る。また、本丸・西ノ丸には詳細不明ながら江戸時代から存在したとみられる土蔵があった。土壁は、本丸御殿より土蔵の方が使われた可能性は高いかもしれない。これ以外にも史料・絵図には記されない解や他の建築物が存在していた可能性もある。使われた場所の特定には課題を残すものの、当時の建築物の実態を示す資料といえる。



第50図 明治期の富山県庁(旧本丸御殿)(高井1993)

(3) 焼塙壺について

本調査区からはSK 7とその付近から焼塙壺のコップ形の身7点と蓋3点が出土した。身は小川望氏による「輪積み成形」I-3類、蓋はア①類（小川2008）に相当するとみられる。いずれも刻印は認められない。SK 7と整地層掘り込み、攪乱から出土しているが、整地層掘り込みと攪乱から出土したものはSK 7周辺に集中していることから、本来はSK 7に伴っていたものが後世の削平・攪乱で付近に散乱した可能性が高い。したがって、10点はいずれもほぼ同時期の遺物と推定され、17世紀前半とみられる。なお、詳しい地点は不明だが、本丸からはこのほかに昭和期の工事の際に身1点が出土している（富山市郷土博物館2007）。

本報告にあたり、これまで行われた富山城・城下町調査の出土遺物について、報告書非掲載遺物を含め再点検したところ、可能性のあるものも含め19点存在することを確かめた。多くの遺物が出土した三ノ丸の2014d・2015b調査は、現在整理作業中であるため点数はさらに増える可能性がある。

刻印が存在する4点は、いずれも蓋である。身は破片資料もあるので断定はできないが、刻印があるものは出土していない点に特徴がある。

地点別の出土数をみると、本丸11点、三ノ丸の重臣武家屋敷2点、城下町6点となる。城下町出土のうちNo.14～17出土地点は、寛文期（1661年）以降は武家屋敷、それより前は町屋敷と時期による土地利用の違いがあるのでどちらに伴うか単純には決められないが、少なくともNo.14・15は、遺構の時期から武家屋敷に伴うと考えられる。本丸での出土点数が特に多いことが注目されるが、調査面積との比率でみればこの傾向はさらに顕著となる。渡辺誠氏は、焼塙壺は出土遺跡の階層性が顕著であるとし、京都市内では公家、武家屋敷、寺社跡や料亭跡等に集中し、地方でも城跡に集中する

第17表 富山城・城下町出土の焼塙壺

No.	身/蓋	出土地点	調査区・遺構	器形分類	刻印	文獻
1	身	本丸	昭和期の工事中に出土	I-3	×	富山市郷土博物館2007
2	蓋	本丸	2008d(SK7)	ア①	×	本書(55)
3	蓋	本丸	2008d(SK7)	ア①	×	本書(56)
4	身	本丸	2008d(SK7)	I-3	不明	本書(57)
5	身	本丸	2008d(整地層掘り込み)	I-3	×	本書(107)
6	身	本丸	2008d(整地層掘り込み)	I-3	×	本書(108)
7	身	本丸	2008d(整地層掘り込み)	I-3	不明	本書(109)
8	身	本丸	2008d(整地層掘り込み)	I-3	不明	本書(110)
9	身	本丸	2008d(整地層掘り込み)	I-3	不明	本書(111)
10	身	本丸	2008d(整地層掘り込み)	I-3	不明	本書(112)
11	蓋	本丸	2008d(攪乱)	ア①	×	本書(172)
12	蓋	三ノ丸(重臣屋敷)	2015b(SD01)	ア①	×	整理中
13	蓋	三ノ丸(重臣屋敷)	2015b(SD01)	オ①	大桟口[七カ]口堀	整理中
14	蓋	城下町(町屋敷/武家屋敷)	2005(表土中)	オ①	なん者ん七度/本やき志本	富山市教委2006b(非掲載)
15	蓋	城下町(町屋敷/武家屋敷)	2005(石組水路北掘り方)	オ①	大口□□口[堀カ]	富山市教委2006b(296)
16	蓋	城下町(町屋敷/武家屋敷)	2014a(SX031)	ア①	×	富山市教委2014c(非掲載)
17	身	城下町(町屋敷/武家屋敷)	2014a(SX053)	1	不明	富山市教委2014c(非掲載)
18	身	城下町(町屋敷)	2013c(SK23)	I-3	不明	富山市教委2006c(非掲載)
19	蓋か	城下町(町屋敷)	2013c(町屋敷)	エ①か	大桟上製口/大坂南久 太瀬/高田屋庄八	富山市教委2006c(221)

・調査区は第2表・第3図に刻印

・刻印の「不明」は破片資料により有無が決定できないもの

・No.14～17の出土地点は時期によって違うがあり、寛文期（1661）

以降は武家屋敷、それより前は町屋敷である

ことを指摘している（渡辺 1985）。江戸市中における分布を検討した小川望氏も、より詳しい分析が必要としつつも社会的階層による一定の偏在が確認できるとしている（小川 2008）。富山城跡でも本丸での出土が突出しているという点で、階層差によるある程度の分布の偏在が認められそうである。

また、富山城・城下町では、各地点で満遍なく出土するのではなく、ある特定の場所に特定のタイプが集中する傾向がある。例えは城下町では、大規模に調査を行った 2008 b 調査や 2014e 調査で出土していないに対し、96 m² の調査面積しかない 2014a 調査区で 2 点出土している。この 2 点は I -3 類の身とこれに対応するア類の蓋である。本丸も本報告 SK 7 付近に 10 点が集中し、いずれも I -3 類の身とア類の蓋である。また、城下町の 2005 年度調査で出土した蓋 2 点はいずれも才類の蓋である。こうした出土傾向から、ある特定の時期に特定の場所に対してまとまった数の焼塙壺が持ち込まれたと推測できるのではないか。

周辺地域では金沢城・城下町でまとまった量の焼塙壺の出土があり、18 ~ 19 世紀を中心とする京都深草産・型の鉢形焼塙壺が多数を占めることが指摘されている（北陸近世遺跡研究会ほか 1995、増山 2000）。富山城・城下町も、才類の蓋があるので対応する鉢形の身が流通していたことが推測できるが、主体は 17 世紀が中心とみられるコップ形である。いっぽうで、コップ形の身に刻印のあるものが少ないとされる点は、両城とも共通する。このように同じ北陸地域、さらに加賀藩と富山藩という関係の深い地域であっても、出土状況は一様ではないことが確認できる。

大雑把な傾向を把握するにとどましたが、今回の集成によって富山城・城下町にも一定量の焼塙壺が存在したことが明らかとなつた。今後、他地域との比較などより詳しい検討を行う必要がある。

（野垣）

第6章 2010年度調査（本丸南辺土壘）

第1節 調査の方法

概要 本丸南辺の土壘上面に設定した調査区である（第1図）。富山市郷土博物館の東に位置する。2011年度にこの土壘北側に新たに石垣が新設される計画があったことから、土壘の残存状況の確認のため調査を行ったものである。土壘上は樹木が多く植わっており、空闊地にA～Cの3調査区を設定した。調査面積は計87m²である。土壘の残存状況の確認が主目的であったため、表土から土壘検出面までの掘削に留めた。ただし、土壘検出面で確認した土坑等については完掘し、調査区の一部に断割りを入れて土壘盛土状況の確認を行った。

表土掘削・人力掘削 2011年2月23日から準備作業を開始し、3月2日から調査を開始した。樹木によりバックホウの進入が困難であったことや表土はごく薄いことが予想されたため表土掘削は人力により行った。表土・造成土にも遺物を含むことから、掘削には慎重を期した。ほぼ表土直下で土壘盛土層を検出した。3月7日からジョレンなどを使用し人力による遺構検出作業を行った。

土壘検出面において見つかった遺構は、移植ゴテで遺構掘削を行った。基本的に半載で掘り下げを行い、土層状況の確認・記録後、完掘した。遺構出土遺物は、小規模な遺構や細片については一括取り上げとし、主要なものは座標による取り上げとした。

また、各調査区において土壘の盛土状況や土壘斜面の傾斜を確認するため、調査区の一辺に沿って深さ0.7m程度の断割りを入れた。

記録作業 平面図・断面図・立面図は、トータルステーションを用いた手測により縮尺20分の1で作成した。測量の基準となる公共座標は旧系の日本測地系によった。

写真撮影は6×7判と35mm判を用い、デジタルカメラも併用した。

現地説明会 2011年3月29日に現地説明会を実施し、約65名の市民の参加があった。

埋戻し 3月30日に埋戻しと機材撤収を行い、調査を完了した。

整理作業 現地調査終了後から、報告書作成に向けた整理作業を富山市埋蔵文化財センターにおいて行った。洗浄・注記後、調査区・遺構ごとに出土遺物を区分し、主要な遺物を抽出した。土壘盛土・遺構の出土遺物は少なかったため、表土・造成土から出土したものについても一部図化を行った。抽出した遺物の実測・トレースは2012年度に株式会社太陽測地社、遺構トレースについては2014年度に株式会社イビソク北陸支店に委託して実施した。



調査風景

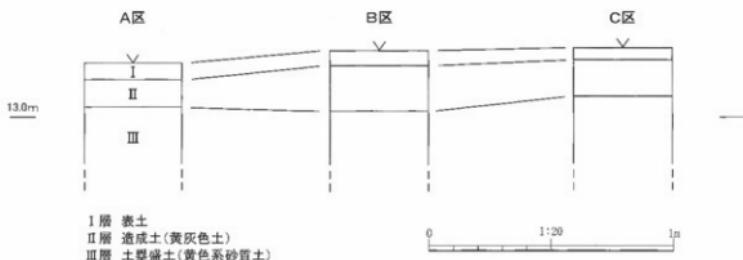


現地説明会

第2節 基本層序

土壘上面の標高は、現在東側（A区）が標高13.22m、西側（C区）はやや高く13.28mとなる。土壘の南（堀側）斜面は、戦後に模造石垣とされ、北（本丸側）斜面も玉石積みに改変されるなど、土壘南北の斜面寄りは現代に設置された構造物により改変がくわわっているため、影響の少ない中央部の基本層序を示す。3調査区いずれも同様の堆積状況である。

厚さ5cm程度の表土（I層）の下に、4~20cm程の厚さで黄灰色土の造成土（II層）がみられる。I・II層は近代以降の土層で、III層が近世の土壘盛土層である。土壘盛土は黄色系の砂質土を基本とする。近世の土壘盛土層の検出レベルは約13.0~13.1mである。



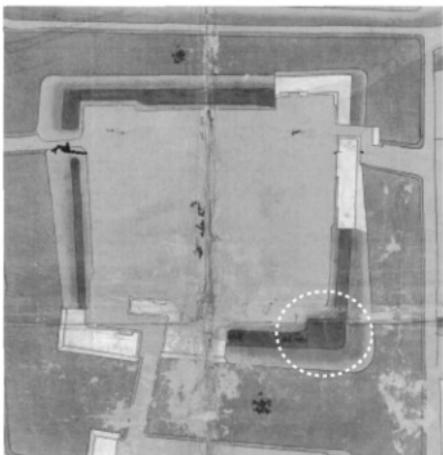
第51図 2010年度調査区基本層序

第3節 遺構

(1) 土壘の現況と概要

本丸南東部に鉄門石垣から東に延びる土壘の高まりがある。現在地上に土壘が残存するのはこの部分だけである。本丸からは現況で約2.5~3m高く、堀の水面からは約6mの高さがある。堀に面した土壘南斜面は戦後に模造石垣に改変され、本丸側の北斜面も玉石積みとされた。このときに土壘の裾部付近や斜面部がカットされ、往時と比べると全体的に痩せ細った状態になっていると考えられる。以上のとおり土壘斜面は現在、両側とも外見上は石積みとなって旧状をとどめておらず、上面のみ土が露出している状態にある。

現況の土壘幅はおよそ9mであるが、



第52図 本丸天守台の位置
「万治年間富山旧市街図」部分（富山県立図書館蔵）

東側で北辺が大きく広がる。これは江戸時代前期の寛文期の改修時に天守台が造成されたことを反映するものであろう（第52図）。ただし、富山市埋蔵文化財センターの調査で天守台の石垣が検出されなかったことから、最終的に天守閣は建築されなかつたとみられている。本来は天守台から北へも土塁が延びていたが、地上には残存しない。また、南東隅角部も戦後の道路建設によりやや削られていったため、現在の土塁隅角は江戸期の状況を残していない。

調査区は、東からA～C区の3区を設定した（第53図）。樹木が多く植わる空閑地を対象としたため調査区の形状は不整形である。A区は南東部に位置し、B区・C区は土塁南辺の中央付近に位置する。以下、調査区ごとに記述する。全調査区を通してみた土塁の変遷は本章第5節で検討する。

（2）A区（第54図）

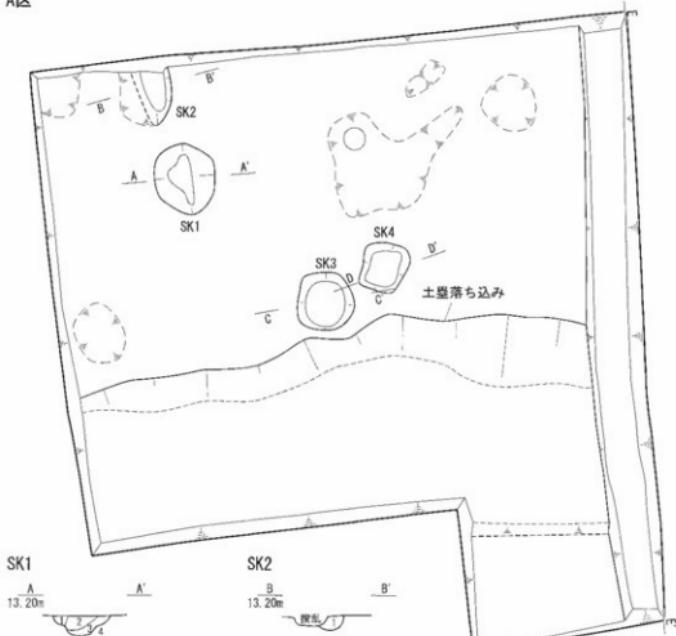
地表下約0.2m、標高13.04mで黄色系の土塁盛土層を確認した。調査区の中央で東西方向の土塁の傾斜変換ラインを確認し、ここから南側（堀側）に向かって落ち込む。調査区東辺に入れた断割りの断面観察から落ち込み角度は約40°と推定できる。

断割りは検出した土塁上面から深さ約0.75mまで掘削した。盛土（第54図東壁8～15層）は、3～5cm大の礫を多く含む黄色系砂質土を基本とする。盛土方法は、厚さ0.2～0.3m、幅1～2m程度の土層を一単位としてほぼ水平に盛っている。土塁斜面に沿って堆積する7層は土塁の流土とみ



第53図 2010年度調査区全体図

A区



SK3



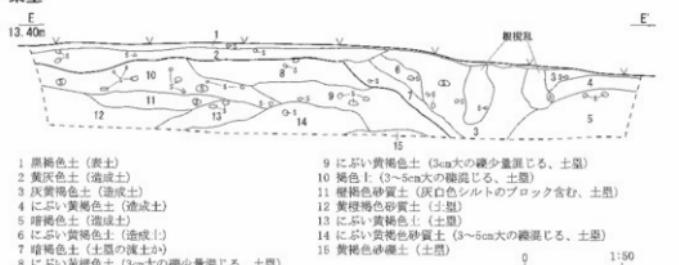
1. 灰黃褐色土
2. 灰黃褐色土（黄褐色土30%混じる）

SK4



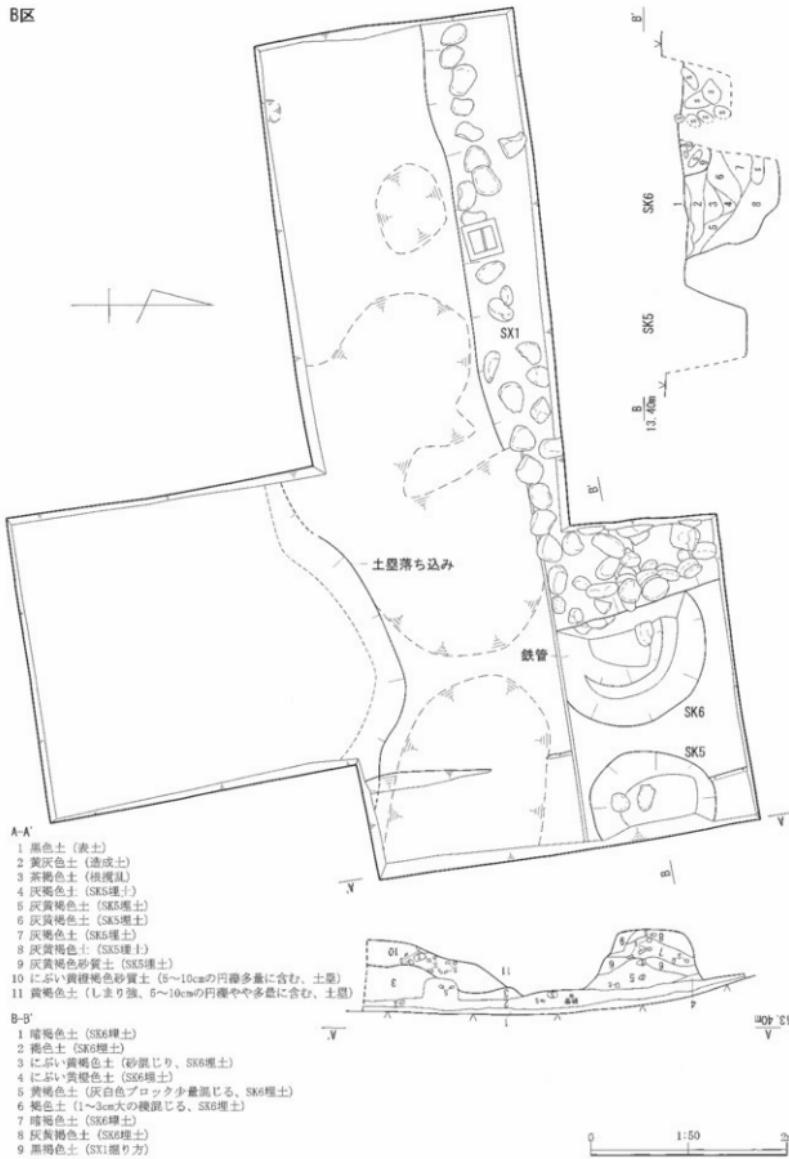
1. 灰褐色土
2. 灰黃褐色土

東壁



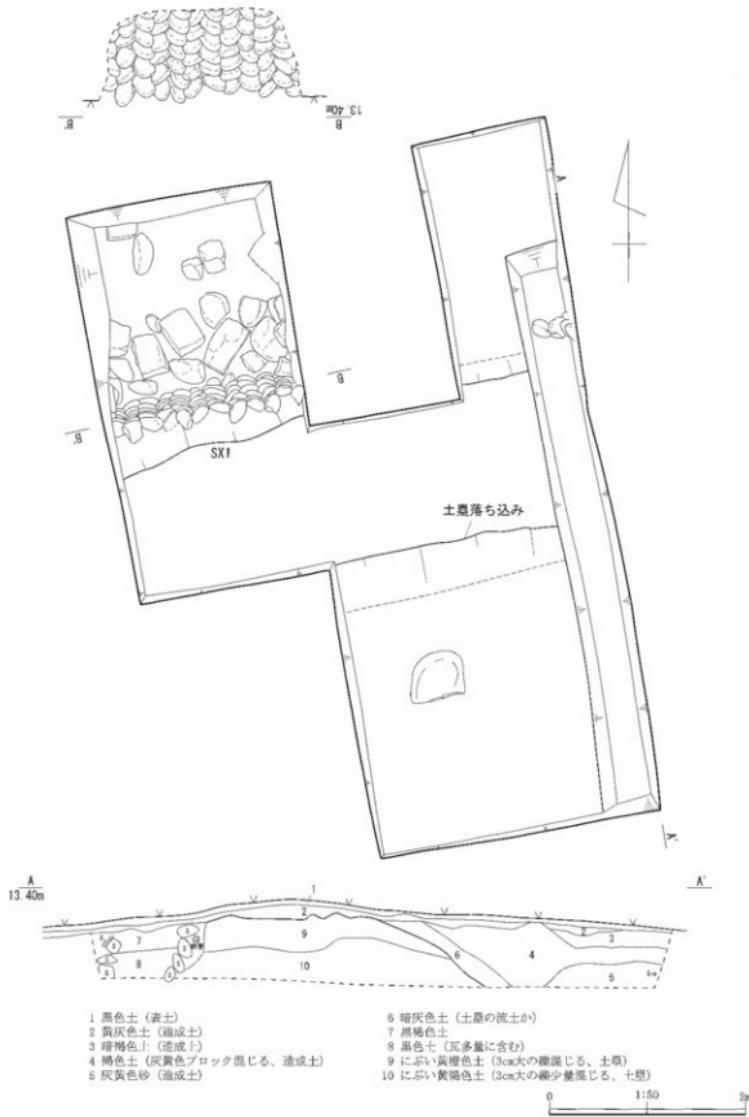
第54図 2010年度調査A区平面図・断面図

B区



第55図 2010年度調査B区平面図・断面図

C区



第 56 図 2010年度調査 C 区平面図・断面図

られる。3～6層は戦後に模造石垣を積んだ際の裏込め土であろう。

土壘検査面においていくつかの掘り込みを確認した。明らかに搅乱とみられるものを除いて、4基の土坑があるが、いずれも遺物を含まないため時期は不明である。

S K 1 楕円形を呈し、長軸0.75m、短軸0.6m、深さ0.2mである。底面は不整形で、凹凸がある。埋土は比較的細かく、4層が確認できる。

S K 2 北側は調査区外に広がるが、楕円形状の土坑と推定される。長軸0.6m以上、短軸0.38m以上、深さ0.15mである。

S K 3 円形を呈し、径約0.6m、深さ0.12mである。

S K 4 S K 3に隣接する。不整方形を呈し、長軸0.5m、短軸0.48m、深さ0.15mである。

(3) B 区 (第55図)

地表下約0.2m、標高13.02mで土壘盛土層を検出した。調査区中央は大きな根搅乱が入る。調査区南部に東西方向の土壘落ち込みの傾斜変換線があり、ここから南（堀側）に向かって土壘斜面となる。東壁での土層観察によると、土壘盛土（10・11層）は、A区と同様、穂の多い黄色系土層を主体としている。

調査区の北東部でS K 5、S K 6、北西部で石積み遺構S X 1を検出した。

S K 5 東側は調査区外へ続くが、円形を呈すると推定される。長軸1.3m、短軸0.75m以上、深さ0.65mである。灰黄色系の埋土からなる。土師器皿が出土した。

S K 6 S K 5の西に隣接して検出した。西側はS X 1で削平されている。径約1.7mの円形に復元され、深さは約1.0mである。東壁面は途中で傾斜が緩くなり、テラス状の段ができる。土師器皿、越中瀬戸、伊万里、磁器、焼し棟瓦が出土した。江戸時代前期の遺物も含むが、棟瓦が出土していることから江戸後期以降の遺構と考えられる。

S X 1 玉石積み遺構である。西側のC区に連続する。C区の調査から戦後の遺構であることが明らかであったため、検査面でのプラン確認にとどめた。調査区の北辺に平行して東西に延び、北東部で北に折れ曲がって調査区外へ続く。この石積み背後の掘り方に鉄管（水道管か）が埋設されており、鉄管理設と同時に造られた現代の遺構であろう。

(4) C 区 (第56図)

地表下約0.2m、標高13.08mで土壘盛土層を検出した。調査区中央に東西方向の土壘落ち込みの傾斜変換ラインがあり、ここから南に向かって下がる。土層確認のため、東壁際に土壘検査面から深さ約0.7mまで断割りを入れた。斜面の角度は場所により緩急があるが、およそ30～40°である。土壘盛土（9・10層）はA区に比べると単位が大きく、厚さ0.3m程度の土層を水平に積む。6層は土壘の流土とみられる。2～5層は戦後に模造石垣を積んだ際の裏込め土である。

調査区北部で玉石積み遺構S X 1を検出した。

S X 1 B区から続く玉石積み遺構である。検査面から約1m下まで石積みを検出したが、さらに下層にも続く。本丸平坦面の標高10m前後まで続くと推測される。20～30cm大の玉石による矢羽積である。石積み背後の掘り方には鉄管が埋設されており、鉄管理設と同時期に造られたと考えられる。石積みの前面は現代の瓦や石材が多く埋まっており、戦後の構築であろう。戦後のある時期には本遺構が土壘の北辺を形成していたと考えられる。この後、前面に土を盛って見かけ上の土壘を拡張し、新たに現在の玉石積みを構築したと考えられる。

第4節 遺物（第57図）

土墨盛土や遺構出土の遺物は多くないため、表土・造成土から出土した近世遺物も一部図化した。表土・造成土出土遺物は、近現代のものが多いが、近世遺物については本来土墨盛土に伴っていた可能性がある。

（1）A 区

土墨盛土 1・2は土師器皿である。1は口縁部が直線的に延び、端部は丸くおさめる。2は口縁部が緩やかに外反する。

表土・造成土 3は土師器皿である。端部をごく小さく摘みあげる。4はロクロ成形による素焼きの越中瀬戸皿である。口縁部はナデによってわずかに外反する。5は越中瀬戸の匣鉢である。全体に鋲釉がかかる。内端部がやや突出し、上面は水平である。6～8は焼し瓦である。6は軒棟瓦の丸部で、丁子梅鉢文を表現する。裏の破断面には棟瓦部と接合させやすくするための刻みがある。7は軒棟瓦の平部でわずかに文様がみえる。8は棟瓦である。

（2）B 区

土墨盛土 9は古代の土師器壺である。10～15は土師器皿である。やや内湾して端部が尖り気味となるもの（10）、ナデによって内端部に面ができ、端部がわずかに摘み上がったようになるもの（11～13）、口縁部が外反するもの（14・15）にわけられる。

造成土 16は土師器皿である。口縁部が大きく外反し、15に似る。

S K 5 17は土師器皿である。端部をわずかに摘み上げる。

S K 6 18～20は土師器皿である。18・19は口縁部がやや外反し、端部を丸くおさめる。20は器壁が厚く、口縁端部の内外面を小さく撫で、先端が尖り気味となる。21はロクロ成形の越中瀬戸の素焼き皿である。22は磁器の皿である。内面と口縁部外面に灰白色の釉がかかる。内面は染付がある。23は伊万里の碗もしくは皿で、口縁部は團線が入る。24・25は焼し瓦である。24は棟瓦、25は軒棟瓦の平部である。25の外側はケズリ、内面はコビキ調整とする。丸部との接合部にあたる破断面には刻みを施す。

（3）C 区

土墨盛土 26は土師器皿である。口縁端部の内外面が小さく撫でられ、先端が尖る。

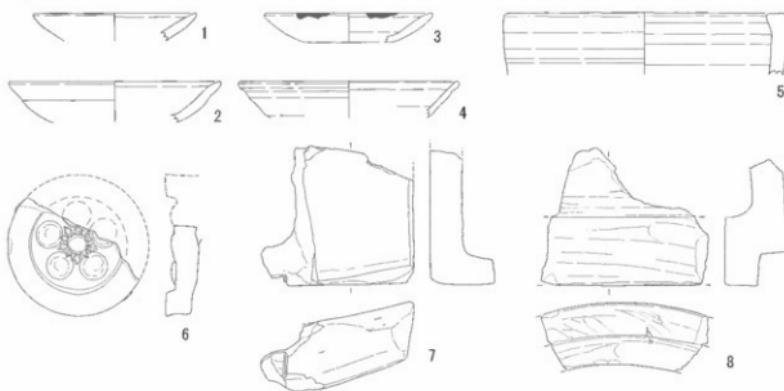
表土・造成土 27～30は土師器皿である。口縁部が外反し、端部が丸いもの（27）、口縁端部を小さく摘み上げるもの（28・29）、口縁部を強く撫で、体部との境に小さな段ができるもの（30）がある。31は越中瀬戸の皿である。底部は回転糸切りである。32は焼し瓦である。軒棟瓦の丸部で、丁子梅鉢文を表す。33は文久永宝で、書体は玉宝（略宝）である。

（4）小結

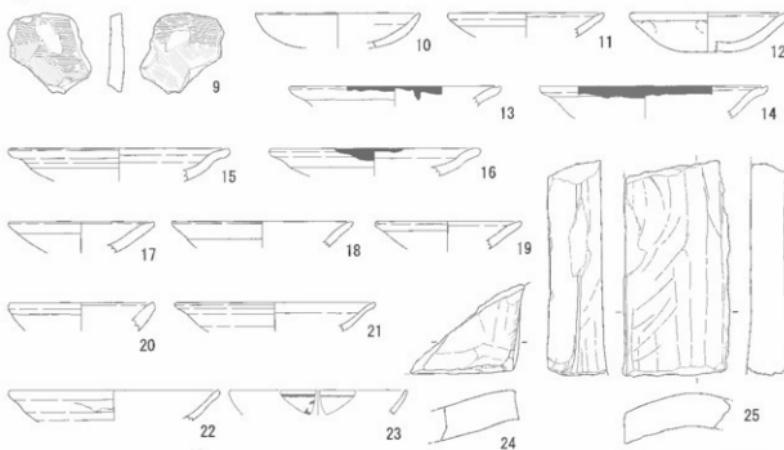
以上の遺物の時期について、主体となる土師器皿は富山城・城下町における他の調査区での類例などを参考にしつつ検討する。

土師器の多くは、過去の出土例と比較すると、富山城本丸の戦国期の堀跡出土例（富山市教委2004）や三ノ丸の2008年度調査区出土例（富山市教委・富山市路面電車推進室2009）に類似し、16

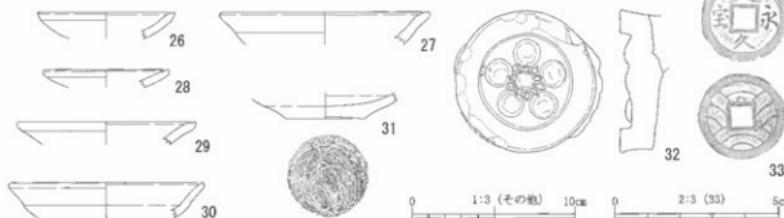
A区



B区



C区



第57図 2010年度調査出土遺物

第18表 2010年度調査遺物観察表

番号	種別	器種	出土位置	寸法(cm)			繪	胎土	焼成	色調		調査	備考	
				口径	高さ	底径				胎	土	外	内	
1	土師器	皿	A 区土塁	(9.9)	(1.7)	-	-	やや赤	良	-	7.5VR7/4 にぶ~暗	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	
2	土師器	皿	A 区土塁	(12.8)	(2.5)	-	-	やや赤、中粒砂(0.5~ 0.5mm)を少量含む	良	-	7.5YR7/3 にぶ~暗	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	内面摩耗
3	土師器	皿	A 区土塁	(10.2)	1.8	(5.6)	-	やや赤	良	-	10YR7/4 にぶ~黄	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	
4	越中瓶口	皿	A 区土塁	(13.5)	(2.25)	-	-	青	良	-	7.5YR7/4 にぶ~暗	ロクロナデ	ロクロナデ	素焼き
5	越中瓶口	皿	A 区土塁	(17.0)	(3.8)	-	繪輪	やや赤、粗粒砂(1.0~ 0.5mm)を少量含む	良	2.5YR3/3 暗赤褐色	7.5YR7/4 にぶ~暗	ロクロナデ	ロクロナデ	
6	焼し瓦	軒先瓦	A 区土塁	8.7	5.8	2.0	-	やや赤、粗粒砂(1.0~ 0.5mm)を少量含む	良	-	N6/ 灰	ナデ	ナデ、キズ	丁子梅鉢文。桜瓦 紋との接合部に刻 み目を施す
7	焼し瓦	軒先瓦	A 区造土	(8.4)	(10.3)	3.75	-	やや赤	良	-	N5/ 灰	ナデ	ナデ、キズ	
8	焼し瓦	横瓦	A 区土塁	(8.6)	(9.4)	3.9	-	やや赤	良	-	N6/ 灰	ナデ	キズ、ナデ	
9	土師器	甕	B 区土塁	-	(4.85)	-	-	やや赤、施釉砂(1.5 ~1.0mm)を少量含む	良	-	7.5YR7/3 にぶ~暗	ハケヌ	ハケヌ	外側摩耗
10	土師器	甕	B 区土塁	(10.0)	(2.1)	-	-	やや赤	良	-	10YR7/1 灰白	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	
11	土師器	甕	B 区土塁	(9.5)	(1.5)	-	-	やや赤、粗粒砂(1.0~ 0.5mm)を少量含む	良	-	10YR7/3 灰白	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	
12	土師器	甕	B 区土塁	(9.5)	2.4	(4.0)	-	やや赤、中粒砂(0.5~ 0.3mm)を少量含む	良	-	7.5YR7/4 にぶ~暗	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	外生側の横顔頬 板
13	土師器	皿	B 区土塁	(12.0)	(1.2)	-	-	やや赤	良	-	10YR7/3 にぶ~黄	ロ織部ヨコナデ	ロ織部ヨコナデ	油煙付着
14	土師器	皿	B 区土塁	(14.8)	(2.0)	-	-	やや赤	良	-	7.5YR7/4 にぶ~暗	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	差壓付着
15	土師器	皿	B 区土塁	(13.4)	(2.0)	-	-	やや赤、中粒砂(0.5~ 0.3mm)を少量含む	-	-	10YR7/1 灰白	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	
16	土師器	皿	B 区造土	(13.0)	(1.7)	-	-	やや赤、中粒砂(0.5~ 0.3mm)を少量含む	良	-	10YR7/4 にぶ~黄	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	油煙付着
17	土師器	皿	B 区 SK5	(8.0)	(1.9)	-	-	やや赤、中粒砂(0.5~ 0.3mm)をやや多量含む 粗粒砂(1.0~0.5mm) を少量含む	良	-	10YR8/3 淡黄褐	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	
18	土師器	皿	B 区 SK6	(11.0)	(1.6)	-	-	やや赤	良	-	10YR7/3 にぶ~黄	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	
19	土師器	皿	B 区 SK6	(9.0)	(1.7)	-	-	やや赤、赤色斑を少量 含む、中粒砂(0.5~0.3 mm)をやや多量含む	良	-	7.5YR7/4 にぶ~暗	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	
20	土師器	皿	B 区 SK6	(8.0)	(1.7)	-	-	やや赤、中粒砂(0.5~ 0.3mm)をやや多量含む	良	-	2.5YR7/6 相	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	
21	越中瓶口	皿	B 区 SK6	(12.0)	(1.0)	-	-	やや赤、粗粒砂(0.5~ 0.2mm)を微量含む	良	-	7.5YR7/3 淡黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	素焼き
22	盖	皿	B 区 SK6	(12.0)	(1.95)	-	透明釉	青	良	10YR7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	外側の透け 模様	
23	伊万里	皿 or 盆	B 区 SK6	(10.0)	(1.6)	-	透明釉	青	良	7.5YR7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	外側の透け 模様	
24	焼し瓦	軒先瓦	B 区 SK6	(5.5)	(7.0)	2.0	-	やや赤	-	5Y7/1 灰白	ナデ	ナデ	下端部に砂粒付着	
25	焼し瓦	軒先瓦	B 区 SK6	(13.0)	(6.6)	2.1	-	やや赤、中粒砂(0.5~0.3 mm)を多量含む、粗粒砂 (1.0~0.2mm)を微量含む	良	-	N4/ 灰	ケズ	コピキ傷	丸脚との接合部に あたる断面に刻 み目あり
26	土師器	皿	C 区土塁	(8.4)	(1.6)	-	-	やや赤、赤色斑を微量 含む、中粒砂(0.5~0.3 mm)を少量化	良	-	7.5YR7/3 にぶ~暗	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	
27	土師器	皿	C 区造土	(12.0)	(2.0)	-	-	やや赤、赤色斑を少量化 含む、中粒砂(0.5~0.3 mm)を微量含む	良	-	7.5YR7/3 にぶ~暗	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	
28	土師器	皿	C 区土塁	(7.7)	(1.1)	-	-	やや赤、赤色斑を微量 含む	良	-	7.5YR7/3 にぶ~暗	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	
29	土師器	皿	C 区土塁	(10.0)	(1.4)	-	-	やや赤	良	-	10YR8/4 淡黄褐	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	
30	土師器	皿	C 区造土	(11.7)	(2.2)	-	-	やや赤、赤色斑を少量化 含む、中粒砂(0.5~0.3 mm)をやや多量含む	良	-	10YR7/3 にぶ~黄	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	ロ織部ヨコナデ 体部ナデ	
31	越中瓶口	皿	C 区土塁	-	(1.6)	4.9	-	やや赤、粗粒砂(1.0~ 0.5mm)を微量含む	良	-	8YR6/1 にぶ~暗	ロクロナデ	ロクロナデ	直前の瓶身に斜 切り
32	焼し瓦	軒先瓦	C 区造土	8.7	5.8	2.1	-	やや赤、粗粒砂(1.0~ 0.5mm)を少量化含む	良	-	N6/ 灰	ナデ	ナデ	丁子梅鉢文。桜瓦 紋との接合部に刻 み目を施す
33	綱鉢	文久 承宝	C 区土塁	2.65	-	-	-	-	-	-	-	-	-	裏書きは文宝(承 宝)。背又あり。重量 3.8kg

世紀後半から 17 世紀初頭に比定できる。また、越中瀬戸の素焼皿 4・21 は、城下町の 2004 年度調査区出土例に類似する。これらは 1640 ~ 50 年代とみられており（富山市教委 2005）、ほぼ同時期ととらえておきたい。23 の伊万里もこの頃の可能性が高い。焼し棟瓦はいずれも江戸時代後期以降とみられる（古川 2009）。33 の文久永宝は文久 3 年（1863）の幕末期の鋳造である。

以上から、本調査区の出土遺物は、① 16 世紀後半～17 世紀初頭、② 17 世紀中頃、③ 江戸後期～幕末期の大きく 3 時期が混在していると考えられる。この点については次節で検討する。

第 5 節 小 結

本調査区は本丸南辺の土壘上面に設定した。土壘上面における調査は今回が初めてである。これまでどの程度土壘が残存しているか詳しいことは不明だったが、現地表面の下約 0.2 m で土壘盛土を検出し、基本構造が残っていることがわかった点は大きな成果である。土層断面から斜面の傾斜が約 40° であることも明らかになった。ただし、南斜面・北斜面ともに後後に石積みにされたことによる改変を受け、江戸期よりも大幅に痩せ細った状態になっている。

以下、調査結果をもとに本丸南辺土壘の変遷を確認する。

築 造 本丸南辺に土壘が築かれたのは、慶長 10 年（1605）の前田利長による整備のときである。ただし、寛文元年（1661）の富山藩による改修の際、内郭（本丸・西ノ丸・二ノ丸）を慶長期とはずらして整備したとの指摘がある（古川 2006）。これによるなら土壘の位置も変更されたこととなり、現在の土壘の位置・構造は寛文期のものが基本になっていることになる。

今回の調査では、時期を特定できる出土遺物が少ないこともあり、慶長期、寛文期いずれの時期に築造されたのか判断し難い。出土遺物に 16 世紀後半～17 世紀初頭とみられる土師器を含むのは、中世段階の遺構が存在した場所の土砂を用いて盛土したためであろう。17 世紀中葉とみられる遺物は土壘盛土中からの出土ではないため、直接的には時期を示すことにならないが、寛文期に築造あるいは修築が行われた可能性も否定できない。ただし、土壘盛土中に 18 世紀以降の遺物を含まないことから、少なくとも 17 世紀までの土壘の構造が基本となっていることは推測できる。

江戸後期～幕末期 土壘盛土中
ではないが、表土や造成土から当該期の焼し瓦や銭貨が出土しており、土壘上で何らかの人為活動があった可能性が高い。安政 2 年（1855）の「越中国富山城絵図面」には、本丸南辺・東辺の土壘上にクランクする線とともに「土居之上
堀折廻し」の記述があり、堀がめぐつ



第 58 図 本丸南辺・東辺土壘に描かれた堀
「越中国富山城絵図面」部分（富山県立図書館蔵）

時期	平面図	断面図	特徴
江戸時代			<ul style="list-style-type: none"> 慶長期あるいは寛文期に基盤がある。 本構造が造られる。 安政2(1855)年「越中国富山城輪郭面」に土壁上を走る堀が表現。
明治5年前戦前			堀が撤去される。
昭和二九年頃			<ul style="list-style-type: none"> 土壁南斜面が礎浪石垣に、北斜面が玉石積みに改変。 土壁上部が削平か。 南北も削られて幅が狭くなる。
昭和三六年頃			<ul style="list-style-type: none"> 土壁北斜面の玉石積みが北側に新たに造り直され、奥かけ上の土壁幅が広がる。

第59図 本丸南辺の土壁変遷模式図

ていたことがわかる（第 58 図）。堀の構造は不明だが、出土した焼し棟瓦はこの堀に葺かれていた可能性もある。今回の調査でこの堀の痕跡が見つかることも予想されたが、確認できなかった。これは土塁上部が戦後に削平されたことによるとみられる。削平の程度は、本丸東辺での搦手石垣と土塁の調査成果が参考になる。この成果によると、搦手石垣と土塁の比高差は 1.5 m 前後であったと推定される。本調査区を設定した本丸南辺土塁は、西の鉄門東石垣と比較すると約 2 m 低い。場所が異なるため単純比較はできないかもしれないが、鉄門石垣と搦手石垣で土塁との比高差がほぼ同じであったとするなら、0.5 m 前後の削平があった可能性がある。

B 区で検出した SK 5・6 は規模の類似や隣接することから同時期の遺構とみられる。SK 6 から棟瓦が出土しており、江戸時代後期以降であろう。前述したとおり土塁上面が 0.5 m 程度削平されていると推定した場合、本来の深さが 1 m を超える大型土坑となるが、用途は不明である。

明治期～戦前 明治期の土塁の古写真（第

60 図）に、堀が存在している様子はみられないことから、廃城令以降に撤去されたと考えられる。土塁自体は戦前の頃まではおおよそ旧状を保っていたと推定される。

昭和 29 年頃 この年、戦災復興事業の完了を機に城址公園一帯で富山産業大博覧会が開催された。このときに土塁の南斜面（堀側）は現在みられる模造石垣に改変された（第 61 図）。堀面に近い土塁の裾は工事でカットされたと考えられる。また、北斜面（本丸側）は、土塁を大きく抉って B・C 区で検出した玉石積み遺構 S X 1 が構築される。博覧会当時の様子を写した空中写真（富山市郷土博物館 2000）をみると、土塁のすぐ北側に建物が存在する。この建物建設にあたって敷地を広くするために土塁の北側を削り、玉石で保護したと考えられる。また、以上の一連の工事の際に、上述したように土塁の上部も水平に削られた可能性がある。

昭和 30 年代以降 博覧会終了後、北側へ拡張するかたちで新たな玉石積みが構築され、見かけ上、幅は広くなかった。これが現在みられる玉石積みであろう。昭和 36 年に土塁北側に野外ステージが設置されていることから、この工事にあわせて改変されたものかもしれない。

（野垣）



第 60 図 明治期の土塁（八尾編 1978）



第 61 図 現在の土塁

第7章 2011年度調査（本丸東辺土塁）

第1節 調査の方法

概要 本調査区の北西隣接地において2007年度に石垣新設に伴う発掘調査（第4章）を行った。本調査はその南東側に新たに石垣を付設することに伴い実施したものである（調査位置は第1図）。また、ここから北側に管を埋設する計画があり、これも調査対象とした。調査は工事での掘削深度プラス20cmの深さまでを対象とした。調査ではこれより深く掘削することに危険が伴うと判断されたため、それより下層はボーリング調査によって土層の状況を確認した。調査面積は25m²である。調査は公園緑地課から株式会社上智富山支店に委託し、埋蔵文化財センターが監理にあたった。

調査区は本丸東辺土塁の東斜面部にある。調査当時、地上に土塁の高まりは存在しなかったが、地下には土塁盛土が残存していることが確かめられた。

掘削作業 2011年6月21日から準備作業を行い、28日から掘削作業を開始した。表土は事前に埋蔵文化財センター職員立会のもと工事業者側において除去していたため、調査は人力掘削から開始した。調査区北辺に断割りを設け、土塁盛土の状況を確認しながら、上層からジョレン・スコップにより掘り下げを行った。土塁の基底部で土塁構築前の遺構面が確認されることも想定されたが、今回検出したのはすべて江戸時代の土塁盛土であった。掘削作業は7月15日に完了した。

記録作業 7月15日に全景写真撮影とボーリング調査、16～18日に図面作成、土壤のサンプリング等を行った。平面図・断面図・立面図は、トータルステーションを用いながら縮尺20分の1で作成した。測量の基準となる公共座標は旧系の日本測地系によった。遺物はすべて座標での取り上げとした。写真撮影は主に6×7判を用い、35mm判を補助的に使用した。

埋戻し 埋戻しは、管の埋設と合わせて工事業者側において行う計画であったため、完掘状態での現地引渡しとした。

整理作業 現地調査終了後から、報告書作成に向けた整理作業を富山市埋蔵文化財センターにおいて行った。洗浄・注記後、主要な遺物を抽出した。出土遺物は多くないため、細片もできるだけ図化するよう努めた。抽出した遺物の実測・トレースの一部は、2014年度に株式会社イビゾク北陸支店に委託した。



調査前の状況



調査風景

第2節 遺構

本丸東辺土壘の東斜面部を検出した。調査当時、地上に土壘の高まりは現存せず、表土下で土壘盛土を確認した。前ページの調査前状況の写真に土の高まりがみえるが、これは地下駐車場入口脇の現代造成土で、土壘の名残ではない。調査で確認した土壘盛土層の検出レベルは標高約8.6mである。調査区南西部の標高約7.1m地点では、地山である灰白色シルトおよび青灰色砂礫を確認した。管敷設に伴う調査区は、深さ0.25～0.6m、標高8.35～8.4mまで掘削し、土壘盛土を確認した。

土壘の盛土状況は土層観察により確認した。当初、約35°の角度で斜めに堆積する1～10層が場の埋土、11層以降が土壘盛土と考えたが、西隣で行った2007年度調査で判明した西斜面部における土壘盛土厚や第4章第31図の土壘模式図を参考にすると、1～10層も土壘盛土がなされた部分である可能性が高くなる。以下ではこの理解のもと記述を行う。

土壘盛土層は、土質や盛土方法から次のI～IV群に大別できる。

土壘盛土I群（1～10層） 黄褐色系の土層を主体とし、砂礫が混入する。土質はII群盛土と似る。約35°の角度で斜めに堆積している。元々の盛土状態ではなく、盛土がやや崩れて流れた状況を反映している可能性がある。

土壘盛土II群（11～32、58層） 黄褐色、褐灰色系の礫を含む層を基本とする。東下がりに緩やかに傾斜しながら帶状に積まれている。II群は細かくみるとさらに2つに細分できる。

II-1群（11～25、58層）：各層間に礫を多く含む層で形成している。北壁の11層上面には平坦面が認められる。I群盛土との境であり、盛土作業に伴う人為的に造られた平坦面の可能性がある。

II-2群（26～32層）：小礫が混じるものが多い。土質はII-1群と似るが、特に西壁においてやや異なる盛土単位として認められる。

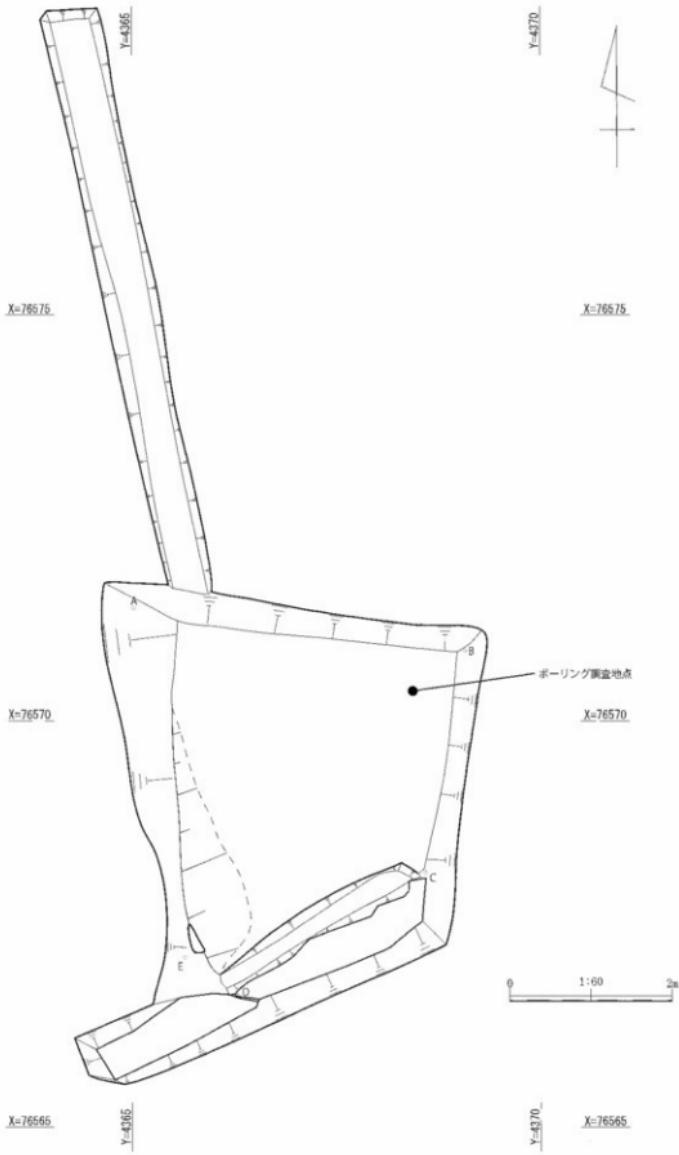
土壘盛土III群（33～50、57層） 褐灰色土、灰白色土を主体とする。全体的に鉄分が多く沈着している。II群に比べると砂質気味で、しまりが強いことが特徴である。また、盛土単位もやや薄く、より丁寧な土盛りがなされている。

土壘盛土IV群（51～56、59～62層） 灰色系で、粘性の強い土層が目立つ。炭化物や地山であるシルト質のブロックが多く混じる点も特徴である。また、II・III群に比べて水平に近い角度で盛土される傾向がある。

なお、51層に含まれる炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ（本章第4節（1））、（σ）はcalAD1,478～calAD1,624の暦年較正結果が得られた。この年代は、出土遺物から想定される土壘の築造あるいは補修時期よりやや古い。炭化物は土壤のなかに元々含まれていたもの可能性が高く、城内にあった土を用いて盛土を行ったものと推測できる。

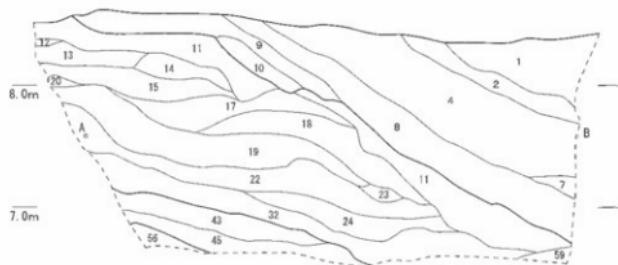
基底部 調査区南西部の南壁際において灰白色シルトの地山を確認した。地山は東下がりに傾斜し、途中で青灰色粗砂に変化する。青灰色粗砂の上に灰白色シルトが堆積しているとみられる。ボーリング調査（本章第4節（2））によると、青灰色粗砂は2m以上の堆積が確認され、神通川の沖積作用によって形成されたものと考えられる。

以上、土壘盛土はI～IV群に大別できる。盛土群の違いは、同一築造時期における盛土方法の違いか、異なる時期の補修を示すものかが問題となる。I群については、出土遺物や盛土方法の違いから補修と認められる。II～IV群は、土質等の違いを積極的に評価すれば異なる時期の補修となるが、盛土方法にI群ほど大きな違いはなく、同時期の盛土工程の違いという可能性も残る。構造の検討や隣接する2007年度調査区との対比については第5節で検討する。

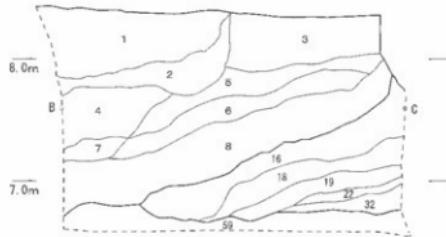


第 62 図 2011年度調査区全体図

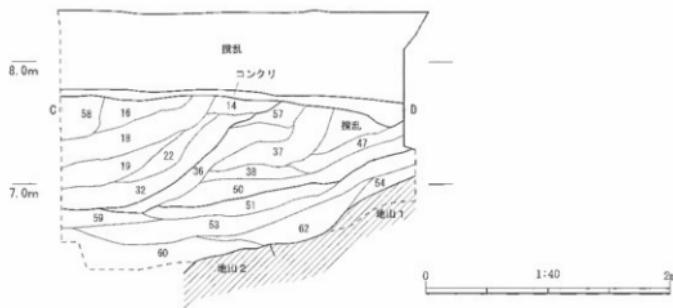
北壁



東壁



南壁



第63図 2011年度調査区断面図（北壁・東壁・南壁）

西風集



第64図 2011年度調査区断面図（西壁）

第3節 遺物 (第65図)

土壙盛土中から出土した遺物は、座標による取り上げを行った。遺物と出土盛土層の対応関係は次のとおりであるが、一部帰属を明確にしにくいものがある。土壙盛土II群からの出土が多く、その他は少ない。

土壙盛土I群 (1～10層) : 17・20・26

土壙盛土II群 (11～32層) : 1～5、8～10、13、16、18、19、21～23、28

土壙盛土III群 (33～50層) : 11

土壙盛土IV群 (51～62層) : 15、25

土器・陶磁器 1～8は非クロクロ整形の土師器皿である。口縁端部が尖り気味となるもの(1)、口縁部がやや内湾して平底となるもの(2)、口縁端部をわずかに摘み上げるもの(3～6)、口縁部が外反するもの(7)、口縁部が屈曲するもの(8)がある。

9は珠洲の擂鉢である。外傾口縁の内端をやや突出させる。鉗目は一単位11目で細密である。内面に紋章文が刻印される。吉岡編年団期、13世紀中葉に比定される(吉岡1994)。

10～14は越中瀬戸である。10はロクロ成形の素焼皿で、底部に回転糸切り痕が残る。11は皿で、体部で屈曲し、口縁部が外反する。口縁部は灰釉がかかる。17世紀前葉から中頃であろう。12は丸碗である。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。鉄釉を施す。13・14は鈴釉の擂鉢である。13は口縁が外側に折り返され縁帯を形成する。南砺市梅原胡摩堂遺跡に類例があり、17世紀後半以降の登窯期とされている(富山県文化振興財団1996)。

15は瀬戸美濃の丸碗である。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、底部付近は無釉である。内面の見込みに飴釉がかかる。16は瀬戸美濃とみられる大皿である。見込みに花文と幾何学文を施す。重ね焼き痕が2ヶ所認められる。

17・18は越前の甕である。17は口縁部が大きく肥厚し、逆台形状を呈する。上面は平坦で、外端部が丸く突出する。田中照久氏の編年によるII-1～2段階に相当し、17世紀末葉～18世紀前半頃とみられる(田中2006)。18は底部である。

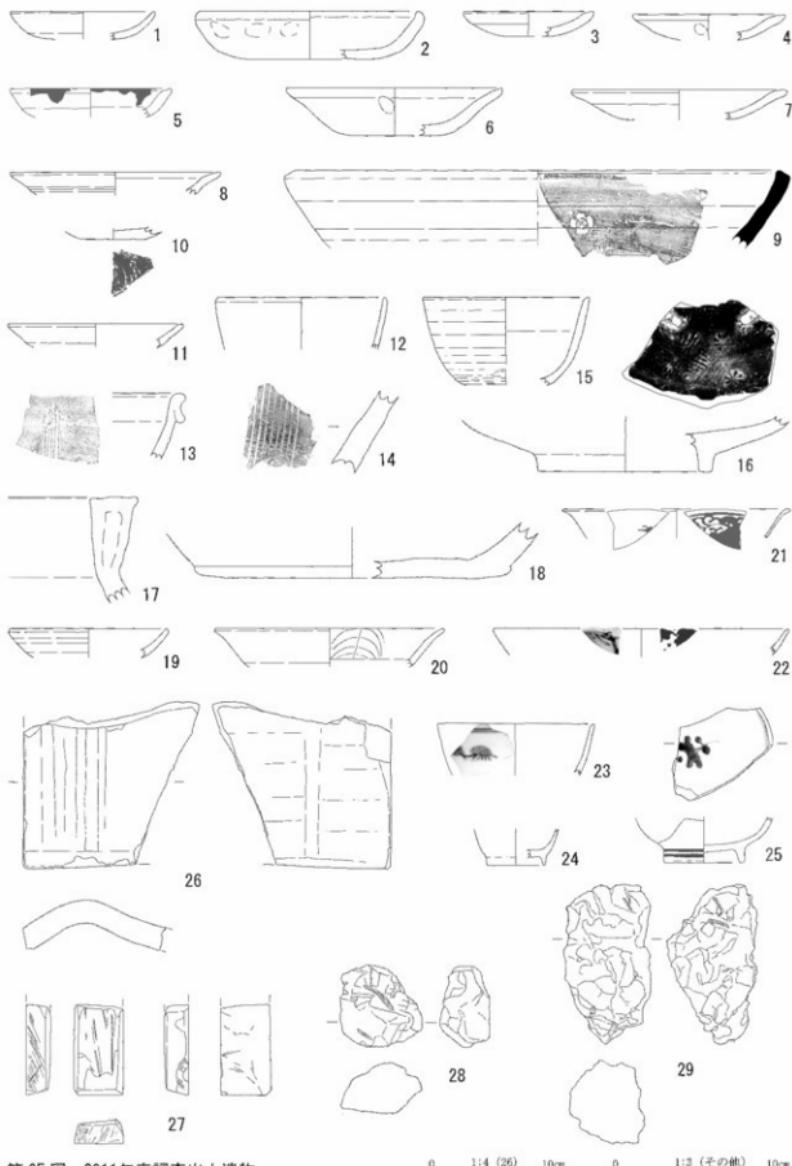
19・20は白磁の皿である。19は釉薬がやや黄色味を帯びる。森田勉氏の分類D群、15世紀後半～16世紀に比定できる(森田1982)。20は口縁部が外反し、内部に蓮弁文とみられる文様がある。森田分類E群、16世紀代に比定できる。

21～25は伊万里である。21は端反皿で、内面文様は牡丹唐草文とみられる。22は輪花皿である。外面文様は筆文もしくは竹文か。内面は花文である。23は碗である。外面に二重の圓線と牡丹の一部とみられる文様がある。18世紀以降と考えられる。24は小碗、25は碗である。高台外面に二重圓線、見込みに花卉文を入れる。九州陶磁編年のIII期(九州近世陶磁学会2000)、17世紀後半と考えられる。

瓦 26は焼し棲瓦である。表面はタテ方向のケズリ調整、内面はヨコ方向のナデ調整である。

石製品 27は砂岩製の砥石である。断面台形状を呈し、上面・左側面・小口面に擦痕がみえる。上面には深めの線状痕がある。

その他 28・29はスサの入った粘土塊である。29は鉛滓が溶着していることから、生産遺物の可能性が高いが、具体的な用途は不明である。



第65図 2011年度調査出土遺物

0 1:4 (26) 10cm 0 1:2 (その他) 10cm

第19表 2011年度調査遺物観察表

番号	種別	器種	出土位置	寸法(cm)			釉	粘土	焼成	色 調			調 整		備考
				口径	高さ	底径 (長さ) (幅) (厚さ)				輪	胎土	外 面	内 面		
1	土師器	盆	土類盛土Ⅱ群 (8.8)	11.7	-	-	やや密	良	-	2.5YR1/1 灰白	-	-	-	-	表面無施塗しい
2	土師器	皿	上類盛土Ⅱ群 (13.3)	3.0	-	-	やや密	良	-	2.5Y7/4 灰黄	口縁部)ヨコナダ 体側)ナダ	ヨコナダ	-	-	-
3	土師器	皿	上類盛土Ⅱ群 (7.8)	1.6	-	-	密	良	-	7.5YR8/6 淡黄橙	口縁部)ヨコナダ 体部)ナダ	口縁部)ヨコナダ 体部)ナダ	-	-	-
4	土師器	皿	土類盛土Ⅱ群 (9.4)	1.55	-	-	やや密	良	-	5YR7/6 褐	口縁部)ヨコナダ 体部)ナダ、ビニ オサエ	ヨコナダ	-	-	-
5	土師器	皿	土類盛土Ⅱ群 (9.8)	11.7	-	-	やや密	良	-	7.5YR6/4 にぶい 橙	口縁部)ヨコナダ 体部)ナダ	ヨコナダ	油煙付着。泥混毎 に微含む。	-	-
6	土師器	皿	土類盛土 (13.1)	2.9	-	-	密	良	-	10YR7/4 にぶい 深褐	口縁部)ヨコナダ 体側)ナダ、ビニ オサエ	口縁部)ヨコナダ 体側)ナダ	口縁部へ体側)ヨ ビニオサエ	-	-
7	土師器	皿	土類盛土 (13.0)	11.8	-	-	やや密	良	-	10YR8/5 淡黄橙	口縁部)ヨコナダ 体側)ナダ	ヨコナダ	見込み)ナダ	-	-
8	土師器	皿	上類盛土Ⅱ群 (12.8)	11.4	-	-	密	良	-	7.5YR7/4 にぶい 緑	ヨコナダ	ヨコナダ	-	-	-
9	珠撰	環飾	土類盛土Ⅱ群 (29.6)	4.8	-	-	密	良	-	2.5Y7/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	内面に欽文。節 目11日	-	-
10	越中鶴 ^フ	皿	土類盛土Ⅱ群 (8.7)	0.75	4.0	-	やや密	良	-	7.5YR7/4 にぶい 緑	ロクロナダ	ロクロナダ	底部切欠き。刷 書き	-	-
11	越中鶴 ^フ	皿	土類盛土Ⅱ群 (10.6)	1.45	-	-	灰褐	密	良	8Y7/3 灰黄	ロクロナダ	ロクロナダ	-	-	-
12	越中戸戸丸	土類盛土 (10.0)	3.2	-	-	-	鉄輪	密	良	2.5YR7/2 暗赤褐	ロクロナダ	ロクロナダ	-	-	-
13	越中戸戸丸	土類盛土Ⅱ群 (4.0)	-	-	-	-	銷輪	やや密	良	7.5YR8/3 暗青	ロクロナダ	ロクロナダ	印目3日重合	-	-
14	越中戸戸丸	環飾	土類盛土 (4.0)	-	-	-	銷輪	やや密	中や 不良	2.5YR5/4 にぶい 橙	ロクロナダ	ロクロナダ	印目9日以上	-	-
15	戸戸丸	土類盛土IV群 (10.2)	5.4	-	-	-	銷輪	密	良	10YR7/1 湯沸	10YR7/1 灰白	ロクロナダ	見込みに新輪	-	-
16	戸戸丸 か	大皿	土類盛土Ⅱ群 (3.4)	10.6	-	-	鉄輪	密	良	7.5YR3/3 培壟	2.5Y7/2 灰黄	ロクロナダ	見込みに花文と鶴 曳文。蓋ね張き 板	-	-
17	越前	甕	土類盛土Ⅱ群 (6.4)	-	-	-	鉄輪	密	良	7.5YR3/2 黑褐	2.5Y8/1 灰黄	ロクロナダ	ロクロナダ、ナダ	-	-
18	越前	甕	土類盛土Ⅱ群 (3.4)	19.4	-	-	荀	良	-	10Y8/1 灰	体側)ロクロナダ 見込み)ナダ	-	-	-	-
19	白磁	皿	土類盛土Ⅱ群 (9.9)	0.8	-	-	透明釉	密	良	8Y8/2 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	-	-	-
20	白磁	皿	土類盛土Ⅱ群 (13.7)	2.4	-	-	透明釉	密	良	N8/ 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	-	-	-
21	伊万里	端反皿	土類盛土Ⅱ群 (14.0)	1.8	-	-	透明釉	密	良	2.5Y8/1 灰白	N8/ 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	内面)牡丹唐草文 か 外面)竹文 or 亂文	-
22	伊万里	輪花皿	土類盛土Ⅱ群 (17.6)	1.6	-	-	透明釉	密	良	N8/ 灰白	8Y8/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	外面)竹文 or 亂文 内面)唐草文	-
23	伊万里	皿	上類盛土Ⅱ群 (9.6)	3.2	-	-	透明釉	密	良	N8/ 灰白	8Y8/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	外面)唐草文、牡丹 文か	-
24	伊万里	小瓶	土類盛土 (2.25)	3.4	-	-	透明釉	密	良	N8/ 灰白	8Y8/1 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	-	-
25	伊万里	瓶	土類盛土IV群 (2.6)	5.0	-	-	透明釉	密	良	N8/ 灰白	N8/ 灰白	ロクロナダ	ロクロナダ	外面)高台に二重 圓極 内面)見込みに花 文	-
26	機し瓦	棲瓦	土墨盛土Ⅱ群 (13.5)	14.4	1.9	-	やや密	良	-	N8/ 灰白	ケズリ	ナダ	-	-	砂利。上面・左側 面・小口面に擦斑。 重約 41 g
27	石製品	磁石	土類盛土 (5.6)	3.0	1.6	-	-	-	-	10Y7/1 灰白	-	-	-	-	-
28	生糞開溝	粘土塊	土類盛土Ⅱ群 (5.0)	5.0	3.1	-	-	-	-	2.5Y27/8 褐	-	-	-	-	スサ含む。生糞開 溝跡物か
29	生糞開溝	粘土塊	土類盛土 (9.8)	5.2	5.5	-	-	-	-	2.5Y7/2 灰黄	-	-	-	-	糞糞付着。スサ含 む。生糞開溝物 か

第4節 自然科学分析

(1) 放射性炭素年代測定

1. はじめに

本項では、上記で報告された富山城跡の本丸東辺土塁について、築造・修築年代を検討するために放射性炭素年代測定を実施した。測定作業は、株式会社上智富山支店からパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。

2. 試 料

試料は、江戸時代に築造・修築がなされた土塁盛土層から土壤 4 点を採取した。土壤試料は、北壁 22 層・24 層と、西壁 40 層・51 層から採取したものである。

本分析では、このうち放射性炭素年代測定試料として最優先とされた西壁 51 層（褐色粘質土）を対象とした。測定試料の抽出は土壤の水洗選別を実施し、土壤 200cc (湿重 327.40g) より回収された炭化物(乾燥重量 0.07g)を測定に供した。試料は株式会社上智富山支店の調査担当者が採取した。

3. 分析方法

試料に目的物と異なる年代を持つものが付着・混入している場合、これらをピンセット・超音波洗浄等により物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によるアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅 (II) と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C (30 分) 850°C (2 時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOX-II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて δ 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma : 68%) に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C 濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴C の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正は、CALIB 6.0 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正結果は、σ + 2 σ (σ は統計的に真の値が 68%、2 σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲) の値を示す。表中の相対比は、σ、2 σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

4. 結果および考察

西壁 51 層から抽出した炭化物の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は 350 ± 20 yrBP である。また、この補正年代に基づく曆年較正結果 (σ) は calAD1,478 - calAD1,624 である（第 20 表・第 66 図）。

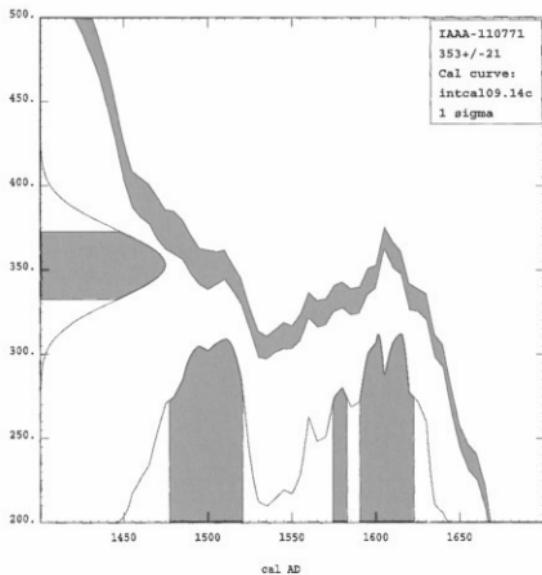
褐色粘質土（西壁 51 層）より抽出した炭化物は、上記の曆年較正結果を参考とすると、戦国時代から江戸時代前期に相当する試料と考えられる。

なお、試料の由来の検討として、西壁 51 層とこの他の測定試料の候補とされた 3 試料（北壁 22 層・24 層、西壁 40 層）を比較すると、後三者は細粒～極細粒砂、あるいは泥分が混じる細粒～極細粒砂であり、西壁 51 層と異なる由來の堆積物であることが指摘できる。また、西壁 51 層では、炭化物を抽出するために行った水洗選別の結果、炭化物とともに未炭化の種実遺体や昆虫遺体片等も抽出されている。そのため西壁 51 層は、このような有機物が保存される環境下にあった堆積物由来すると推定される。

（高橋 敦・千葉博俊（パリノ・サーヴェイ株式会社））

第 20 表 放射性炭素年代測定及び曆年較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (曆年較正用) (yrBP)	曆年較正年代 (cal)	相対比	測定機関 Code No.
2011年度調査 西壁51層(土墨盛土) (炭化物)	350 ± 20	-25.22 ± 0.58	353 ± 21	cal AD 1,478 - cal AD 1,521 σ cal AD 1,575 - cal AD 1,583 cal AD 1,590 - cal AD 1,624 2 σ cal AD 1,458 - cal AD 1,528 cal AD 1,553 - cal AD 1,633	0.521 0.084 0.395 0.472 0.528	IAAA-110771



第 66 図 曆年較正曲線図

(2) ポーリング確認調査

1. はじめに

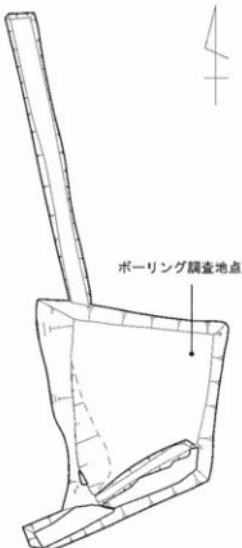
上記で報告した発掘調査は、標高およそ 6.6m までを対象に行った。これより深く掘削することに危険性が伴ったため、これより下層はポーリング調査によって土壤の試料採取を行い土壌の堆積状況の確認および地山確認を行うこととした。調査地点は第 67 図のとおりである。ポーリング調査は、株式会社上智富山支店から株式会社アーキジオに委託して実施した。

2. 地形地質の概要

調査地は、富山市北部の中心市街地に位置する富山城址公園である。富山平野のほぼ中央に位置し、標高約 8.6m の平坦地である。約 3 km 西には富山県を東西に分ける奥羽丘陵がある。また、神通川と常願寺川によって形成された扇状地の境界付近に位置している。

西約 1.1 km を神通川が北流し、調査地一帯は神通川の氾濫原である沖積平野である。

10 万分の 1 富山県地質図（富山県 1992）によれば、泥の分布地ではあるが、神通川が近く砂質土や礫を多く含む河成堆積物が分布している場所でもある。



第 67 図 ポーリング調査位置

標 尺 寸 高 度 (m)	標 層 厚 (m)	深 度 (m)	柱 状 圖 分 図	土 質 区 分 分 調 査	記 事	孔 内 水 位 (m) / 測 定 月 日
1		0.50	0.50	■ 暗混じり 沙	褐色	マトリックスは、シルト質砂。 礫量10%。φ1cmの亜円礫主体。 0.40 ▽
2		1.55	2.05	■ 暗混じり 沙	暗灰褐色	マトリックスは、シルト質砂。 礫量10%。φ1cmの亜円礫主体。 1m付近にφ10cmの亜円礫。 1.7mから中～粗砂主体。

第 68 図 採取土壤柱状図

3. ハンドオーガーポーリングの調査方法

ハンドオーガーポーリングは、未固結な表層地盤の概略調査に適用されるもので、試料の採取と土質構成の調査を目的としている。オーガーを地中に回転圧入させて土を切り削り、かつ切削土を切り出しながら地中に孔を開ける方法をいう。

ハンドオーガーポーリングの適用土質は、地表面下数m以内の軟らかい～中位の硬さの細粒土および粘着性を有する砂質土である。ただし、深さが2mを超えると作業効率が著しく低下する。砾や礫質土、大きな礫を含む土、硬い土、地下水水面下で飽和状態にある砂およびきわめて軟弱な土などには適用できない。

オーガーには先端がスクリュー型のスクリューオーガーなどがあるが、本調査では試料採取に適したポストホールオーガーを使用した。

4. 調査結果

発掘調査は表層から約2m掘り下げた標高約6.6mまで行った。この発掘調査の掘削底面である標高約6.6mをGLとし、ここからオーガによる掘削を始めた。ポーリング掘削地点より上層の表層部は、 ϕ 1cm程度の亜円礫を含む礫混じり砂が分布していた。GL-0.4m（標高約6.2m）掘削時点では水がしみ出し、調査地の水位と判断される。GL-0.5m（標高約6.1m）までは褐色を呈し、以深は暗灰色を呈する。

所々に ϕ 10cmのやや大きめの礫が含まれる。GL-1.7m（標高約4.9m）からはマトリックスの粒度が粗くなり、中～粗砂主体となる。掘削したGL-2.05m（標高約4.55m）までこの層が認められた。

発掘調査で確認された礫混じり砂層は、ポーリング掘削地点の上方に分布している土層と同じものと考えられる。

本ポーリング調査結果と発掘調査で確認した土層との関係は次節で検討する。

（岩木雅史（株式会社アーキジオ）、野垣好史（富山市埋蔵文化財センター））

引用・参考文献

富山県 1992『10万分の1富山県地質図』



第69図 ポーリング地点の調査前状況



第70図 ポーリング採取試料



第71図 ポーリング調査状況

第5節 小 結

(1) 土壌の構造

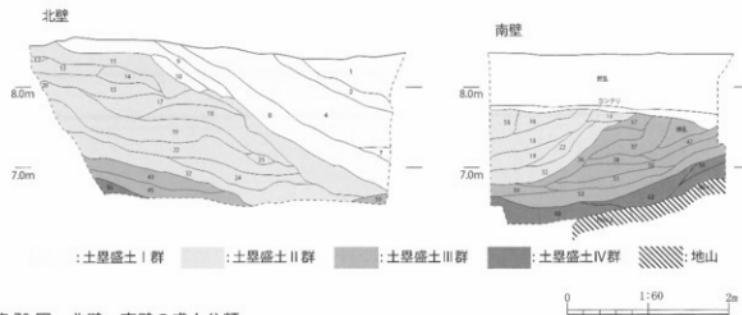
最初に本調査で確認した土壌の構造について整理する。

第3節で記したとおり、確認した土層はいずれも土壌盛土と考えられる。I群盛土については、当初堀の埋土と考えられたが、2007年度調査成果（第4章）での成果を参考にするとI群も土壌盛土が行われた場所である可能性が高くなる。ただし、I群は、盛土された状態をそのまま反映するのではなく、やや流れた状況を示す可能性もある。

土壌盛土の特徴は、I群：黄色系主体の土層、II群：黄褐色、褐灰色系の疊を含む土層群、III群：褐灰色土、灰白色土を主体とし、II群に比べ砂質気味でしまりが強い、IV群：灰色系で粘性の強い土層を主とし、炭化物やシルト質のブロックが多く混じる、となる。IV群は、土壌盛土ではなく、中世以前の土壌構築前の堆積層と解釈することもできるかもしれないが、北壁・南壁で土壌の傾斜に合わせて東下がりの堆積をみせることから土壌盛土とみるべきであろう。盛土中には中世段階の遺物や砥石・炉壁等の生産遺物が混入していることから、中世遺構が存在した場所の土砂を土壌盛土に用いたことが推定できる。

積み方をみると、I群盛土は35°前後の急傾斜で堆積し、II～IV群は10°程度のなだらかな傾斜で盛られる。III・IV群に比べてII群は盛土単位が大きく、I群はさらに単位が大きい。全体的に下層の盛土ほど単位が細かく、しまりも強いなど丁寧な土盛りを行っていることが見てとれる。また、III群とIV群は、盛土の色調・質に違いが認められる。自然科学分析の結果（本章第4節(1)参照）からも、IV群の土層である西壁51層とII・III群の土層である北壁22層・24層、西壁40層は、異なる由来の堆積物であることが指摘されている。

南壁で地山が東下がりに傾斜する状況が認められることから、一度地山を斜めに掘り込んだうえでその上に斜めにすりつけるように盛土を行っていることがわかる。この掘り込まれた地山ラインの延長が築造当初の土壌法面を示し、I～IV群盛土は、その後の改修で外側に積まれた可能性も考えたが、2007年度調査成果（第4章）によれば、反対側の西斜面部でみられる同様の地山の掘り込みと斜面部の盛土は同時期になされたものとされ、本調査区の東斜面部も地山の掘り込みを行ったうえで、その外側に盛土を行ったと理解したい。調査区北東部で行ったボーリング調査の結果（本章第4節(2)）からは、標高約4.9mで地山とみられる中～粗砂が確認でき、推定される地山の削り出しの傾斜は35



第72図 北壁・南壁の盛土分類

~40° 前後と推定できる。

I ~IV群盛土が同一築造時期における作業工程の画期を示すものか、異なる時期の補修・改修を示すものかは断定できないが、I群盛土は桟瓦を含むことから、江戸時代後期以降に補修がなされた部分とみられる。II群盛土も18世紀代の遺物を含み、後世の補修の可能性があり、複数回の補修がなされたことが考えられる。

(2) 2007年度調査区との比較から

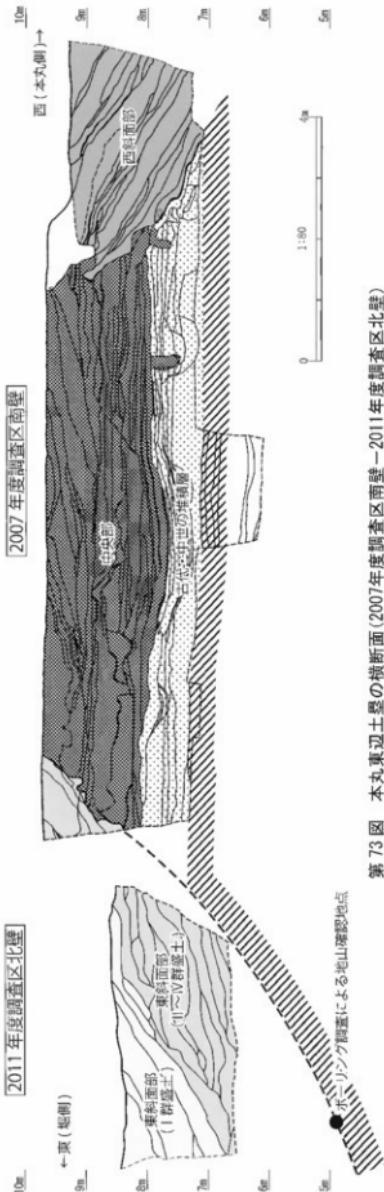
第73図は、2007年度調査区南壁と2011年度調査区北壁(反転)の断面図を合わせた土壌横断面である。両壁面は約1.6m南北にずれがあり、厳密に同一ライン上にはない。

第4章で報告したとおり、本丸東辺土壌は、薄く水平に盛土を行う中央部と斜めに盛土を行う斜面部に分かれる。2007と2011年度調査区では盛土に明らかな違いがあり、調査区間に土壌中央部と斜面部をわける土層ラインがあるとみられる。

2007年度調査区南壁の左上にみられる東斜面部と2011年度調査区は、盛土の傾斜具合に違いがあり、同じ斜面部でも異なる盛土工程による可能性が高い。2011年度調査区北壁でI群盛土とII群盛土の間(11層上面)に平坦面があるのは、この工程の区切りと関係するかもしれない。

西斜面部と東斜面部を比較すると、盛土の様相に違いがある。西斜面部は、中央部と同時期の築造当時の盛土と解釈されるが、異なる盛土状況をみせる東斜面部は、後世に補修された部分があると推測する。その時期は、出土遺物から17世紀後半以降であろう。そして、江戸時代後期以降に再びI群盛土による補修を行っている。本丸側にあたる西斜面と比べ、堀側の東斜面は崩落しやすかったことが影響していると考えられる。

(野垣)



第73図 本丸東辺土壌の横断面(2007年度調査区南壁-2011年度調査区北壁)

第8章 総 括

概 要 本書は、城址公園内の本丸における本発掘成果を収めた初めての調査報告である。城址公園では2002年度から試掘調査を行い、遺跡の遺存状況や検出遺構について報告を行ってきたが、調査面積が小規模であったため得られる情報は断片的であった。今回面的な調査によって本丸各地点の具体的な様相に迫ることができたのは大きな成果である。

本書の内容に関して、まず本丸東辺・南辺土塁で行った3ヶ所の調査から、実態が不明だった土塁の構造・変遷が判明したことが特記される（第4・6・7章）。本丸と二ノ丸を結ぶ大手筋の土橋についても、工事立会の限られた面積からではあるが、初めて考古学的に状況を確認することができた（第3章）。2008年度調査では、本丸北西部における中世富山城期から近代の土地利用の変遷が明らかになった（第5章）。また、富山城築城前の集落や武家居館の存在が明らかになったことも重要である（第4章）。

こうした成果の一方で、資料上の制約等から時期や性格の特定に課題を残した部分や新たに生じた問題もある。今後、関連する調査のなかで改めて検討する必要がある。

以下、各調査の成果と意義を記して総括としたい。

（古川・野垣）

2006年度工事立会 本丸と二ノ丸を繋ぐ大手筋の土橋では、南北断面を通した地表下0.6mまでの遺存状況を確認した。工事等による損壊を多く受けていたが、石垣通路面において最も良好に残つておらず、江戸時代に3面、明治以降に3面の計6面の硬化面を検出した。この硬化面は土橋通路面であり、6回以上にわたり通路面の上積改修が行われたことを示す。

2007年度調査 本丸東辺土塁の調査である。土塁上部は欠失し、下部高さ1.7mが残存していた。土塁の基底部や東西斜面の一部が残存していた。中央部は版築による水平堆積とし、中央基底部には乱杭が打たれた可能性がある。斜面部は斜度40°以下で積み上げている。これらにより全体構造の復元が可能となった。

土塁直下には平安から戦国時代の遺構面が3面確認された。平安時代は9世紀に大きなくぼ地があり、中世期には溝状のくぼ地に大量に炭化穀類や遺物が廃棄された。笄や漆器の存在及び井戸の検出は、至近に武家居館の存在を示唆する。14世紀代の土師器は京都系である。

平安から中世のくぼ地では、水環境を利用し水田耕作が行われていた可能性がある。

平安時代の地山土は、弥生後期以降、平安前期以前に発生した洪水の再堆積土で、中に縄文～弥生土器を巻き込んでいる。

（古川）

2008年度調査 本丸北西部で行った調査である。16世紀後半～17世紀の下層面と明治期の上層面の2層の遺構面を検出した。

16世紀後半は、薄い盛土を何層にも行う整地層を検出した。中世富山城期の通路面、建物等の基礎工事、土塁盛土の可能性などが考えられた。

16世紀末～17世紀前半は土坑から比較的多くの遺物を検出した。この時期のものとみられる焼塩壺は身・蓋あわせて10点が出土した。本報告にあわせて富山城・城下町での焼塩壺を集成したところ、約19点存在することが明らかになった。本丸での出土が突出して多いことがわかり、階層差による一定の分布の偏在性を指摘できる。

17世紀中頃～後半は、上記の整地層を削平するように広い範囲に掘り込みが行われる。規格的な掘り込みではなく、また、それ以前の古い時期の遺物を多く含むことから、何らかの目的のためにいつ

たん掘った後、同じ土砂により埋め戻すといった行為が考えられる。

上層面の明治期は、石組溝と廃棄土坑がある。石組溝 S D 1 は、明治 32 年の大火灾後から明治 33 年の県庁新築までの短期間に構築、廃絶した遺構と考えられ、本丸内の排水を北側の内堀に流す排水路とみられる。廃棄土坑 S K 1 から焼土とともに出土した瓦・釘・土壁は、明治 32 年に焼失した江戸時代の建築物に使われていたものと考えられる。不明な点が多いこの時期の建物の実態を示す遺物として重要である。

2010年度調査 富山城で唯一地上に高まりが残る本丸南辺土壘上に設定した調査区である。本丸南辺土壘の残存状況や構造はこれまでまったく不明であったが、斜面の角度が約 40° であることや盛土状況、江戸時代から戦後までの土壘の変遷が明らかになった。

出土遺物は、16 世紀末～17 世紀初頭、17 世紀中頃、江戸時代後期～幕末期の大きく 3 時期のものが混在している。それぞれの時期に土壘上で何らかの人為活動があったとみられるが、土壘上層の部分的な調査であったため、詳細な築造時期を特定するまでには至らなかった。ただし、17 世紀までの土壘構造が基本になっていることは推測できる。江戸時代後期から幕末期は、絵図に土壘上をめぐる堀が描かれ、柱穴等の検出が予期されたが確認できなかった。これは近・現代に土壘上部が削平されたためと考えられる。

明治期から戦後には、土壘の南北両斜面が石積みとされる、上部が削平されるなどの改変を受けた。これによって土壘は痩せ細った状態となつたが、内部はおおよその基本構造を残していることが判明した点は重要な成果である。

2011年度調査 本丸東辺土壘が存在した場所で、上記 2007 年度調査区の東隣に位置する。2007 年度調査成果とあわせて土壘の下部断面構造が明らかになった。本丸東辺土壘の盛土は、薄い土層を水平に盛った中央部と斜めに盛土を行う東西の斜面部に分かれる。本調査区は東斜面部にあたり、内堀に面する。

調査では断面観察によって土壘盛土の特徴が明らかになった。盛土層は、盛土方法や土質からみて、上層から I ～IV 群に大別できる。下層の盛土群ほどしまりが強く、細かい盛土を行う傾向が見てとれた。

最も上層の I 群盛土は、江戸時代後期以降の補修によるものと認められる。また、II ～IV 群についても 17 世紀後半以降の補修による可能性が高いと考えた。土質等の違いを積極的に評価すると、II ～IV 群盛土それぞれが異なる時期の補修を示すと考えられるが、同一補修時における盛土工程の違いを反映する可能性もある。東斜面部は内堀に面することから、崩落が生じやすく補修が繰り返されたと考えられる。

(野垣)

引用・参考文献

- 石川日出志 2006 「下老子笹川遺跡の天王山式土器がもつ意義」『下老子笹川遺跡発掘調査報告－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書V－』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 大橋康二 1994 『古伊万里の文様』理工学社
- 小川 望 2008 『焼塩壺と近世の考古学』同成社
- 鹿島昌也 2011 「調査概要報告 8 富山城西ノ丸跡から奈良時代の墨書き土器 富山城跡」『富山市の遺跡物語』No.12 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 岐阜市歴史博物館 2010 『越中と美濃を結ぶ考古展－城と都市－』城と都市展実行委員会
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 國香正稔 1995 「富山市内の微地形調査」『巡査研究』第3号 富山巡査研究会
- 久保尚文 1983 『越中中世史の研究 室町・戦国時代』桂書房
- 久保尚文 2014 「京都東岩藏寺と富山城一越中地域史研究の原点@一」『富山史壇』第174号 越中史壇会
- 鶴小谷城郷土館 2000 『焼塩壺の旅－ものの始まり堺－』
- 新越中風土記刊行会編 1978 『新越中風土記』創土社
- 高井 進監修 1993 『目で見る富山市の100年』郷土出版社
- 高瀬 保編 1987 『富山藩侍帳』越中資料集成1 桂書房
- 高梨清志 2006 「富山県の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
- 高橋 敦・千葉博俊 2015 「千石町地内埋没樹木群の自然科学分析」『富山市内遺跡発掘調査概要X V』富山市教育委員会
- 田中照久 2006 「近世の越前」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996 『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告』
- 富山市教育委員会 2004 『富山城跡試掘確認調査報告書』
- 富山市教育委員会 2005 『富山城跡発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 2006a 『富山城跡試掘確認調査報告書』
- 富山市教育委員会 2006b 『富山城跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2007 『富山城跡試掘確認調査報告書』
- 富山市教育委員会 2008 『富山城跡試掘確認調査報告書』
- 富山市教育委員会 2009 『富山城跡試掘確認調査報告書』
- 富山市教育委員会 2010 『富山城跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会・富山市路面電車推進室 2009 『富山城跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2012 『富山城跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会・西町南地区市街地再開発組合 2014 a 『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2014 b 『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2014 c 『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2015a 『富山城跡・富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会編 2015b 『富山市内遺跡発掘調査概要X V－太田本郷城跡・千石町地内埋没樹木群－』
- 富山市郷土博物館 2000 『特別展 富山の近代化～街はこうしてつくられた～』
- 富山市郷土博物館 2007 『富山城のものがたり』常設展示図録
- 富山市埋蔵文化財センター 2007 『富山市の遺跡物語』No.8
- 富山市埋蔵文化財センター 2008 『富山市の遺跡物語』No.9

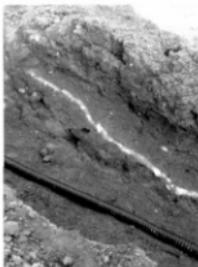
- 富山市埋蔵文化財センター 2010『富山市の遺跡物語』No.11
- 富山市埋蔵文化財センター 2011『富山市の遺跡物語』No.12
- 富山市埋蔵文化財センター 2013『富山市の遺跡物語』No.14
- 富山市埋蔵文化財センター 2014『富山市の遺跡物語』No.15
- 富山市埋蔵文化財センター 2015『富山市の遺跡物語』No.16
- 富山市埋蔵文化財センター 2016『富山市の遺跡物語』No.17
- 中井淳史 2006 「京都産土師器の編年と地方への展開」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』
北陸中世考古学研究会
- 藤澤良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第10輯 関瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 藤田邦雄 1996「北陸における肥前陶磁」『考古学ジャーナル』No.410 ニュー・サイエンス社
- 古川知明 2006「近世富山城の繩張りについて」『富山史壇』第149号 越中史壇会
- 古川知明 2009「富山城、『越中の近世城郭』富山考古学会
- 古川知明 2014「富山城の繩張と城下町の構造」桂書房
- 古川知明 2015「千石町地内埋没樹木群」『富山市内遺跡発掘調査概要XV』富山市教育委員会
- 北陸近世遺跡研究会・奥田 尚 1995「北陸の焼塙壺—金沢城下出土の鉢形焼塙壺を中心に—」『石川考古学研究会々誌』第38号
- 堀内大介・高橋 敦・千葉博俊 2016「西町地内埋没樹木について」『富山市の遺跡物語』第17号 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 増山 仁 2000「金沢城下出土の焼塙壺」『焼塙壺の旅—ものの始まり壠—』(脚)小谷城郷土館
- 水間直二 1979『明治の富山をさぐる—絶曲輪を中心として—』
- 宮田進一 1997「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸』桂書房
- 宮田進一 1997「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸』桂書房
- 森 隆 2000「富山県の中世土器(資料編2)」『富山考古学研究』第8号 (財)富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 八尾正治編 1978『ふるさとの想い出写真集 明治・大正・昭和 富山』国書刊行会
- 山田幸一 1981『ものと人間の文化史 45 壁』法政大学出版局
- 山本直人 2007『文理融合の考古学』高志書院
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 渡辺 誠 1985「焼塙」『講座・日本技術の社会史』第二巻 日本評論社



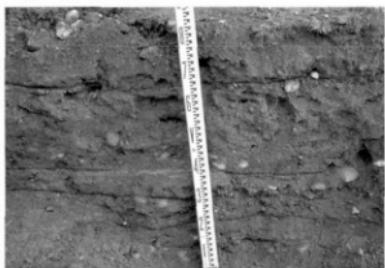
土橋工事区域（北から）



明治期土坑検出



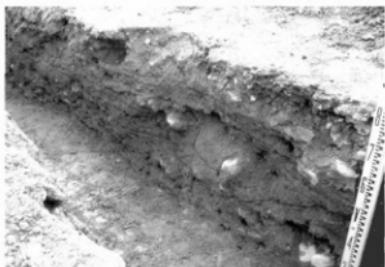
1地区 通路面(硬化面)検出状況



1地区 土層断面



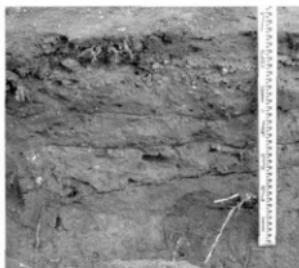
2地区 硬化面検出状況 (GL-0.62m)



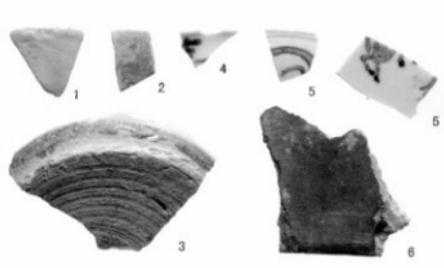
3地区 土層断面



3地区 溝状造構（南から）



3地区 土層断面



遺物



調査着手前



H=8.9mでの土壌痕跡平面(西から) 右上はSK01



近代板組遺構 SK01・02 (東から)



SK01 検出状況 (東から)



SK01 東西土層 (南から)



SK01 内部板組（南から）



SK01 杭 1



SK01 杭 2



SK01 杭 6



SK01 土層（東から）



SK01 碓充填状況



SK02 土層（東から）奥は SK01



SK02 南北土層（北東から）



SK02 杭 1 設置状況（北東から）



SK02 東端土層（南西から）



SK02 西壁・SK01 板敷（北東から）



SK02 南壁（板・杭）



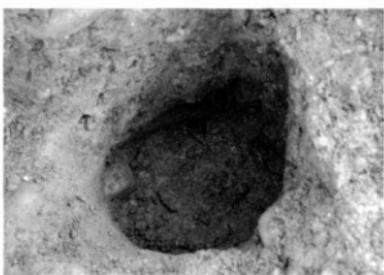
SK02 北壁（板・杭）



SK02 杭 1



SK02 杭 5



SK02 杭 1 抜取後状況



H=8.5 mでの土壌痕跡平面（北半）



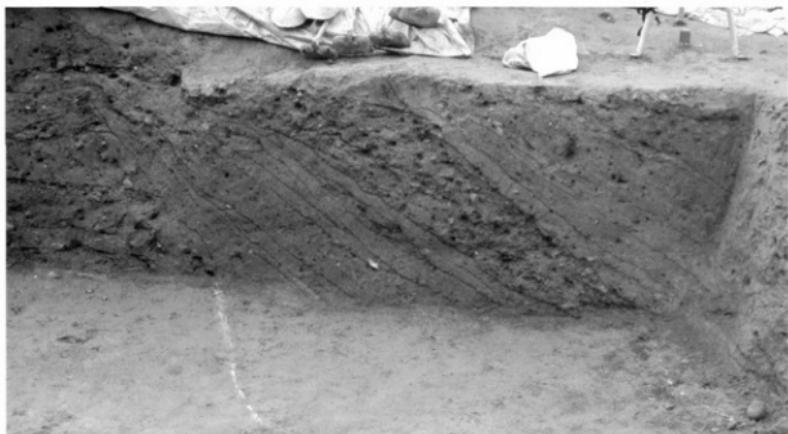
H=8.5 mでの土壌痕跡（南西部）



土壌基底面直下の遺構・南壁土壌断面（北東から）



南壁東端土壌斜面部土層（土壌基底面まで 北から）



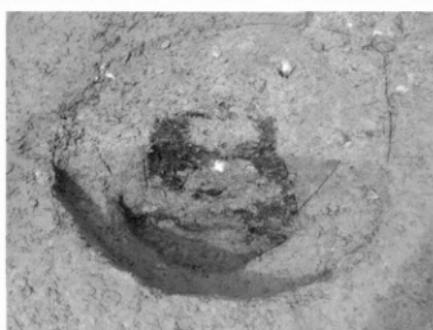
南壁西端土壘斜面部土層（土壘基底面まで 北から）



調査区北壁土壘断面（南西から） 手前は曲輪側斜面部



乱杭跡検出状況（南から）



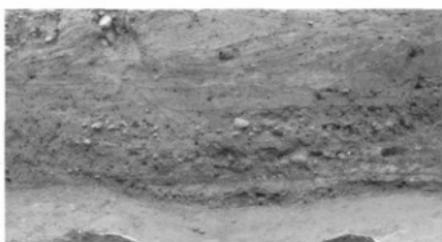
柱穴 SK09 断面（柱痕 南から）



柱穴 P28 底部に残る木杭根



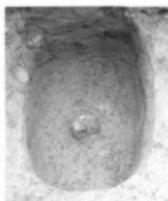
南壁土壘断面（白線マーカーが基底部下面 北から）



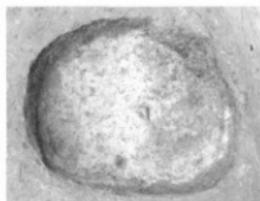
調査区南壁中央土壘基底部のくぼみ断面（北から）



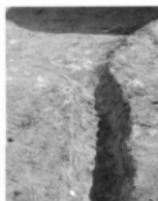
SK05 断面・遺物出土状況（北から）



土坑 SK04
遺物出土状況



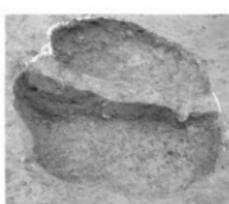
土坑 SK 11 底面焼土・木炭



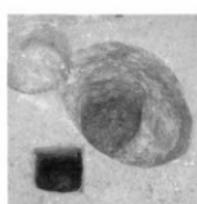
SD01 完掘状況
(北から) 側面・底
面が被熱・赤化



SD05完掘状況(北から)



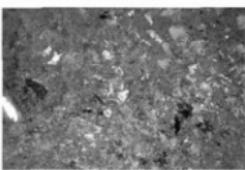
土坑 SK06 断面（北から）



SK18（右）・P40



くぼ地 SX01(北から)



くぼ地 SX01 底面木葉堆積状況



くぼ地 SX01 漆椀出土状況



くぼ地 SX01 筍出土(○印)



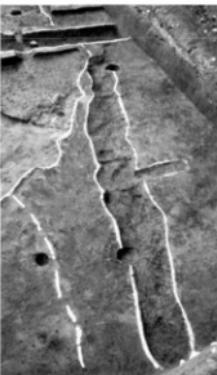
くぼ地 SX01 近景(北から)



調査区東壁土層断面（西から）



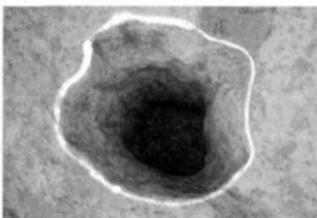
SX01・SK10 重複部土層断面（南から）



平安時代溝 SD08（東から）



くぼ地 SX03（北から）



SE01 井戸完掘状況

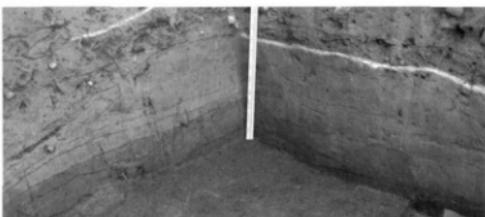


SE01 井戸土層断面（南から）

SE01 上部で確認した掘り方（南から） 左は土壠斜面土



平安時代くぼ地 SX02 完掘状況（西から）



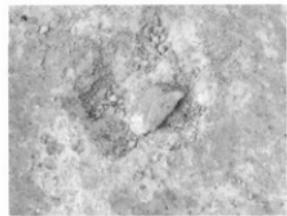
地山上面の水田痕跡（南東隅壁面 北西から）



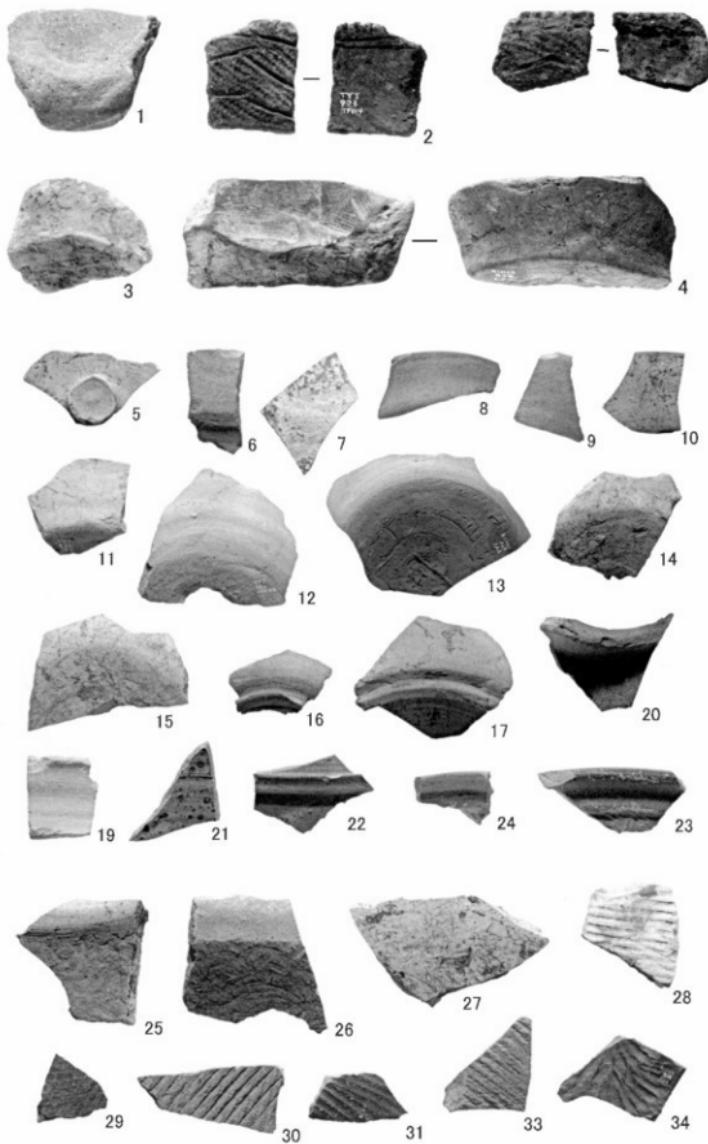
南壁中央地山掘下げトレンチ土層



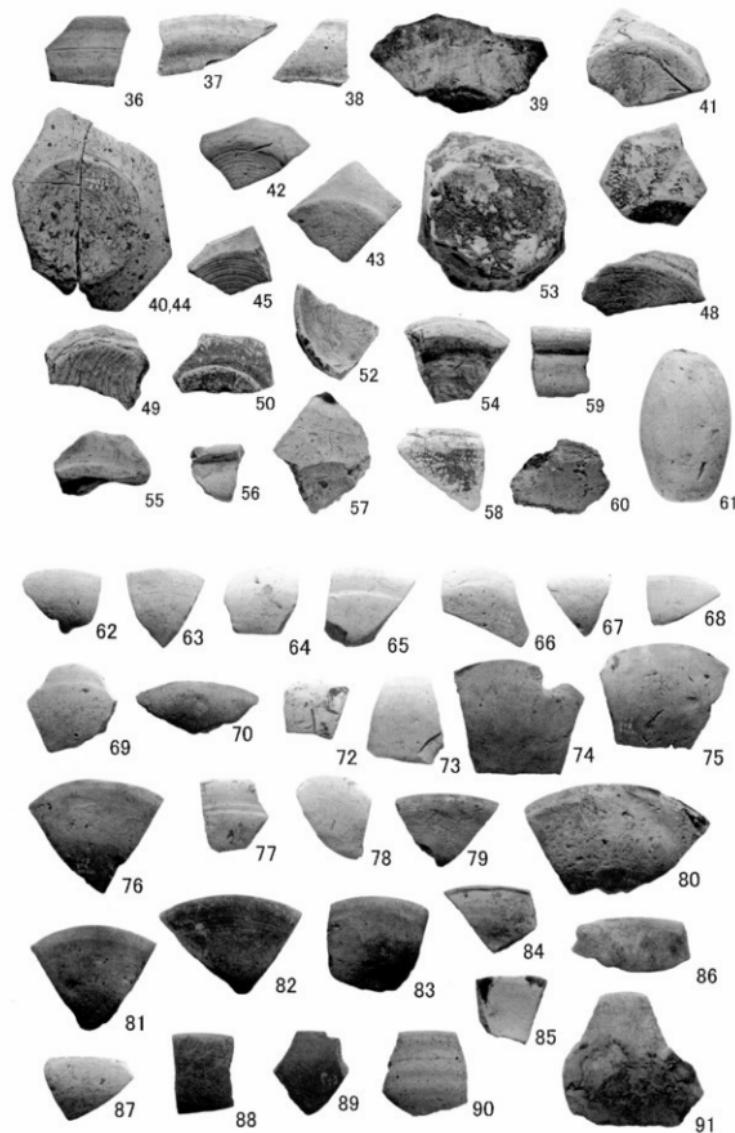
北壁地山掘下げトレンチ土層



地山上部に食い込んだ弥生土器

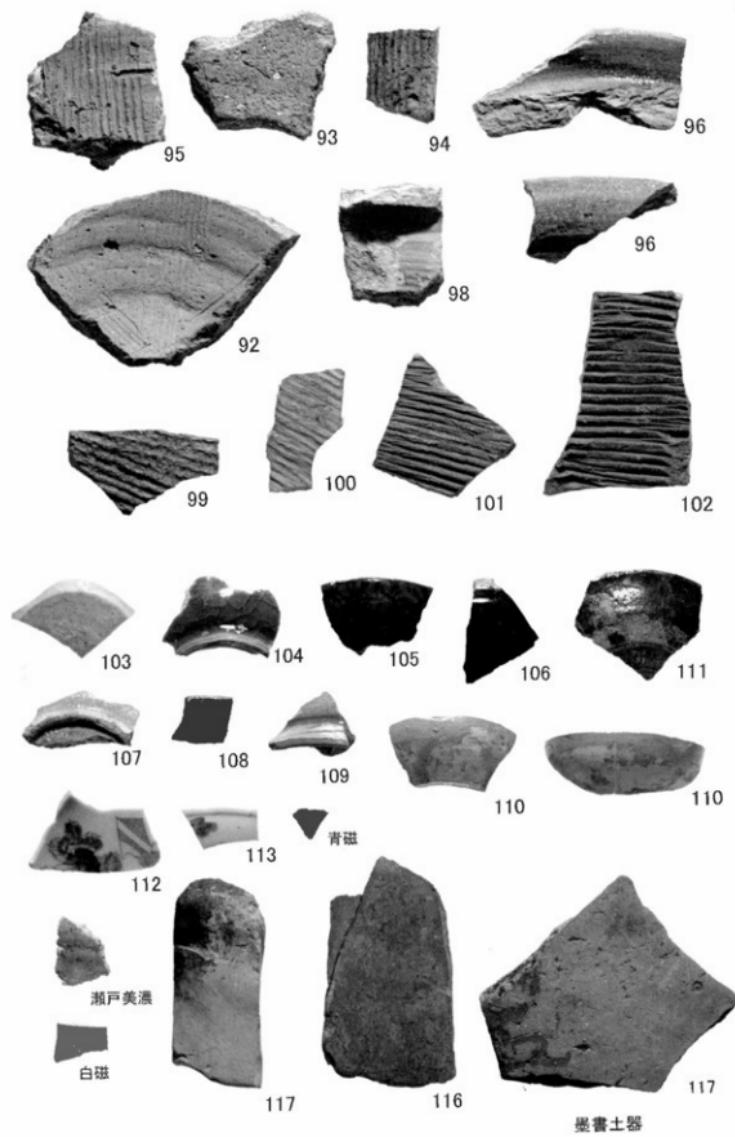


縄文土器・弥生土器・古代須恵器



古代土師器・かわらけ（中世土師器）

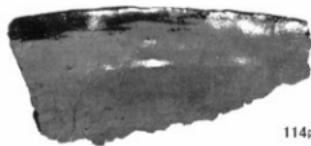
圖版三 二〇〇七年度調査 遺物(三)



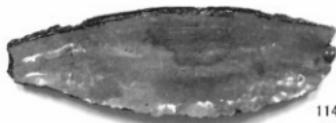
珠洲・中近世陶磁器・砥石



114



114内面



114



114内面



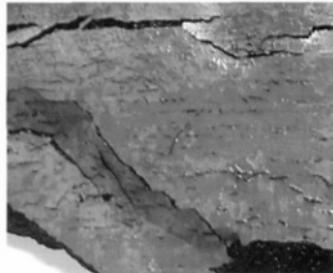
笄



裏面



浮彫文様復元



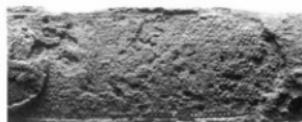
114上 外面赤漆細部



115 浮彫文様



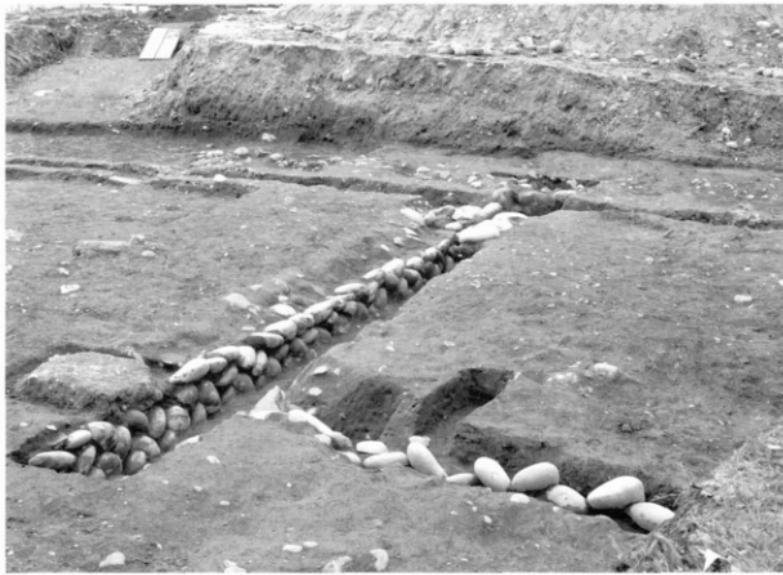
114上 木地部分



115 魚子地



上層面全景（南東から）



石組水路 S D 1（北東から）



石組水路SD 1（西から）



石組水路SD 1 西端部（東から）



石組水路SD 1 屈曲部（南から）



SK 1 遺物出土状況（東から）



下層面全景(南東から)



整地層検出状況（北東から）



整地層土層断面（南から）



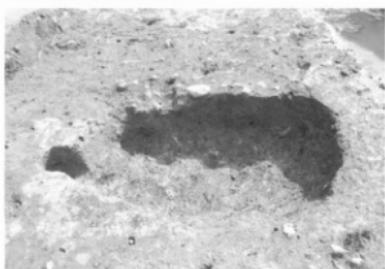
整地層土層断面（南から）



SK 2 完掘状況（南から）



SK 4 完掘状況（南から）



SK 6 完掘状況（東から）

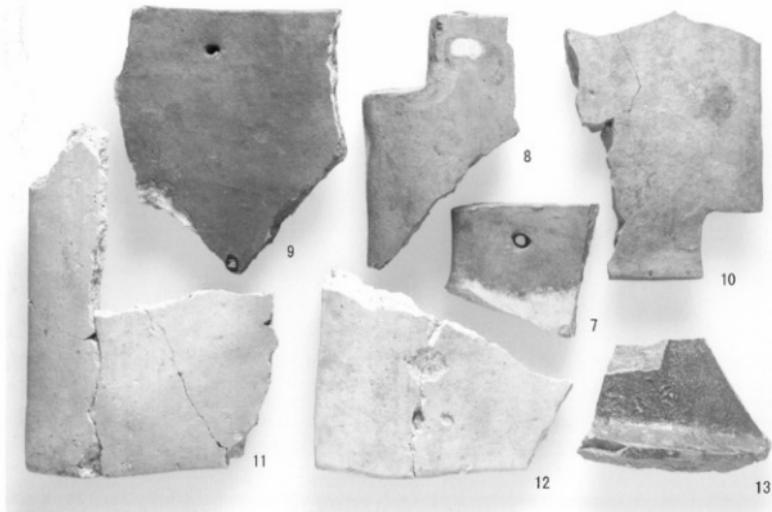
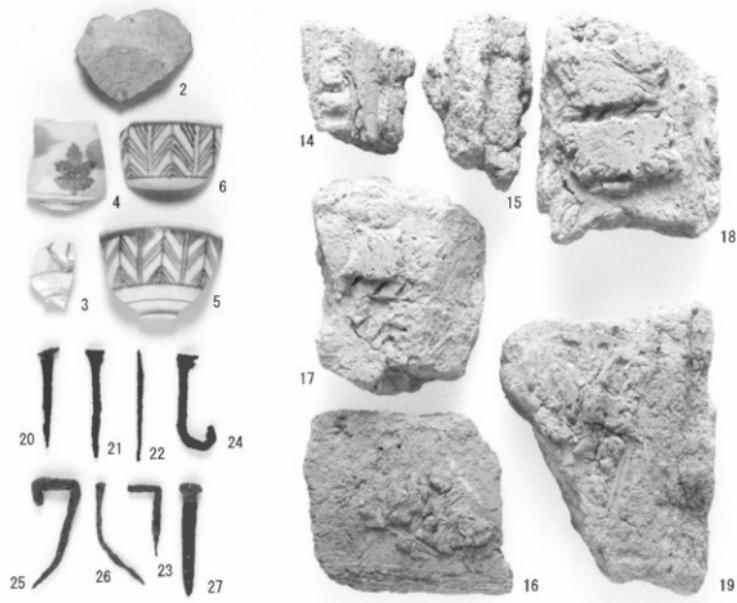


SK 7 完掘状況（南から）



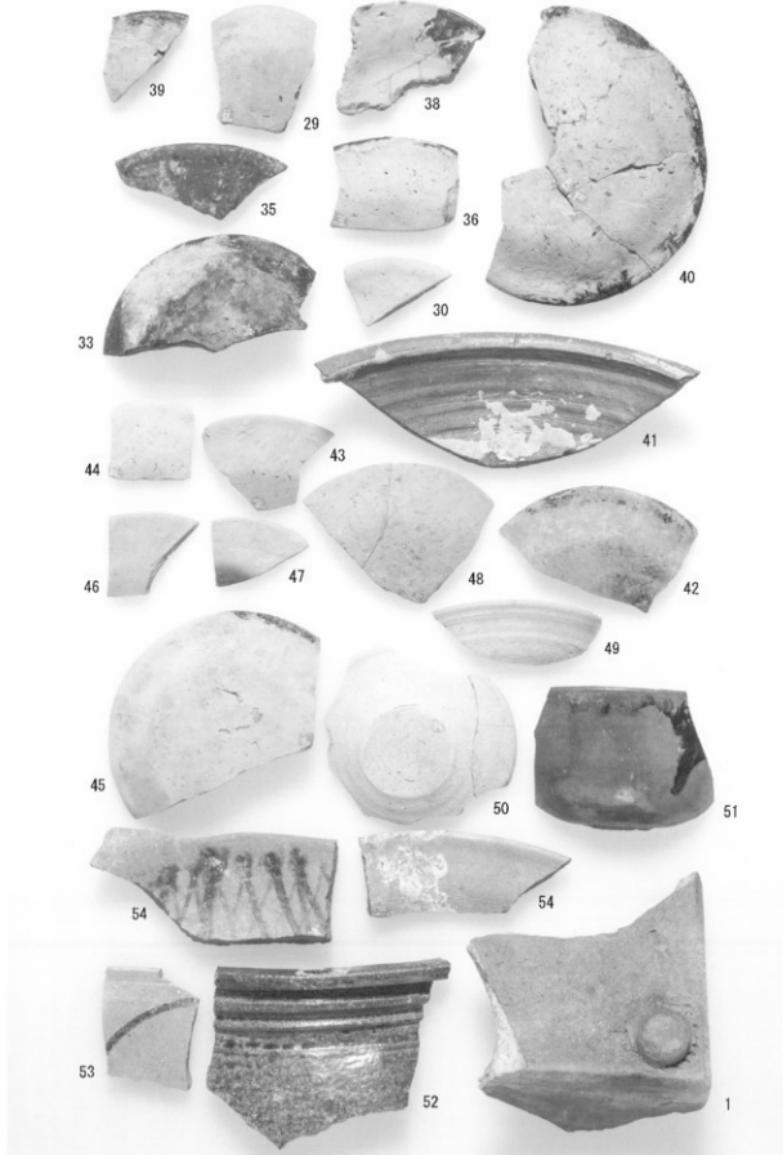
火輸出土状況（南東から）

圖版一九
二〇〇八年度調查
遺物（一）



SK 1 出土遺物

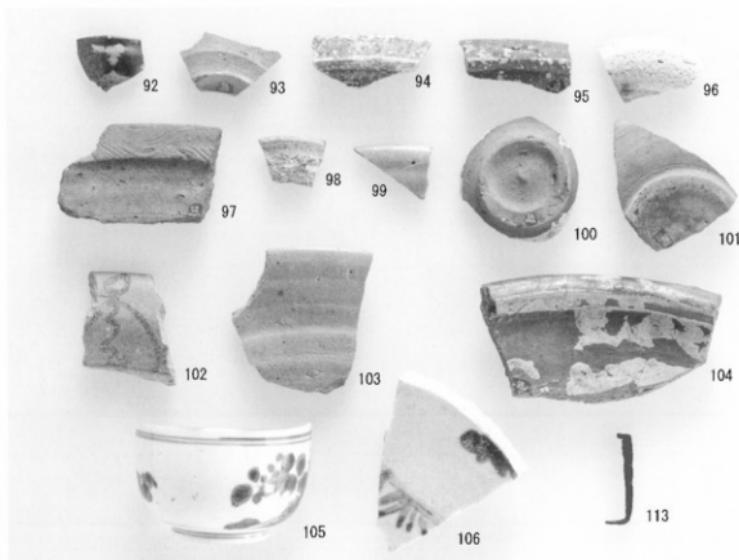
圖版二〇 二〇〇八年度調査
遺物(二)



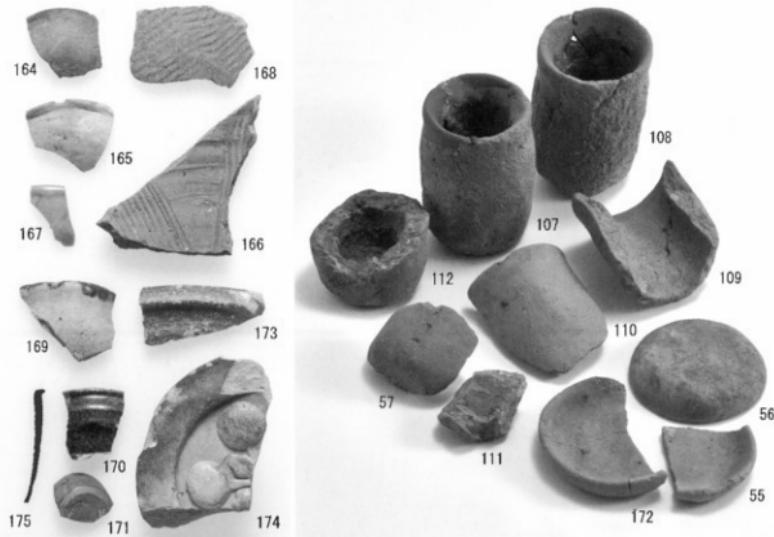
SK6・SK7・SD1出土遺物



整地層掘り込み出土遺物（1）

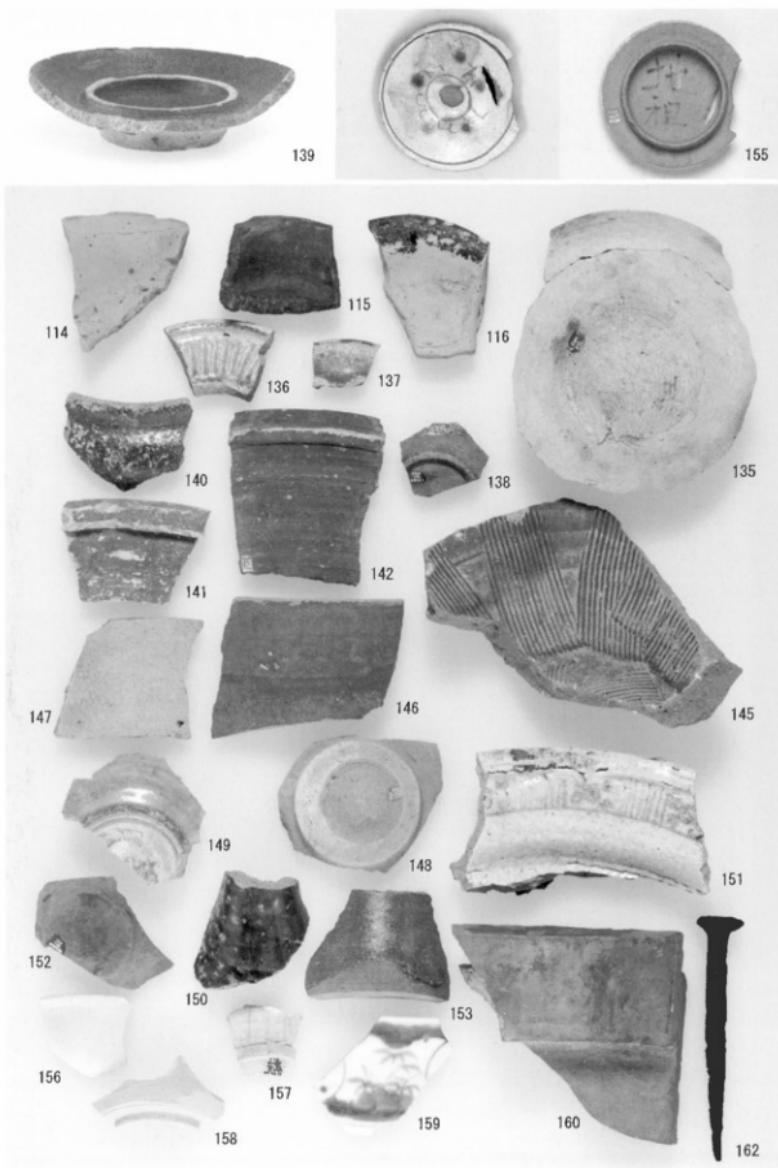


整地層掘り込み出土遺物（2）



整地層・搅乱出土遺物

焼塙壺



包含層（上層面-下層面間）出土遺物



A区全景（西から）



A区東壁土層断面（北西から）



B区全景（南東から）



B区SK 5・6（南東から）



C区全景（西から）



C区東壁土層断面（北西から）

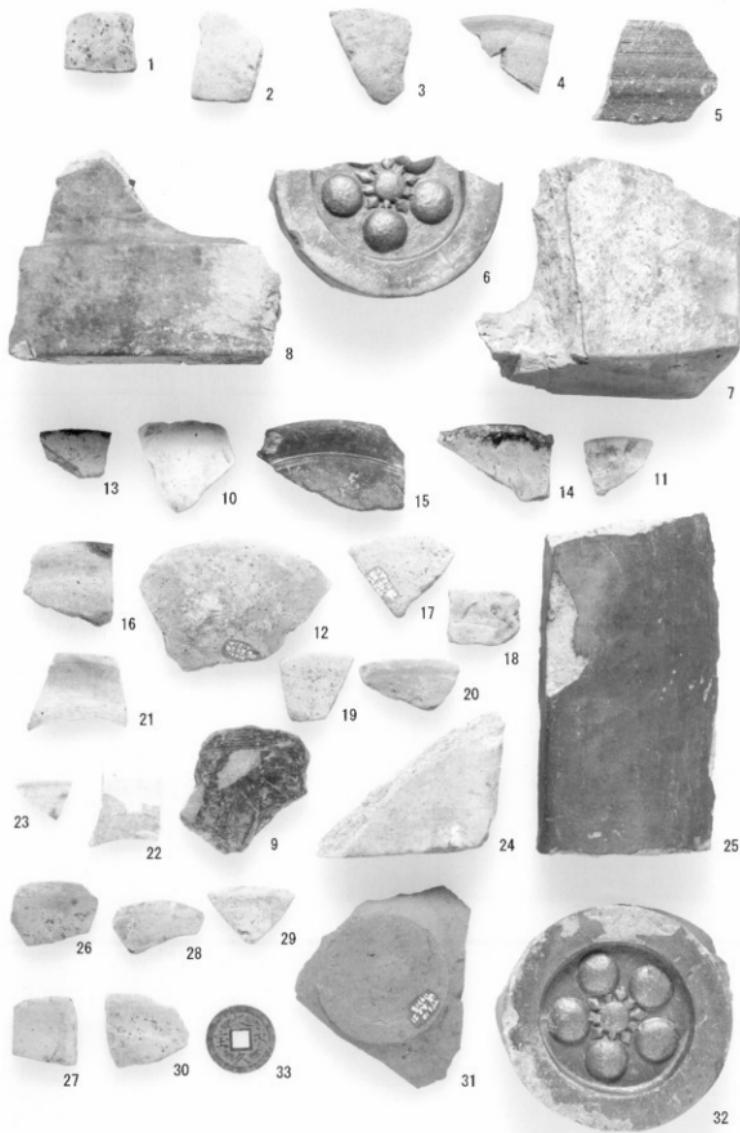


C区石積遺構 S X 1 (北から)



C区石積遺構 S X 1 (西から)

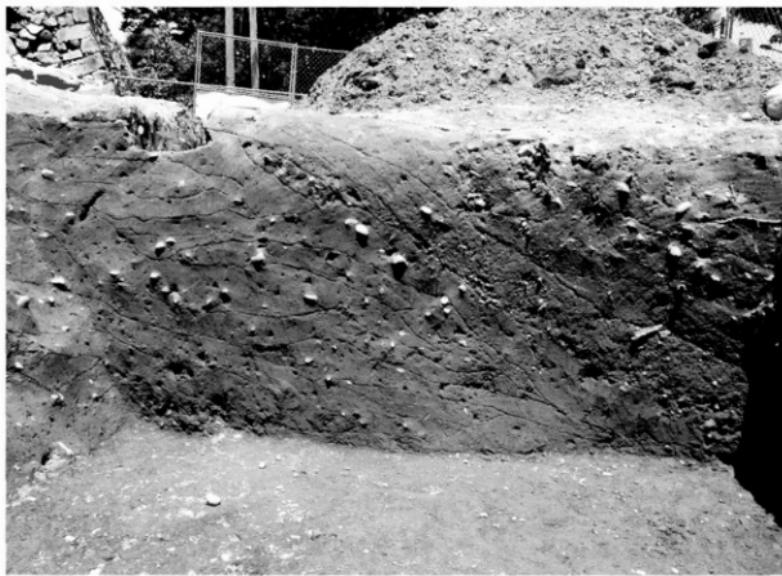
圖版二八
二〇一〇年度調查
遺物



出土遺物



調査区全景（東から）



北壁土層断面（南から）

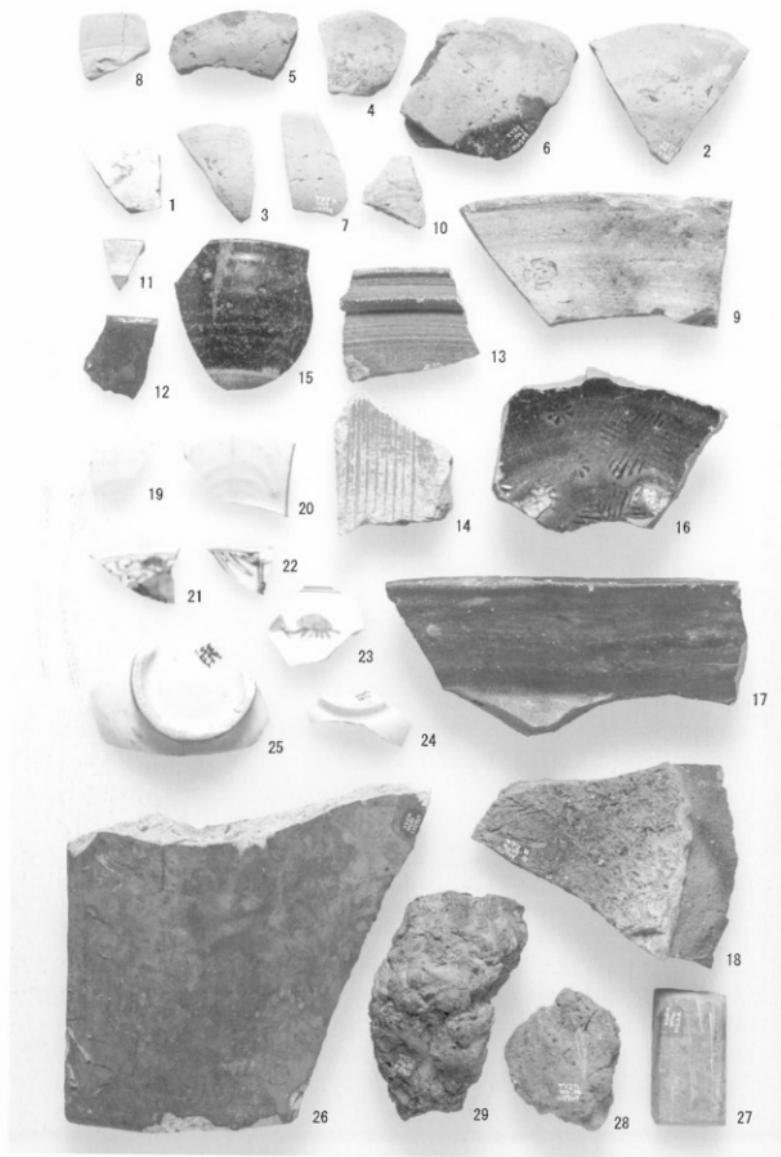


南壁土層断面（北から）



西壁土層断面（東から）

圖版三
二〇一一年度調查
遺物



出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	とやまじょうあとはくつちょうきはうこくしょ							
書名	富山城跡発掘調査報告書							
著者名	坂口公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	81							
編集者名	古川知明・野垣好史(富山市教育委員会埋蔵文化財センター)、松本浩一(東京農業大学)、佐々木由香・パンダリスダルシャン・中村賢太郎・伊藤茂・尾當大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林誠一・Zeur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・竹原弘展・藤根久・米田恭子(株式会社パレオ・ラボ)・高橋敦・田中義文・千葉博俊(パリノ・サーヴェイ株式会社)・岩木雅史(株式会社アーキジオ)							
編集機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター			有限会社毛野考古学研究所富山支所				
所在地	〒930-0091 富山市愛宕町一丁目2-24 Tel 076-442-4246			〒939-0361 富山県射水市戸磯1679-3人間山老番館A Tel 0766-57-1618				
発行年月日	西暦2016年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
市町村	遺跡番号	市町村	遺跡番号					
富山城跡	富山市本丸	16201	2010442	36度 41分 31秒	137度 12分 39秒	20070117～ 20070129	68	城址公園 整備工事
						20071016～ 20071127	112	
						20090223～ 20090331	118	
						20110302～ 20110330	87	
						20110628～ 20110719	25	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
富山城跡 (2006年度調査)	城館	戦国時代		土師器			土櫓通路面は近世3面、 近代3面を検出	
		江戸時代	通路面、溝	越中瀬戸、伊万里、焼し瓦(平瓦)				
富山城跡 (2007年度調査)	散布地	織文時代		織文土器(中期)			平安以前の洪水による 再堆積土から出土	
		弥生時代		弥生土器(天王山式)				
	集落	古代	くぼ地、溝	須恵器、土師器、製塙土器、 土蟠			自然のくぼ地	
		室町～戦国時代	くぼ地、溝、井戸、 土坑、ピット	土師器、墨書き土器(土師器)、 珠洲、瀬戸美濃、漆器(椀)、斧、 砥石、炭化穀類				
	城館	江戸時代	土壘、杭跡	越中瀬戸、伊万里、焼し瓦			土壘断面構造を確認	
近代		方形板組土坑	伊万里、瓦、蓄電池?、ガラス製品、釉吹貯器					

富山城跡 (2008年度調査)	城館	戦国時代	整地層	土師器、青磁、珠氈	16世紀後半～17世紀の下層面遺構と、明治期の上層面遺構を検出
		江戸時代	土坑、ピット	土師器、越中瀬戸、瀬戸美濃、志野、唐津、伊万里、白磁、瓦質土器、焼垣壇、火輪、鉄釘、鉄滓	
		明治時代	石組溝、土坑	桟瓦、鉄釘、土壁	
富山城跡 (2010年度調査)	城館	江戸時代	土壘	土師器、越中瀬戸、伊万里、瓦、銅錢	本丸南辺土壘の構造と、江戸期から現代までの変遷を確認
		明治時代～昭和時代	玉石積遺構		
富山城跡 (2011年度調査)	城館	江戸時代	土壘	土師器、味洲、越中瀬戸、瀬戸美濃、越前、白磁、伊万里、瓦、砥石、粘土塊	本丸東辺土壘の構造と補修状況を確認
要 約		(2006年度調査)本丸と二ノ丸を結ぶ土橋の調査である。工事に伴う地表下0.6mまでの遺構状況を確認した。江戸時代は3面の硬面化、明治以降は現代まで3面の硬面化を確認した。硬面化面は土橋通路面である。			
		(2007年度調査) 本丸東辺土壘の調査である。土壘上部は欠失し下部高さ1.7mが残存していた。中央部は版築による水平堆積とし、中央基底部には乱杭が打たれた可能性がある。斜面部は斜度40°度以下で積み上げている。土壘直下には平安から戦国時代の遺構面が3面確認された。平安時代は9世紀に大きなくぼ地があり、中世期には構造のくぼ地に大量に炭化穀類や遺物が発見された。笄や漆器の存在及び井戸の検出は、至近に武家居館の存在を示唆する。平安から中世のくぼ地では、水環境を利用し水耕耕作が行われていた可能性がある。平安時代の地山土は、弥生後期以降発生した洪水の再堆積土である。			
		(2008年度調査) 本丸の調査である。16世紀後半～17世紀の下層面と明治期の上層面がある。下層面は、薄い土層を固く盛った整地層や土坑を検出した。整地層は中世富山城跡の道路面、建物等の基礎工事、土壘盛土などの可能性がある。遺物は10点の焼垣壇の出土が特徴される。上層面は、石組溝と廃棄土坑がある。廃棄土坑からは、明治32年の大火で焼失した江戸時代の建築物に使われていたとみられる桟瓦・釘・土壁等が出土した。			
		(2009年度調査) 富山城で唯一土壘の高まりが現存する本丸南辺土壘の調査である。土壘の盛土状況や斜面角度が約40°となることを確認したほか、江戸時代から現代までの土壘の変遷が明らかになった。土壘の南北斜面は戦後石積みに改変された際に削平され、築を兼ねているが、内部はおおよその基本構造を残していることが確認できた。			
		(2010年度調査) 本丸東辺土壘の東斜面部の調査である。土壘盛土は4群に大別でき、複数回の補修がなされた可能性が高い。隣接する2007年度調査成果とあわせ、本丸東辺土壘の下部断面構造が明らかになった。			

富山市埋蔵文化財調査報告書 81

富山城跡発掘調査報告書

—城址公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1) —

2016(平成28)年3月31日発行

発 行 富山市教育委員会

編 集 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

有限会社毛野考古学研究所富山支所

印 刷 中村印刷工業株式会社

